

『梵語仏典の研究I』 第5章ゲラ刷り(1993年作成、出版されず)

岡野, 潔
九州大学大学院人文科学研究院

<https://hdl.handle.net/2324/7331652>

出版情報 :
バージョン :
権利関係 :



三校

015印 1~27
※1章1節

□§1. 初期の Avadāna 集成

□ 1. Avadānaśataka

□ Pūrṇa[pra]mukhāvadānaśataka (プールナより始まる)アヴァダーナ百集

□ Burnouf (1844)¹⁾ は『インド仏教史序説』において、Hodgson が1837年にバリのアジア協会に送った64写本の中にあった、1本の Avadānaśataka [Avs.] の写本 (Filliozat 9-10) に基づき、□ Avs. の第7章 Padma を全訳し (pp.178-182, 2nd ed.), また第36・96・99・100章を部分訳して□ 用いた。

□ Burnouf の死後、同じ写本に基づいて Avs. を本格的に研究したのは、L. Feer である。

□ Feer (1866)²⁾ は、チベット大蔵経カンギュルから Kalyāṇamitrāsevanasūtra を仏訳し、Avs. の□ 梵本と比較した。

□ Feer (1869)³⁾ は Avs. 第15章 Prātihārya のテキストを発表した。

□ Feer (1873)⁴⁾ は Kalyāṇamitrāsevanasūtra が入っている Avs. 第37章 Śaśa と第40章 Subhadra の内容を紹介し、チベット大蔵経カンギュルの Kalyāṇamitrāsevanasūtra は、Avs. 第□ 40章 Subhadra からの抜粋であると考えた。

□ Feer (1878)⁵⁾ は Avs. 第36章 Maitrakanyaka を仏訳し、同時に Avadānakalpalatā (92章? □ Feer の用いたバリ写本では24章)、Divyāvadāna (38章?) の母子の別れの挿話も仏訳した。ま□ た関連して Dvāviṃśatyavadāna の中の Dhātustejas の話 (10章) の梗概を紹介し、パーリ・ジ□ ャータカの並行するいくつかの物語を仏訳した。

□ Feer (1879)⁶⁾ は Avs. の100のアヴァダーナの内容を初めて紹介し、Avs., Kalpadrumāvadāna, □ Ratnāvadānamālā, Dvāviṃśaty-avadāna に含まれる話の対照表を作った。

□ また R. Mitra (1882)⁷⁾ もほとんど同時に、ベンガル・アジア協会の Hodgson 写本の報告たる □ 『ネパールの梵語仏教文献』の中で、Avs. の個々の章の梗概を明らかにした。なお、Mitra は写 □ 本のコロフォンに Avs. の編者として Nandīśvara Ācārya の名を見出した。この名は Feer (18 □ 91) p.xxiii では Thandīśvara Ācārya と読まれ、Speyer の刊本 (II, p.206, note 3) でも □ Thap- dīśvara Ācārya と読まれたが、Speyer (1909) p.xx が解説するように、この名前を含 □ む1文は不明瞭で、かつ対応するチベット訳にも欠けており、Thapdīśvara Ācārya という編 □ 者(?)の名の伝承をどこまで信頼することができるかが問題となる。その1文は次のとおり：

林
凡
語
仏
典

70

- samāptam ca avadānaśatakam hy atrayam(?) sugatabhāṣitam thaṃdiśvarācārya-
 □ pūrvam idānīm prakāṣitam//
- Speyer は, Thaṃdiśvara Ācārya の名を, 編纂者というより, Avś. のテキストを忘却から救
 □ った人物の名ではないかと解釈する。
- Feer は1880年から1884年にかけての一連の論文で, Avś. 研究の成果として, 10部類から成る
 □ Avś. の, それぞれの部類の扱うテーマに沿って, 仏陀や独覚や阿羅漢や天や餓鬼などの生の状
 □ 態と, その生存に至る条件を考察した。Avś. の部分的な翻訳が論文に付けられている。すなわ
 □ ち Feer (1880) の論文「いかに仏と成るか」では, 第1部類(1~10章)の例として第8章 Pañ-
 □ cāla を, また Feer (1881a) の論文「いかに独覚と成るか」では第3部類(21~30章)の例として
 □ 第24章 Daśasīras と第23章 Cakra を, Feer (1881b) の「いかに阿羅漢と成るか」では第9部類¹⁰⁾
 □ (81~90章)の例として第82章 Sumana を, Feer (1882) の「阿羅漢の不幸」では第10部類¹¹⁾(91~
 □ 99章)の例たる第94章 Lekuñcika と, ならびに, 第100章に代わって例外的にこのグループに属
 □ すると見做される第50章の Jāmbāla を, Feer (1883) の論文「いかに女の阿羅漢になるか」で
 □ は第8部類(71~80章)の例たる第73章 Śuklā と第80章 Virūpā を, Feer (1884a) の「いかに天
 □ となるか」では第6部類(51~60章)の例として第56章 Śuka と第57章 Dūta を, Feer (1884b)
 □ の「いかに餓鬼となるか」では第5部類(41~50章)の例として第43章 Pāniya と第49章 Putra
 □ を仏訳している。
- Feer (1884c)¹²⁾ は, 上の考察で残った第2部類(11~20章)と第4部類(31~40章)を, 「ジャータ
 □ カの的なアヴァダーナ」と名付け, 第2部類の例として第12章 Stambha と第11章 Nāvika を,
 □ また第4部類の例として第33章 Dharmapāla と第39章 Anāthapiṇḍata を仏訳した。さらに,
 □ 例外的に第75章, 81章, 97章も「ジャータカの的なアヴァダーナ」に属すると見做されるが, 第97
 □ 章 Virūpa が仏訳された。
- 整理すると, Avś. の10の部類は次のような内容的区分をもつ (Feer による)。¹³⁾
- | | | |
|--------|-------------------|---------------------|
| □ 第1部類 | 将来の仏陀 | 1~10章 |
| □ 第2部類 | ジャータカ (非古典的) | 11~20章 |
| □ 第3部類 | 独覚 (2話は過去, 8話は未来) | 21~30章 |
| □ 第4部類 | ジャータカ (古典的) | 31~40章 |
| □ 第5部類 | 餓鬼 | 41~50章 |
| □ 第6部類 | 天と畜生 | 51~60章 |
| □ 第7部類 | シャカ族の阿羅漢 | 61~70章 |
| □ 第8部類 | 女の阿羅漢 | 71~80章 |
| □ 第9部類 | 非の打ち所のない阿羅漢 | 81~90章 (100章) |

- 第10部類 咎ある、不幸な阿羅漢 ……91~99章
- 上の Feer の一連の論文で、Avs.の全体の5分の1の訳が発表されたが、さらに1891年には、¹⁹⁾
- Feer は「ギメー博物館年報」の第18巻として、Avs. の全訳を出した。この仏訳は主に Biblio-
- thèque Nationale の梵文写本1本 (Filliozat 9-10) ならびにチベット訳に基づいている。現在に
- おいても、Feer の仏訳は、Avs. の唯一の全訳でありつづけている。
- Feer はこの仏訳の序文で、初めてアヴァダーナというジャンルを定義づけた。そして、専ら
- Avs. に基づいて、アヴァダーナ作品を内容的に5種の型に分けた。5種とは、
- (1) 本来のアヴァダーナ (過去のアヴァダーナ)
- (2) ジャータカのアヴァダーナ
- (3) 現在のアヴァダーナ
- (4) 未来のアヴァダーナ (授記経 vyākaraṇa としてのアヴァダーナ)
- (5) ((1)と(4)の) 混合したアヴァダーナ
- である。次いで Feer は、Avs.と、Kalpadrumāvadānamālā, Ratnāvadānamālā, Aśokāvadāna-
- mālā 等の後代の Avs. 系列の avadāna-mālā 類との関係を初めて指摘した。Kalpadrumāvadā-
- namālā (Ms. Filliozat 26-27) は全30章のうち、(第22章を除く) 初めの24章が、Avs.の次の章
- と内容的に対応する：
- 100, 1, 11, 21, 41, 51, 61, 71, 81, 91.
- 2, 12, 22, 42, 52, 62, 72, 82, 92, 54, 15, 33, 16.
- また Ratnāvadānamālā (Ms. Filliozat 104-105) は全34章のうち、(第6・8・16章を除く) 初
- めの21章が、Avs.の次の章と対応する：
- 3, 13, 23, 32(?), 43, 53, 63, 73, 83, 93.
- 4, 14, 24, 44, 55, 64, 74, 84, 94.
- 以上から、Kalpadrumāvadānamālā は Avs.の各部類の第1と第2の話を、また Ratnāvadāna-
- mālā は、その続きとして、Avs.の各部類の第3と第4の話を、集めて詩形にした集成であると
- とがわかる。このことから、Feer は、Kalpadrumāvadānamālā と Ratnāvadānamālā は両者と
- も本来、Avs.を韻文にしたある巨大な avadānamālā の作品の一部であったと推定した。その巨
- 大な作品の名は、Kalpadrumāvadānamālā の末尾のコロフォンに ity aśoka-upaguptasambhā-
- raṇe kalpadrumāvadānamālā samāptā //とあることから、Aśoka-upagupta-sambhāraṇa (アシ
- ヨーカとウバグプタの会談) という名ではなかったかと考えられた。
- このほか、Aśokāvadānamālā (Ms. Cambridge Add.1482) も、全27章のうち、その第14章か
- ら第21章までの部分が、Avs.の次の章に対応する：
- 10, 20, 30, 50, 60, 70, 80, 90

□このため、Aśokāvadānamālā も、同系列の集成である可能性がある。Feer はこのほか、Avs. □と密接な関係をもつ集成として Dvāviṃśaty-avadāna を紹介する。しかし上の3者の avadāna- □mālā のように、組織立った形で Avs. の利用が見られるわけではない。

□ Feer の仏訳の後に、オランダの J. S. Speyer が Avs. の原典を出版した。

□ Speyer (1899)²⁰⁾ は、Avs. の原典テキストを出版するため写本を調べたが、その一成果として、 □Burnouf と Feer がともに誤読した第100章 Saṃgīti の「仏陀世尊が般涅槃されて200年後に、 □パータリプトラの都城にアショーカ王が統治した」という訳文の、「200年後」の語を「100年後」 □に訂正すべきことを指摘した。Burnouf らの誤読は、...atha dvitīyaṃ // varṣaśata-parinirvṛte □buddhe...という文の、ダンダ (//) に切られた atha dvitīyaṃ の語を、後ろの文に繋げて読ん □でしまったことに起因する。これでアショーカ王を仏滅後100年におく北伝の伝承に、Avs. も従 □うものであることが確かめられた。Speyer はこの文の直前の、仏陀が入滅されたときに、僧や □神々によって詠まれた詩節について、梵語の Mahāparinirvāṇasūtra からの借用と考え、パー □リ本との比較を行った。

□ そして Speyer (1906, 1909)²¹⁾ は、Avs. の原典テキストを、ロシア帝国学士院編集の Bibliotheca □Buddhica 叢書の第3巻として、2分冊で出版した。Speyer は、4本の Avs. 写本に基づいて校 □訂を行った。すなわち、Cambridge の写本 B (Bendall Add.1611) と、Feer の用いた写本 P □(Filliozat 9-10)、ならびに写本 C (Bendall Add.1386) と写本 D (Thomas 7797) である。この □うち、B 写本は、CDP の3本の写本に基づいたオリジナル写本であった。写本 B は D. □Wright によってネパールで蒐集されたもので、A.D.1645年に筆写された紙写本である。B 写 □本の写経生が落とした Avs. 第5章 Soma は永久に失われてしまった。

□ Speyer が第2分冊につけた長い序文は、岩本 (1967) の『序説』が出るまで、アヴァダーナ文 □献についての最も包括的な記述となった。彼は Feer の後を受けてアヴァダーナの語の定義を行 □ない、また Feer がアヴァダーナを内容的に5種に分類したのに対して、Speyer は歴史的にアヴ □ァダーナを3段階に分類した。3段階とは、

□ (1) 第1段階。律あるいは経の中に譬喩として挿入されたアヴァダーナ。

□ 例: Divyāvadāna

□ (2) 第2段階。聖典と認められた、純粋なアヴァダーナ(集)。

□ 例: Avadānaśataka, Karmaśataka, pāli Apadāna

□ (3) 第3段階。聖典が確定した後には作られた、文学めいたアヴァダーナ集。

□ 例: Jātakamālā, Avadānakalpalatā, avadānamālā 文献

□である。また Speyer は序文の第2節で、Feer によって先鞭をつけられた Avs. と Karmaśata- □ka との関係、ならびに Avs. と avadānamālā 文献の関係について、詳しい掘り下げを行った。

- 彼は Avs. 系列の avadānamālā 文献の, Avs. への依存性と大乘的な性格を論じ, またヒンドゥー教をつよく意識していることがうかがえる Kalpadrumāvadāna 第11章の Yaśomatī の仏讃 (stuti) の校訂テキストを示した。avadānamālā 文献はヒンドゥー教のプラーナ文献に精神的な雰囲気が似ており, A.D. 400~1000年の成立かと推測される。Speyer は avadānamālā 文献の見本として特に, Avs. 第91章を詩形に改稿した Kalpadrumāvadāna 第10章の校訂テキストを挙げている。さらに彼は Feer に扱われなかった新たな文献 Vicitrakarṇikāvadāna を紹介し, □その全32章の梗概を示した。
- H. Oldenberg (1912)²²⁾ は, Divyāvadāna において文体 A と文体 B を確かめた後に, Avs. 第100章 Saṃgīti 中の, 根本有部の阿含に基づくらしい, パーリの Mahāparinibbānasuttanta と対応している部分を, 吟味した。
- J. von Ott (1913)²³⁾ は Avs. 第45章 Maudgalyāyana と第100章 Saṃgīti を独訳した。
- Turner (1913)²⁴⁾ は Avs. を主なソースとしてネパールで成立した Dvāvimśatyavadāna の言語学的特徴を研究した。
- Przyłuski (1918-20)²⁵⁾ は, 研究の第1部(1918)で, Avs. の第100章 Saṃgīti の冒頭の, 古い資料に基づくらしい仏陀の入滅の部分, とくに本質的な部分である偈頌を中心に, 根本有部の律蔵と, 同じく根本有部に属するらしい「雑阿含經」(大正 No.99), ならびにパーリの Saṅgāthavagga や Mahāparinibbānasuttanta の, 並行し対応する伝承と, 比較を行った。Avs. は, 根本有部の Dīrgha Āgama「雑阿含經」(大正 No.99) と起源を等しくし, 偈頌ばかりから成る古く簡潔な Parinirvāṇasūtra のヴァージョンに属している。
- Przyłuski (1936)²⁶⁾ は Avs. 第76章と Karmaśataka 第7章の話を A グループ, Avs. 第79章と Karmaśataka 第8章の話を B グループと名づけ, それらと Karmaśataka 第61章の話を比較することによって, Karmaśataka 第61章の話が古形であり, それが後に B グループの話に変容したが, その変容の途中で, A グループの話の影響があったと推定した。また変容の過程には, □(1)不道德性の浄化, □(2)相似による類似話の転移, □(3)戒律の尊重, などの原理が働いたと見られる。
- Waldschmidt (1944, 48)²⁷⁾ は, 中央アジア出土の梵文 Mahāparinirvāṇasūtra と, 他の漢訳やパーリで伝わる涅槃經のヴァージョンとを比較研究したが, Avs. をも参照した。次のように Mahāparinirvāṇasūtra は, Avs. と対照せしめられる。
- MPS Vorgang 32a—Avs. II, 197.5-14
- MPS Vorgang 40a-c—Avs. I, 228.3-234.6
- MPS Vorgang 40d (tib.-chines. Sondertext V. a, b)—Avs. I, 234.8-237.2
- MPS Vorgang 40d (tib.-chines. Sondertext V. d, e)—Avs. I, 237.3-240.12

- ㉑ MPS Vorgang 44a—Avs. II, 198.1-199.9
- ㉒ MPS Vorgang 49c—Avs. II, 199.11-200.6
- ㉓ Fa Chow (1945)²⁸⁾ は Avs. と漢訳「撰集百緣經」(大正 No.200)とを比較した。この漢訳は支謙
 ㉔によって西暦220~253年の間に訳されたものである。漢訳は梵本とおおむね一致しているが、
 ㉕Fa Chow は特に漢訳の百話のうち、梵本に欠けるもの、梵本と一致しないものを選んで、英訳
 ㉖を行った。訳された漢訳は、5話・8話・21話・24話・30話・80話・89話・98話・99話・100話
 ㉗である。
- ㉘ この Fa Chow の翻訳の後ろには、Bagchi (1945)²⁹⁾ の「ノート」が付けられ、Avs. の梵本と漢
 ㉙訳の相違が意味するものを考察している。Bagchi によれば、漢訳と Avs. とを比較すると、漢
 ㉚訳の原本は飾りなく話だけからなる簡素なものであり、特に、梵本に頻繁に出てくる長い cli-
 ㉛chés (ステロタイプな文章) が漢訳のヴァージョンには見られない、という現象が観察される。
- ㉜ Bagchi は Avs. 第100章 Samgīti を漢訳と比較することによって、Avs. は本来、根本有部に属
 ㉝する作品ではなかったが、3世紀以後に根本有部によって改訂されたことがわかと指摘し、こ
 ㉞の根本有部による改訂において、Avs. の中に根本有部特有の長い clichés が入り込んだのではな
 ㉟いかと考えた。
- ㊱ Thomas (1950)³⁰⁾ は、小さな梵語仏教文献のアンソロジー集を編んだが、Avs. からの抜粋訳も
 ㊲入っている。XIV「グプティカの論説」は Avs. 第96章から、XVIII「仏陀の入滅」は Avs. 第
 ㊳40章・100章から、また XIX「菩薩の誓願」は第7章から、XX「仏陀の性質」は第18章からの
 ㊴英訳である。
- ㊵ 干潟龍祥 (1954) (改訂1978)³¹⁾ は『本生経類の思想史的研究』の附表「本生経類照合全表」で、
 ㊶Avs. についても、主だった並行話を調べている。パーリの本生話に合するものは甚だ少なく、
 ㊷漢訳賢愚経に合するものが割に多い。干潟は、Avs. と賢愚経の間には極めて密接な関係があり、
 ㊸何れか一方が他方を知っていたか、又は同一の話がそれぞれ取り入れられたかであろう、と結論
 ㊹づける。
- ㊺ Vaidya (1958)³²⁾ はインドから Avs. のテキストを刊行した。専ら Speyer 本に基づいているが、
 ㊻多少の修正が施されたという。Speyer 本の写本の異読はほとんど載せられていない。付録の第
 ㊼1 は、Kalpadrumāvadānamālā の第10章 Subhūtyavadāna のテキストで、Speyer 刊本の序文
 ㊽にあったものの再録である。第2付録には Avs. に見られる26種の、ステロタイプな物語の構成
 ㊾要素たる文章(clichés)が挙げられた。
- ㊿ 岩本裕 (1962) (改稿1967)³³⁾ は、Avs. の説話形式を組み立てている重要な構成項目を調査して、
- ㉑ ① 仏の微笑の描写
- ㉒ ② 「業は百劫を経るとも消えず」の偈頌

- ③ 前世物語
- ④ 過去仏の名
- ⑤ 業に関する教説

④のうち、②③④⑤を具えている形式が、アヴァダーナの完成された形式と認められることを明らかにした。そしてアヴァダーナの内容を、「仏弟子あるいは敬虔な信者を主人公とし、その前世の物語に於いて過去七仏の誰かが登場する説話」と定義した。このような形式と内容をもつ「狭義のアヴァダーナ」が、Avs.の中核部分であると考えられるが、それはAvs.の第60章～99章である。また、岩本はAvs.と、その異系の伝本と見做される漢訳「撰集百緣経」との比較を行い、Avs.第100章 Samgītiに見られる改作の跡から、Avs.はガンダーラ有部に属し、「撰集百緣経」はマトゥラー有部に属すると推測した。

④ Vaudeville (1964)³⁴⁾は、Avs.第100章 Samgītiを研究した。第100章 Samgītiは、(a)仏の涅槃と(b)スンダラの現在物語と(c)過去物語との三つの話に分けられるが、(a)と(b)の結びつきがよくわからない。Vaudevilleは、本来は二つの異なる伝承、すなわち一方では(a)+(c)の伝承が、他方では(b)の伝承があり、Avs.の編者によって両方が結び合わされて、漢訳「撰集百緣経」に見られるような形になり(ただし漢訳では(a)が離脱した)、さらにアショーカ=ウバグプタ説話の両方に合うように修正されて、現在の梵本Avs.の形になったと推測する。

④ 奈良康明(1966)³⁵⁾は、中村元編の『仏典I』の中に、Avs.から第36章 Maitrakanyaka、第41章 Gudaśālā、第84章 Tripiṭaを和訳した。同じ3章の翻訳は、奈良(1988)³⁶⁾の『仏弟子と信徒の物語 -アヴァダーナ-』に、若干改訂して収められた。

④ Handurukande (1982)³⁷⁾は、ベンガル・アジア協会の Pāṇiyāvadāna という書名の、西暦1309年に筆写された1頁葉写本(Śāstrī 26)を、Avs.第43章 Pāṇiyaに同定した。彼女はその物語を英訳し、並行資料として Ratnāvadānamālā 第4章と Dvāviṃśatyavadāna 第13章を紹介した。

④ Hartmann (1985)³⁸⁾は、有部と根本有部とに用いられる梵語の語形の違いを指摘した Hinüber や Sander や Simson による研究成果を利用して、Avs.がどちらの有部に属する資料かを、調査し、Avs.の語形が全く根本有部の使用する形に合うことを報告した。さらに Hartmann は Avs.の中に挿入されている阿含の借用部分を、中央アジア出土の有部の断片資料とつきあわせてみて、両者が合わないことを確認した。これらのことから、梵本Avs.は根本有部に属するらしいことが知られる。ただしそれによって、Bagchi (1945)が指摘したような、後からの根本有部による改訂である可能性が、排除されたわけではない。

④ なお『仏教説話大系 第26巻 アバダーナ物語(二)』³⁹⁾にはAvs.から第10・21・50・59・69・84・98章が抄訳された。

④ Skt.MSS.: Bendall Add.1386[→MS.D], 1611[→MS.B], 1680-II; Filliozat 9-10[→MS.P];

- ㉑ Matsunami 28; Durbar p.173=NGMPP-Card B95/11=BSP tr299(1-30)=Bir 29(a);
 ㉒ NGMPP-Card A 918/3=BSP tr591(1-31)=Bir 29(b)=Bir 228; SBLN p.17; Thomas
 ㉓ 7797[→MS.D]; IASWR MBB-II-125; Takaoka A60, A145, DH77; ASB p.243; NGMP-
 ㉔ P-Card A844/8=A118/4-119/1(=pa245), B101/20, D42/11, E664/1-665/1, E1344/4-
 ㉕ 1345/1, E1554/24[palm-leaf, 43 fols.]
 ㉖ MSS. of Parts :
 ㉗ Divyabhojanāvadāna [20]: Śāstrī 81(II)
 ㉘ Kavatāvadāna [32]: Bir 123=BSP pra1633(1-131)=NGMPP-Card B24/4[palm-leaf]
 ㉙ Dharmapālāvadāna [33]: Bir 29(d); BSP pra1697-ka2(2-4)=NGMPP-Card A936/2
 ㉚ [palm-leaf], BSP pra1433(2-5)[palm-leaf] (未同定); NGMPP-Card D51/12
 ㉛ Maitrakanyakāvadāna [36]: Matsunami 171(Divyāvadāna, fols.51a-57a6), 380-V-a
 ㉜ Śaśakāvadāna [37]: Bir 29(c)=BSP tr592(3-103)=NGMPP-Card B101/17; Matsunami
 ㉝ 171(Divyāvadāna, fols.315a-318b6), 380-V-b
 ㉞ Pāṇiyāvadāna [43]: Śāstrī 26[→Handurukande(1982)]
 ㉟ Kāśīsundaryavadāna [76]: BSP pra1697(kha2)(1-155)=NGMPP-Card B24/43[palm-leaf]
 ㊱ Tib. : Toh 343, Ota 1012, N(K)330, C 982, L 351
 ㊲ Jinamitra, Devacandra 訳
 ㊳ Ch. : 大正 200. 撰集百縁経 (十巻) 吳 支謙 訳

㊴ 2. Karmaśataka 業報百集

- ㊵ Karmaśataka [Karmaś.] は、「シャタカ」(百集) という作品形式において Avś. と共通してお
 ㊶ り、Avś. の姉妹篇として成立した作品であると見なしう。この作品はチベット訳が残されて
 ㊷ おり、Feer によって初めて研究がなされた。
 ㊸ Feer (1901)⁴⁰⁾ は Avś. と比較を行い、Karmaś. の特徴を明確にするとともに、全127話の梗概を
 ㊹ 発表した。Feer によれば、Karmaś. の構成は Avś. と共通して10部から成る。しかし Avś. は10
 ㊺ 部×10話の構成で正確に100章あるのに対し、Karmaś. は各部が10話を超過していることが多く、
 ㊻ そのため総計で127章ある。また Karmaś. の各部に割り当てられた統一的なテーマは Avś. のよ
 ㊼ うに明確ではない。
 ㊽ Avś. と Karmaś. を比較して、両者に共通しているのは15話ほどである。両者の対照表は Feer
 ㊾ (1901)⁴¹⁾ により作られ、後に Speyer (1909) によって訂正された。
 ㊿ Karmaś. 7 8/61 31 33 40 44 47 49 60 71 91 94 96 99 104

- Avś. 76 79 93 78 47 52 32 13 97 50 74 1 3 7 8
- さらに Speyer (1909) は部分的に対応する 2 話を加えた。
- Karmaś. 24 79
- Avś. 58 40
- Feer は, Karmaś. を全訳していたが, 内容梗概を発表するのに用いた後は, 訳稿は印刷されず
に篋底にしまわれた。Feer の死後, その全訳の原稿は Bibliothèque Nationale に, Collec-
tion L. Feer, N°. 3 として収められた。
- Karmaś. の部分訳としては, Feer (1883) による第94章 Pūrṇa から第104章 Balākaṣana まで⁴²⁾
の第 8 部の計11章の仏訳と, Przyluski (1936) による第 7 章 Dhvaja, 第 8 章 Kṣemaṅkarā, 第
106章 Kṣema (? or Kṣemaṅkara) の仏訳がある。
- Tib. : Toh 340, Ota 1007, N(K)325, C 979, L 346
- Las brgya tham-pa. [作者名・訳者名を欠く]

□ 3. Divyāvadāna 神々しきアヴァダーナ集

- Divyāvadāna [Div.] を初めて研究したのは, フランスの E. Burnouf であった。1837年に,
□ イギリスのネパール駐在事務官であった B. H. Hodgson は, ネパールで現地人に写させた梵語
□ 仏教文献の写本を初め24本, 次いで64本, バリのアジア協会に送った。当時 Collège de France
□ で梵語を教えていた Burnouf は, これらの写本を任されて, さっそく研究を始め, 7年後の18
□ 44年に成果をまとめて『インド仏教史序説』として出版した。⁴⁴⁾ Hodgson から送られた写本には,
□ 2本の Div. の写本が入っていたが, Burnouf はこの大部の作品を重視し, 『序説』の執筆にあ
□ たって, Div. の翻訳をふんだんに途中に盛り込んだ。彼の本の 3 分の 1 弱は, Div. の翻訳から出
□ 来ているといっている。Div. の訳された箇所は, pp.209-245 には (II) Pūrṇa, pp.169-172 は (X)
□ Menḍaka, pp.144-168 には (XII) Prātihāryasūtra, pp.65-78 には (XVII) Māndhātā, pp.79-87 で
□ は (XX) Kanakavarṇa, pp.280-299 には (XXIII) Saṅgharakṣita, pp.130-133, 319-333 には (XXVI)
□ Pāṃśupradāna, pp.333-370 には (XXVII) Kuṇāla, pp.370-379 には (XXVIII) Vitasoka, pp.379
□ -385 には (XXIX) Aśoka, pp.304-307 には (XXXVII) Rudrāyaṇa である。(頁は第 2 版による)
- 一方, Hodgson がカルカッタの Asiatic Society of Bengal に送った86束170作品の写本を研
□ 究したのが R. Mitra である。Mitra は1882年に, 写本カタログを兼ねて, その中の95作品の
□ 内容梗概を, 『ネパールの梵語仏教文献』という 1 冊の本にしたが,⁴⁵⁾ その中で Div. の異本たる
□ Divyāvadānamālā の全22章の内容を初めて紹介している。
- Schiefner (1882) の『チベットの説話』は, Schiefner が北京版チベット大蔵経カンギョルか

- ら仏教説話を選んで独訳したものを、W. R. S. Ralston が英語に重訳したものであり、52話の説
 □話が含まれている。その中には Div.(XVII)Māndhātā と (XXX)Sudhanakumāra に対応する
 □チベット訳根本有部律の説話の翻訳が含まれている。
- また L. Feer (1883)⁴⁶⁾ はチベット大蔵經カンギユルの中から種々の經典を選んで仏訳したが、
 □その中には、Div.(XIV)Sūkarikā の単行のチベット訳 (Toh 345, Ota 1014) からの仏訳も含ま
 □れている。
- テキストの出版は Cowell・Neil (1886)⁴⁷⁾ によってなされた。彼らはケンブリッジ大学図書館所
 □蔵のA写本および、Cowell と Neil 所有のB, C写本と、パリのアジア協会のD写本をベース
 □にし、さらにパリの国立図書館のE, Fの2本の写本を参考にし、またペテルスブルクの1写本
 □Pをも時折見て、原典を校訂した。F写本はDiv.の別系統のヴァージョン Divyāvadānamālā
 □に属しており、Cowell・Neil は「付録C」に、F写本に見られる相違を報告している。このF
 □12写本を除いて、彼らの用いたすべての写本は、ただ1本のネパールにある17世紀に筆写されたオ
 □13リジナル写本のコピーであるにすぎない。そのオリジナル写本には多くの箇所欠損があったと
 □14推定されるが、Cowell・Neil はそれをそのまま残さざるを得なかった。梵本はそれらの欠損の
 □15ため、チベット訳に残る対応する資料の絶えざる参照なしでは訳することができないことを、校
 □16訂者自身が認めている。校訂者はチベット訳・漢訳の資料を参照することをほとんどせずにすま
 □17せたが、そのことは、Cowell・Neil のテキストに新たな原典批判の課題を残すこととなった。
- Cowell・Neil 本の詩句索引は H. Wenzel (1886)⁴⁸⁾ が作成し、PTS 協会誌に載せた。
- Windisch (1895)⁴⁹⁾ は『魔と仏陀』の第2章(S.43ff.)において、Div.(XVII)Māndhātā pp.200-
 □208 (この部分は阿含の借用箇所と思われる) を、Mahāparinibbānasuttanta 第3章(=Udāna
 □第6章の1)と、文面の比較をした。また、第6章(S.161ff.)においては、Div(XXVI)Pāṃ-
 □23śupradāna 356.14-364.3の部分を、独訳した。
- Speyer (1902)⁵⁰⁾ は Cowell・Neil 本テキストに初めて原典批判を行った。テキストのほぼ全体
 □24にわたって、99箇所の修正を提案した。続いて、Speyer (1906)⁵¹⁾ は論文の付録として、再び Co-
 □well・Neil 本テキストへの修正のリストを発表したが、そこでは、前の論文では欠けていた、
 □25(XXXVIII)Maitrakanyaka に対する原典批判が入れられている。
- Huber (1904)⁵²⁾ は、Div.中の三つの説話が『大莊嚴論』(Sūtrāṃkāra)と共通していることに
 □26気付く、本来『大莊嚴論』にあったものが、Div.に借用されたのであることを立証した。彼はそ
 □27の三つの説話、すなわち Div.(XXVI)Pāṃśupradāna(pp.357-363)にあたる「魔とウバグブタ」
 □28の話、(XXVII)Kuṇḍāla(pp.382-384)にあたる「ヤシヤス」の話、(XXIX)Asoka(pp.430-432)に
 □29あたる「半アーマラカ果の布施」の話を、漢訳『大莊嚴論』から仏訳している。『大莊嚴論』の
 □30訳された箇所は、それぞれ『大正蔵』第4巻の307c-309b と 273a-275a と 283a-284c の部分であ

国る。(なお Div.の三つの対応部分はすでに Windisch (1895) と Burnouf (1844) によって訳され
国ている。)

国⁵³⁾ 次いで Huber (1906) は Div.のソースをさらに調査し、Div.の説話の半分、18話が根本有部
国⁵⁴⁾の律蔵から引き抜かれたものであることを、漢訳の根本有部律から確認した。また彼は、特に
国(XIII)Svāgata, (XXI)Sahasodgata, (XXXV)Cūḍāpakṣa, (XXXVI)Mākandika, (XXXVII)
国Rudrāyaṇa の5話を選んで、根本有部律においてそれらの話が抜かれた元の場所と、パーリ律
国における該当場所を提示し、律蔵の中におけるそれらの因縁譚のコンテキストを明らかにした。

国⁵⁴⁾ S. Lévi (1907) はさらに Div.の説話の源泉資料調べを進めて、律以外の漢訳仏典や Huber が
国見なかったチベット訳の根本有部律も調査し、Div.の全38話のうち21話が根本有部の律蔵に属す
国ることを確認した。また彼は残り17話についても、11話は律以外の仏典において、対応している
国漢訳資料を見出した。対応する漢訳資料が見出しえなかった6話は、(VIII)Supriya, (XI)Aśo-
国kavarṇa, (XV)Anyatamabhikṣu, (XVI)Śukapotaṅka, (XVIII)Dharmaruci, (XXXVIII)Mait-
国rakanyaka であるが、そのうち(XI)Aśokavarṇa, (XV)Anyatamabhikṣu, (XVI)Śukapotaṅka
国の3話は、どれも数ページの分量しかない、取るに足りない小品である。残る3話のうち(XX-
国XVIII)Maitrakanyaka は、のちに Hahn (1977) によって、本来 Div.に属する作品ではないこ
国とが明らかにされ、Gopadatta の Jātakamālā に属する作品ではないかと推測された。

国⁵⁵⁾ なお、Lévi が作成した Div.の源泉資料の対照表は、『縮刷蔵』に基づいて出典箇所の記述が
国なされており、現代の研究者には使いづらいため、現在では、高島 (1954) が Ratnamālāvadāna
国のテキストの末尾に付した、新しい対照表が使われている。この対照表は、Lévi の対照表を土
国台に、『大正蔵』の該当ページとチベット大蔵経『北京版』の該当葉面を記して作ったもので、
国大変便利である。また Panglung (1981) ⁵⁶⁾ が作成した対照表には、『北京版』の該当箇所のほか、
国対応するギルギット写本の Dutt 本の巻数とページが示されている。

国⁵⁷⁾ J. Hertel (1908) は、(XXVII)Kuṇāla の一部(405.16-418.2)を訳した。

国⁵⁸⁾ W. Stevens (1911) は、Burnouf (1844) が訳した一連のアショーカ王伝説、すなわち(XXVI)
国Pāṃśupradāna・(XXVII)Kuṇāla・(XXVIII)Vitaśoka・(XXIX)Aśoka の部分の仏訳を、さら
国に英訳に重訳して、彼の『インド仏教の説話集』の中に収録した。

国⁵⁹⁾ H. Oldenberg (1912) は、彼が先に Mahāvastu において発見した、文体Aと文体Bとが区別
国できる、成立年代の異なる二つの層を、Div.においても確認した。

国⁶⁰⁾ 榎亮三郎 (1912-15) は、Div.の和訳ならびに解説を、4年間にわたって『六条学報』に連載し
国たが、(I)Koṭikarṇa から始めて、(VIII)Supriya の途中まで訳したところで、中断した。

国⁶¹⁾ M. Winternitz (1913) は『インド文献史』において、Div.の成立年代の決定のために、多くの
国文献学的な示唆を行った。

- Przyłuski (1914)⁶²⁾ は西北インドを仏陀の聖地と見做そうとする意志が明らかに見える有部系の説話を、漢訳の律や經から集めて仏訳した。彼は漢訳『根本有部律』のほかに、Div.(XXVI)~(XXIX)のアショーカ説話と並行した異系のリセンションである漢訳『阿育王伝』(Aśokarājāvadāna)から四つの話を紹介している。
- Gawroński (1919)⁶³⁾ は、Div.の(XXVI)~(XXIX)のアショーカ説話において、馬鳴の Buddhacarita や Saundarananda からの影響が見られることを指摘し、Div.のアショーカ説話部分の作者(あるいは編者)は、馬鳴よりも後の時代の人であったと結論した。またほかに、Div.の(XXXVIII)Maitrakanyaka と(XXII)Candraprabhabodhisattvacaryā の章にも馬鳴の Buddhacarita からの影響を指摘しうる。
- Grünwedel (1920)⁶⁴⁾ は『古代クッチャ』において、Qyzyl の「船乗り洞窟」の壁画の説明のため、Div.(I)Koṭīkaraṇa と(XXXVIII)Maitrakanyaka を、独訳した(II. Teil, S.31-41=Koṭīkaraṇa ; II. Teil, S.41-50=Maitrakanyaka)。 (I)Koṭīkaraṇa においては、彼はチベット訳も参照している。
- Bloomfield (1920)⁶⁵⁾ は「家畜に酒を与えて興奮させる風習について」「阿羅漢の常套形容句(epithet)について」「仏教梵語とジャイナ梵語のいくつかの相似について」「āsvāpana の意味について」「個々のアヴァダーナが作者を異にしていることについて」「(Div.のテキストの)全体にわたる原典批判的所見」という、Div.についての六つの論考からなる論文を発表した。
- Tucci (1922)⁶⁶⁾ は、Div.のいくつかの箇所について、並行する古い仏教資料の伝承との比較を行った。彼によれば、(XVIII)Dharmaruci は Mahāvastu に類似する説話がある。また、(XXXVII)Rudrāyana は仏伝を模倣した節をもつ。また Div.と Sūtrālaṃkāra (大莊嚴論)はいくつかの説話で、Vajrasūci を手本にしている。
- Przyłuski (1923)⁶⁷⁾ は『アショーカ帝王の伝説』で漢訳を含めたアショーカ説話の研究を行った。その「序文」において、彼はマトゥラー有部とカシュミール有部とを対置させた上で、Div.はマトゥラー有部で作られ、Div.のほとんどの説話は、今は失われたマトゥラー有部の律蔵から抜き取られて成立したこと、また、根本有部の(現存する)律蔵は、その後にカシュミール有部に於いて形成されたいことを主張した。Przyłuski は第1部で Aśokāvadāna の四つのリセンションの比較を行い、アショーカ説話の形成と編纂を明らかにしようとした。第2部では漢訳の『阿育王伝』(大正 No.2042)を仏訳した。別の漢訳『阿育王経』を訳さなかったのは、『阿育王経』が梵本とよく合い、梵本と同一の系統と判断されたからである。
- この Przyłuski の研究はアショーカ説話(Aśokāvadāna)の研究において最も重要なものである。後に D. K. Biswas (1967)⁶⁸⁾ によって英訳されたが、この英訳には第2部の漢訳『阿育王伝』の翻訳は省かれている。

□ ここで Aśokāvadāna の作品について解説しよう。Div.の XXIX 章には Aśokāvadāna という単独の章があるが、一般に Aśokāvadāna というときは、第 XXVI 章から XXIX 章までの、□ 4 章から成る一連のアショーカ説話をさす。すなわち Pāṃśupradāna (348.4-382.3), Kuṇāla □ (382.4-419.13), Vītaśoka (419.14-429.5), Aśoka (429.6-434) の 4 章である。これらをひとつ □ の全体として扱うのは漢訳から見て適切であり、ここでも 4 章をまとめて Aśokāvadāna と呼ぶ □ ことにする。Aśokāvadāna は漢訳として、よく対応する三つのリセンションがある。

- (1) 大正 2042 阿育王伝 (七巻) 西晋 安法欽 訳
- (2) 大正 2043 阿育王経 (十巻) 梁 僧伽婆羅 訳
- (3) 大正 99 雜阿含経 第604・640・641経 劉宋 求那跋陀羅 訳
- (641経には「阿育王施半阿摩勒果因縁経」という経名がある)

□ さらに、Huber (1904) に基づいて、第 4 のリセンションも加えられよう：

- (4) 大正 201 大莊嚴論[経] (十五巻) 馬鳴菩薩 後秦 鳩摩羅什 訳

□ 大莊嚴論は馬鳴の作とされるが、その Aśokāvadāna との対応部分、『大正蔵』第 4 巻、274a-□ 275a [=Kunāla], 283a-284c [=Aśoka], 307c-309b [=Pāṃśupradāna] において、Div. とよく一 □ 致する。なお Lüders (1926) ⁶⁹⁾ は、大莊嚴論の梵本と思われる中央アジア写本断片 Kalpanāmaṇ-□ dītikā を発見し、発表した。Lüders は、Kalpanāmaṇḍītikā 中の、Aśokāvadāna と対応する □ 部分については、Div. 382.4-383.23, 363.23-26, 430.25-431.16, 433.9-12, 431.17-432.23, 358.3 □ -363.6の部分と、比較照合した。

□ Div.の章は根本有部律の中にある因縁譚より取られたものが大部分を占めるが、Aśokāvadāna □ とよばれる四つの章は大きな例外であり、本来は Div. 以前に単独に成立した作品ではないかと □ 思われる。Przyłuski はそれらの源泉を雜阿含経に求めたが、花山 (1954) ⁷⁰⁾ は漢訳『雜阿含』と □ 同じ訳者・求那跋陀羅が訳出した『無憂経 (一卷)』が、『雜阿含』の中に誤ってとり交ぜられて □ 現在の『雜阿含』第604・640・641経となった可能性が強いことを明らかにしたため、雜阿含起 □ 源説はもはや考えられず、単独で成立した経と見なすのが妥当である。現存する『阿育王伝』・ □ 『阿育王経』・Div.・『雜阿含』の 4 種の Aśokāvadāna は、ともに有部の内部で生じた異なるヴ □ アージョンと思われるが、『阿育王伝』が『雜阿含』第604・640・641経と組織的に類似してお □ り、一方『阿育王経』はよく Div. と一致することから、2 種の系統に大別することができる。

□ Aśokāvadāna から Div. 全般の研究史に戻ろう。

□ Nariman (1923) ⁷¹⁾ は彼の『梵語仏教の学術史』の第 7 付録において、Huber (1904) の『大莊嚴 □ 論』(Sūtrālamkāra) の研究をとりあげ、Div.の三つの章が Sūtrālamkāra から借用されたこと □ を証明する Huber の意見を紹介した。彼は漢訳仏典の研究がいかに梵語仏典の研究に役立つか □ を述べている。次いで第12付録では、Nariman 自身が Div.の全体を通読した時に気付いた、

□1 Div.の様々な記述を、覚え書き風に Div.のページ順に並べている。

□2 Zimmer (1925)⁷²⁾ は Div.の中から物語の技法の見事な四つの話を選んで翻訳し、『カルマン』と□3 いう書名で出版した。訳されたのは、(XVIII) Dharmaruci と (XIX) Jyotiṣka と (XX) Kanaka-□4 varṇa, ならびに (XXVI) Pāṃsupradāna の一部である。

□5 Grünwedel (1925)⁷³⁾ は『アヴェスタの悪魔、それらと中央アジア仏教図像学との関連』におい□6 て、Div.(XXXVII) Rudrāyaṇa を独訳した。

□7 Ware (1928)⁷⁴⁾ は Cowell・Neil 本で3ページしかない (pp.193-196) 短い章である、(XIV) Sū-□8 ṅkarikā を英訳した。彼は同時に、宋の法天が訳した「仏説嗟嘯曇天子受三帰依獲免惡道經」

□9 (大正 No.595) とチベット訳の Sūkarikā Avadāna (Ota 1014, Toh 345) とを参照し、梵本と□10 の相違点を註記している。

□11 続いて Ware (1929)⁷⁵⁾ は、やはり Cowell・Neil 本で3ページの (pp.481-483), 短い章である□12 (XXXIV) Dānādhikāra-mahāyānasūtra を英訳し、宋の法賢が訳した「仏説布施經」(大正 No.□13 705)の英訳とチベット訳 Ārya-Dānānuśamsā-nirdeśa (Ota 850, Toh 183) の英訳も一緒に並べ□14 て、三つのヴァージョンを比較した。

□15 Przyluski (1929)⁷⁶⁾ はもう一度有部の律蔵におけるアヴァダーナの問題を取り上げた。彼は『大□16 智度論』(『大正蔵』25巻, 756c) の次の記事に着目する。「律に2種ある。マトゥラー国の律は□17 「アヴァダーナとジャータカを含むもので、80部から成る。一方カシュミール国の律はアヴァダー□18 ナとジャータカを除去したもので、戒律のみを集めて10部から成るが、80部の注釈(Vibhāṣā)を□19 付けている。」Przyluski は、この『大智度論』の記事を論拠に、大胆な仮説を立てた。マトッ□20 ラー有部の律に含まれていたアヴァダーナとジャータカはそれぞれ、*Avadānamālā と *Jāta-□21 kamālā と(仮に)呼ばれるべき集成を形づくっていたであろう。現存の Div.と Divyāvadāna-□22 mālā は、どちらもマトゥラー有部の *Avadānamālā の一部が残ったものであると考えられる。□23 根本有部の律はカシュミールで出来たが、この根本有部律の(後代の)新しい形成において、マト□24 ャラー有部の律蔵における *Avadānamālā と *Jātakamālā の説話が流れ込んだ。従って、現□25 存の根本有部律と Div.が一致するわけは、Div.の編纂者が根本有部律から材料を取ったからで□26 はなく、逆に、根本有部の編纂者が、Div.から、いや正確に言えば、より古いマトゥラー有部の□27 説話集 *Avadānamālā から、材料を取ったからである。このように Przyluski は主張した。

□28 Lévi (1932)⁷⁷⁾ は、Citroën 隊の隊員から入手したギルギット写本の写真と写本1断片、ならび□29 に A. Stein の好意で British Museum から借りた17葉のギルギット写本を報告したが、そこに□30 は Div.の (XXIII) Saṃgharakṣita と (XIII) Svāgata に対応する根本有部律の一部分が含まれ□31 ていることがわかった。

□32 Ware (1938)⁷⁸⁾ は (XXIII) Saṃgharakṣita の話の「前置き」にあたる部分が、梵本では欠損し

□ていて理解不可能であることから、その前置きにあたる部分を保っている漢訳「仏説因縁僧護
□經」(大正 No.749) から該当部分を英訳し、また「根本説一切有部毘奈耶出家事」のチベット
□訳から、該当部分のチベット文テキストを取り出して英訳した(義浄の漢訳では該当部分は得ら
□れない)。こうして、梵本では断片としてしか知られない Samgharakṣita の「前置き」にあた
□る部分が再現できる。

□ Zinkgräf (1940)⁷⁹⁾ は、Div. の (XXXIII) Śārdūrakarṇa を特に取り上げて、この説話の歴史的な
□発展を考察した。(XXXIII) Śārdūrakarṇa において、中核部分となっている「チャンダーラ娘
□の説話」は、Div. の編纂以前に、はるか古くまで成立が遡るものであるが、またそれは Div. の
□編纂に採用された以外に、多少姿を変えた別の説話 Padmaka-avadāna として、Aśokāvadāna-
□mālā を経て、Kṣemendra 作の Avadānakalpalatā にまで受け継がれていっている。Zinkgräf
□の研究は、この説話の流れを「Divyāvadāna から Avadānakalpalatā へ」と追ったものである。
□まず論文の第1部で、Div. 以前の説話の形態が探られる。Śārdūrakarṇa 説話の原初の形態は、
□「摩登伽經」など、大正 No.551, 552, 1300, 1301, 205, 1464, 2121, 2123 の、8本の漢訳資料を比
□較して推測することができる。現在の Div. (XXXIII) Śārdūrakarṇa は、「チャンダーラ娘 Pra-
□kṛti の説話」と「マータンガ王 Śārdūrakarṇa の説話」との、二つの説話が合わさって出来て
□いるが、本来の形は前者の説話だけから成り、後者の説話は後から付加されたものである。
□Zinkgräf は原型としてあった前者の説話を *Prakṛti-avadāna と名付けた。この *Prakṛti-av-
□adāna と極めてプロットが類似した説話が、Aśokāvadānamālā および Avadānakalpalatā に、
□Padmaka-avadāna として存在する。この Padmaka-avadāna の説話は、Div. と源を一にする、
□古い *Prakṛti-avadāna から発した説話の、やや変化した形と考えられる。

□ Zinkgräf は Padmaka-avadāna の研究を第2部で行い、Aśokāvadānamālā 26章 Padmaka-
□avadāna の梵文テキスト(Cambridge Add.1482の1写本に基づく)を初めて発表した。そして
□Aśokāvadānamālā 26章 Padmaka-avadāna は、Avadānakalpalatā 87章 Padmaka-avadāna と、
□部分が逐字的に一致していることを発見し、Kṣemendra が Avadānakalpalatā を作るにあたっ
□て Aśokāvadānamālā を借用したものと推定した。⁸⁰⁾ Zinkgräf は第3部で、以上の全体の論旨を
□もう一度まとめ直している。

□ Thomas (1940)⁸¹⁾ は (XXXVI) Mākandika の Cowell・Neil 本 p.519にある韻文について、い
□くつかの読みの修正を提案した。

□ Thomas (1941)⁸²⁾ は Div. に四度出てくる(p.97, 180, 282, 551)、阿羅漢になった者への一連の呼
□び名(epithet)としての、Traidhātukavītarāgaḥ samaloṣṭakāncana ākāśapāṇitalasamacitto vā-
□śīcandanakalpo vidyāvidāritāṇḍakośo vidyābhijñāḥ pratisaṃvitprāpto……という形容を考察し
□た。

- Kenneth Ch'en (1947)⁸³⁾ は、Div.(XIII)Svāgata を、他の部派の律蔵の Svāgata 物語と比較し、また漢訳とチベット訳の「根本説一切有部毘奈耶」と比較して、それらの間の相違を、漢訳
- (『大正蔵』23, 857a-860a)からの Svāgata の英訳に付けた註記として、詳細に報告した。そして結論として各ヴァージョンの系統分けを行い、諸部派の律蔵における伝承を2つの大きなグループに分けた。すなわちパーリ律・四分律・五分律と、鼻奈耶・十誦律とのグループである。また各律蔵における Svāgata 物語の伝承を、古さの順に、パーリ律・四分律 → 十誦律 → 根本有部律と、順序づけた。
- E. J. Thomas (1950)⁸⁴⁾ は『悟りを求めて』というアンソロジー集の中に、Div.(II)Pūrṇa [37.5-40.14] と (XXVI)Pāṃśupradāna [352.28-356.5] の部分を英訳した。
- Shackleton Bailey (1950-51)⁸⁵⁾ は Div.の I-VII, IX, X, XXX, XXXI の、全部で11の章において、Cowell・Neil 本とチベット訳の根本有部律を綿密に照合して、梵本の側の脱漏・誤写のためチベット訳の文面と相違していると思われる箇所について、原典批判に役立てるために、梵文とチベット文を並べて提示し、しばしば新しい梵文の読みを提案した。また彼は、同じように根本有部律に基づいている (XVII)Māndhātā, (XXIII)Saṃgharakṣita, (XXIV)Nāgākumāra の章では、律資料が故意に縮約されて使われていることを指摘する一方、Div.の他の章においては律蔵からそのまま書き移されていることを確認した。
- 高島寛我 (1952)⁸⁶⁾ は Ratnāvadānamālā 第6章 Sūkaryavadāna とともに、Div.(XIV)Sukārikā を和訳した。
- 善波周 (1952)⁸⁷⁾ は漢訳『摩登伽經』を、Div.(XXX)Śārdūlakarṇa の梵本写本ならびにチベット訳と照合し、「印度の二十八宿」「三種のヨーガ」「七曜」「冬至・夏至・季節」「棒の影の長さ」「閏年」「人影測定」「時間」「尺度里程」等の天文暦数に関する記事を紹介した。
- Waldschmidt (1952)⁸⁸⁾ は Div.(I)Koṭīkarṇa と対応する、有部の「十誦律」の同じ説話 (『大正蔵』23, 178a-182a) の梵語の中央アジア出土断片 (M 655) 1葉を初めて報告した。そして根本有部律の皮革事に伝承された Div.(I)Koṭīkarṇa と、有部「十誦律」に伝承された中央アジア断片のテキストの比較を試みた。彼は Div. 10.29-12.14を独訳している。
- Weller (1953)⁸⁹⁾ は Div.(XVIII)Dharmaruci の中の、Stūpa の個々の部分の名称が出てくることとて有名な、Stūpa の改築方法を語る 244.7-14 (Cowell・Neil 本) の箇所を、Foucher の翻訳を踏まえて、新たに解釈し直した。しかし Als Dorf (1955)⁹⁰⁾ はさらに、Weller の読み方も批判して、再度テキストを解釈し直した。
- Kenneth Ch'en (1953)⁹¹⁾ は、Div.の (IX)Meṇḍhakagṛhapativibhūtipariccheda, (X)Meṇḍakāvadāna の2章にまたがる Meṇḍhaka 物語について、パーリ、漢訳ならびにチベット訳の資料における並行ヴァージョンとの比較を行い、先に Ch'en (1947) の論文で結論された、パーリ律・

四分律・五分律の伝承の近さ、十誦律と根本有部律の近さを、再びここでも結論として確認した。次に、Div.と、根本有部律のギルギット写本の対応部分と、チベット訳の三者を比較照合し、有効な異読が得られる箇所について、三者の読みを示した。Div.よりもチベット訳の方がはるかにギルギット写本に一致していることから、Div.校訂におけるチベット訳の優位性・安全性が確かめられる。

S. Mukhopādhyāya (1954)⁹²⁾ は Div.でもっとも長編の章である(XXXIII)Śārdūlakarṇa を、2本の梵文写本、Asiatic Society of Bengal 写本(B)とパリの Société Asiatique (P)に基づき、4種類の漢訳と1本のチベット訳を参照して、校訂し出版した。この Śārdūlakarṇa の章は、Cowell・Neil 本では、写本が不良であったため、校訂が放棄され、ただテキストの前半と末尾の部分のみが「付録A」として収録されたにとどまったものである。Mukhopādhyāya の使ったP写本は、Cowell・Neil 本でもD写本の名で使われているのであるが、新たな写本Bは、それよりやや良好な写本であり、さらに漢訳とチベット訳の助けを借りることによって、章全体の校訂まで漕ぎつけたのであった。用いられた漢訳は、大正 No.551, 552, 1300, 1301の4経である。またチベット訳は、この章の部分のみの訳 Śārdūlakarṇāvadāna (Toh 358, Ota 1027) があり、それを用いた。

Nobel (1955)⁹³⁾ は Div.(XXXVII)Rudrāyaṇa のチベット訳校訂テキストとその独訳を第1巻とし、チベット訳の語彙をすべて採った辞書を第2巻として、出版した。チベット訳テキストは北京版・ラサ版・ナルタン版の康ギユル、ならびにベルリンの康ギユルの写本を校合して校訂したもので、さらに梵本の原典批判を含む文献学的な註をつけて、チベット訳を逐字的に独訳している。また第2巻の辞書は、すべてのチベット語の語彙の出典箇所を記し、ドイツ語の訳語のほかに、一々対応する梵文の原語を挙げている。Nobel はチベット訳との比較によって、梵本が多く欠落をもつ損なわれたものであることを確かめ、チベット訳との照合の重要性を強調した。なお、主人公の Udrāyaṇa 王が住む地名 Roruka は、先に Huber と Lévi によって、玄奘の旅行記に基づいて、中央アジアのホータンの近くに比定されたのであるが、Nobel はこの問題を再検討して否定した。

Brough (1957)⁹⁴⁾ は、Div.(XXXVIII)Maitrakanyaka を研究したが、その論文は前半部と後半部に分けられる。前半部において、彼は Div.の Maitrakanyaka という名を、Mitrāyu という名祖から出た父系語の名と考えることで、パーリ・ジャータカの Mittavindaka と似た意味になることから、両方の名前の伝承の接続点を見出した。また Speyer (1906) が Maitrakanyaka 物語において北伝を優先させ、太陽神話の反映を見てとったことに対して、批判的な論評を行った。次に論文の中心となる後半部で、(XXXVIII)Maitrakanyaka の原典批判を、Speyer (1906) の後を受けて、新たに行った。

- ㊦ Vaiya (1959)⁹⁵⁾ は Cowell・Neil 本 Div. テキストの、デーヴァナーガリー文字によるインドからの出版を行ったが、単なるコピーではなく、かなりの改善がテキストに加えられた。Cowell・Neil 本では散文の中に気付かれずに埋もれてしまっていた韻文が多く掘りだされ、読みが若干修正されている。ただ、Cowell・Neil 本が出版されてから半世紀の間に諸学者によって蓄積された原典批判の成果を、Vaidya は参照していないのが惜しまれる。この Vaidya 本では新たに詩節索引と難解な語彙のグロッサリーが付けられ、また Cowell・Neil 本では（部分が付録に収められているだけで）欠落している(XXXIII)Śārdūlakarṇa の章は、Mukhopādhyāya (1954) が出版したテキストからそのまま収録されている。
- ㊧ Agrawala (1959)⁹⁶⁾ は Div. 359.19 Maṇḍalin の語を考察した。
- ㊨ S. Mukhopādhyāya (1963)⁹⁷⁾ は Div.(XXVI)Pāṃśupradāna から(XXIX)Asoka までの、いわゆる Asokāvadāna を再校訂した。この再校訂は、Cowell・Neil 本テキスト(に記録されたABCDE の5本の写本の読み)に基づき、さらに新たに Asiatic Society of Bengal の2本の写本、MA と M8 を用い、他に漢訳「阿育王伝」と、まれに「阿育王経」も参照して行われた。Asiatic Society of Bengal の MA 写本(G9982A)と M8 写本(A.8)はどちらも Divyāvadānamālā の写本であるが、Asokāvadāna の範囲に限ると、MA 写本は(XXVI)Pāṃśupradāna の一節のみ、また M8 写本は(XXVIII)Vīṭasoka と(XXIX)Asoka の部分だけを有しており、どちらにも(XXVII)Kuṇāla の部分が欠けている。両写本は、価値のある異読をあまり提供しない。従って不明の箇所はむしろ漢訳から示唆を得たという。「阿育王伝」は Przyluski (1923) の仏訳があるため特に利用し、この「阿育王伝」における Div.との相違は詳細に脚註に註記された。(しかし他の漢訳はほとんど利用されなかった。チベット訳も、(XXVII)Kuṇāla の部分のみが単独で存在しており(Toh 4145, Ota 5646)、漢訳よりも原典批判に役立つにもかかわらず、Kuṇāla の部分の校訂において利用されなかった。) この Mukhopādhyāya の刊本は、Cowell・Neil 本と異なり、すべての写本が伝える(XXVII)Kuṇāla と(XXVIII)Vīṭasoka の章の順序図を、故意に逆転させた。これは漢訳2本に見られる古い形に(大まかに)従ったものである。
- ㊩ この Mukhopādhyāya のテキストに対しては、de Jong (1970)⁹⁸⁾ の重要な書評があるが、その詳細な批判はまた Asokāvadāna の研究史と将来の課題を知るのに役立つ。現在において Asokāvadāna の原典研究を行う場合には、Mukhopādhyāya のテキストを使うよりも、Cowell・Neil 本テキストを底本にして、諸学者の原典批判の成果を参照する方が望ましい。
- ㊪ Agrawala (1963)⁹⁹⁾ は Div.(p.45) patracārikā, haritacārikā, bhājanacārikā の用例に見られる、仏教梵語 -cārika の語の意味を研究した。彼は「手に手にめでたい品物を持って、行列をつくって進む人」と解釈する。
- ㊫ Bongard-Levin・Volkova (1963)¹⁰⁰⁾ は、Asokāvadānamālā の(V)Kuṇāla の原典を初めてロシ

- ㉑ ア語訳を添えて出版したが、詩形改稿本たる *Aśokāvadānamālā* の (V) Kuṇāla のテキストは、
- ㉒ その元本の Div. (XXVII) Kuṇāla のテキストと、左右に対照させられて記された。ここで、
- ㉓ Div. は *Avadānakalpalatā* から 1 詩節と半分を借用していることが発見され (Div. 417.22-27 =
- ㉔ A.-Kalp. 59.160cd, 161), 現在の Div. は写本の伝承の途中で、11世紀~17世紀の間に、写本の筆
- ㉕ 写生あるいは編纂者によって *Avadānakalpalatā* に基づいて改竄されたことが判明した。
- ㉖ 奈良康明 (1966) は中村元編『仏典 I』の中に、Div. (XIX) Jyotiṣka と (XXX) Sudhanakumāra
- ㉗ の章を和訳した。同じ 2 章の翻訳は、奈良 (1988) の『仏弟子と信徒の物語 —アヴァダーナー—』
- ㉘ に、若干改訂して収められた。
- ㉙ Agrawala (1966) は F. Edgerton に倣った仏教混淆梵語の語彙研究の一環として、Div. から
- ㉚ 採った 32 の語彙の意味を検討した。
- ㉛ 岩本裕 (1967) はアヴァダーナ文献全体にわたる研究を集大成して『仏教説話研究序説』とし
- ㉜ て出版した。Div. の研究は第 3 章にあてられている。第 3 章で岩本は Div. と Div. の異系の伝本
- ㉝ *Divyāvadānamālā* との、6 種の写本を比較し、Div. の原型を、(I) Śroṇakoṭīkarṇa と (II) Pūrṇa
- ㉞ を冒頭に置き、それに *Aśokāvadāna* など数篇の単行のアヴァダーナが付加されて成立した作品
- ㉟ であると推定した。
- ㊱ S. Mukhopādhyāya (1967) は、1954 年に出版した (XXXIII) Śārdūlakarṇa のテキストに対す
- ㊲ る続編として、その内容についての詳細な研究を行った。Śārdūlakarṇa の前世物語では、バラ
- ㊳ モン族が専有していた学問知識が、よりによって栴陀羅王によって見事に語られるのであるが、
- ㊴ そこで挙げられたヴェーダ的なトピック・天文学的なトピックについて、バラモン側の他の資料
- ㊵ との比較を Mukhopādhyāya は行った。
- ㊶ Waldschmidt (1968) は、Div. (XXXVI) Mākandika と (XXXVII) Rudrāyaṇa の (根本有部系
- ㊷ の) ヴァージョンと対応する、有部の「十誦律」の Udayana 説話部分 (『大正蔵』23, 125c-126
- ㊸ b) の、中央アジア梵文断片 5 葉 (Kat.-Nr. 1097, 1098 d, e, f, g) を発表した。彼は第 3 部におい
- ㊹ て、梵文断片に見られる有部の伝承と、Div. に見られる根本有部の伝承とを比較して、相違点と
- ㊺ 類似点を明らかにしている。
- ㊻ 岩本 (1974) は『仏教聖典選』第 2 巻の『仏伝文学・仏教説話』において、Div. (I) Koṭīkarṇa
- ㊼ の現在物語、(II) Pūrṇa 全編、(XXX) Sudhanakumāra の現在物語、(XXVII) Kuṇāla の一部を
- ㊽ 和訳した。
- ㊾ V. Näther (1975) は、Sir Aurel Stein が入手して British Museum に送られ、Or. 11878A
- ㊿ として記録された 11 葉の根本有部律の写本 (先に S. Lévi (1932) によって、その 4 葉半の部分
- ㊿ のテキストと仏訳が発表されていた) のテキストを校訂し独訳した。その写本の大半は *Divyā-*
- ㊿ *avadāna* の (XXV) Saṃgharakṣitāvadāna と (XXIV) Nāgākumārāvadāna にあたる部分である。

- ¹⁰⁹⁾ Hahn (1977) は、Div.の中でも異質で、むしろ Jātakamālā に形式が類似する(XXXVIII)Maitrakanyaka の章について、もともと Bodhisattvajātakāvadānamālā の写本にあったものが、ネパールにおける写本伝承の過程で誤って Div.の写本に紛れ込んだものであることを明らかにした。Bodhisattvajātakāvadānamālā は、Haribhaṭṭa の Jātakamālā から11話、未知の作者の Jātakamālā から2話を取って、はりあわせて作った写本集成であるが、特に Maitrakanyaka の部分は、未知の作者の Jātakamālā から取った部分であるため、恐らくそれは Gopadatta の作った Jātakamālā の一部であったと Hahn は推定した。この発見で、Div.の最終章たる Maitrakanyaka は Div.の一部ではなくなり、Div.は全部で37章の作品となった。
- ¹¹⁰⁾ 宮治昭 (1979) は Div.(XII)Prātihāryasūtra を和訳した。
- ¹¹¹⁾ 定方晟 (1982) は Div.(XXVI)Pāṃśupradāna から (XXIX)Aśoka までの Aśokāvadāna を、Vaidya 本のみに基づいて、『アショーク王伝』として和訳し出版した。
- ¹¹²⁾ Simson (1982) は (XXXVII)Rudrāyaṇa について、テキストの背後にあるシンボリックな意味を捉えようとした。彼は「王舎城が衰える時、ロルカ城が栄え、ロルカ城が衰える時、王舎城が栄える」という冒頭の文から、物語に太陽の運行の周期性が暗示されていると解し、ロルカ王 Rudrāyaṇa を「太陽の冬至から夏至への運行(uttarāyaṇa)」、王舎城の王ビンビサーラを「太陽の夏至から冬至への運行(dakṣiṇāyaṇa)」と見て、物語の秘められた構造を説明しようとした。
- ¹¹³⁾ Strong (1983) は Div.の Aśokāvadāna の研究書『アショーク王の伝説』を出版した。前半の第1部は梵本 Aśokāvadāna から読み取れるインド文化史的な事実についての五つの論考から成る。後半の第2部は Aśokāvadāna すなわち Div.(XXVI)Pāṃśupradāna～(XXIX)Aśoka の部分の、Mukhopādhyāya 校訂本に基づいた(初めての)英訳である。
- ¹¹⁴⁾ Klaus (1983) は、Div.には属さないことが判明した (XXXVIII)Maitrakanyaka の章を、Gopadatta の作った Jātakamālā の一部であると推定した M. Hahn (1977) の意見を検証するため、この章のみを単独に取り上げて再校訂し独訳した上で、Gopadatta のものと見なされた他の13話の作品と比較研究を行い、質的同一性を確かめようとした。
- ¹¹⁵⁾ 村上真完 (1984) は、ベゼクリク第9号窟寺のディーバンカラ仏の誓願画に対する研究として、Div.(XVIII)Dharmaruci (pp.246-254) を和訳し、「増考阿含」巻11ならびに「過去現在因果経」巻1に見られるディーバンカラ仏授記の物語と比較した。
- ¹¹⁶⁾ Sharma (1985) は Div.と Avadānaśataka を主な資料として、アヴァダーナ作品に反映している古代インドの政治・経済・社会生活を研究した。
- 『仏教説話大系 第25巻 アバダーナ物語 (一)』では、Div.の第1・2・3・7・12・19・30章が抄訳され、また『第23巻 世界のジャータカ (一)』では Div.の第32章が抄訳された。¹¹⁷⁾
- 平岡聡 (1991a) は Div.(XI)Aśokavarṇa を和訳した。彼は現在、Div.の全和訳を準備中であ

る。

[3] Skt.MSS. : Filliozat 53-55[→MS.E]; Matsunami 170, 171¹¹⁸⁾; Bendall Add.865[→MS.A]; Bir

[3] 79(a), (b); SA 5[→MS.D]; Thomas 8220; Takaoka KA47=NGMPP-Card E594/8-595/

[4] 1[408 fols.]

[3] MSS. of Parts :

[6] (Śroṇa)koṭīkarnāvadāna [Ch.1]: Matsunami 398; IASWR MBB II-66; Bir 79(g); Takaoka DH317G; BSP tr594(3-117)=NGMPP B101/7; NGMPP-Card B101/7, E148

[8] 7/4, E1848/9

[9] Pūrṇāvadāna [Ch.2]: Takaoka CA44-4; NGMPP-Card E264/18

[10] Brāhmaṇadārikāvadāna [Ch.4]: Matsunami 29-I

[11] Stutibrāhmaṇadārikāvadāna [Ch.5]: Matsunami 29-II

[12] Indro nāma brāhmaṇāvadāna [Ch.6]: Matsunami 60

[13] Nagarāvalambikāvadāna [Ch.7]: Matsunami 204

[14] Supriyamahāsārthavāhāvadāna [Ch.8]: Matsunami 478

[15] Supriyāvadāna [Ch.8]: IASWR MBB-II-160 (未同定)

[16] Svāgatāvadāna nāma trayodaśa [Ch.13]: Takaoka CA44-3; NGMPP-Card E264/14, D

[17] 64/4

[18] Māndhātāvadāna [Ch.17]: Matsunami 303; Kodama 9

[19] Dharmarucyavadāna [Ch.18]: Matsunami 187

[20] Jyotiṣkāvadāna [Ch.19]: Bir 109; Matsunami 380-III; NGMPP-Card H207/3[Skt.+

[21] Nw.?)

[22] Kanakavarṇāvadāna [Ch.20]: NGMPP-Card E264/16 (未同定)

[23] Saṃgharakṣitāvadāna [Ch.23]: Matsunami 406

[24] Pāṃśupradānāvadāna [Ch.26]: Durbar(1905) p.89 [=Durbar p.10=NGMPP A38/14];

[25] NGMPP-Card A127/7(=pa244)

[26] Kuṇālāvadāna [Ch.27]: Durbar(1905) p.89 [=Durbar p.10] (未同定)

[27] Vītaśokāvadāna [Ch.28]: Matsunami 380.II-a

[28] Aśokāvadāna [Ch.29]: Matsunami 380.II-b; ASB p.244

[29] Sudhanakumārāvadāna [Ch.30]: Śāstrī 23; Goshima・Noguchi 126; Takaoka CA44-1;

[30] NGMPP-Card D57/8, E264/13, E651/3, E1354/6, E1361/15, H160/1 (ただしこれ

[31] らの写本の中には R.-m.の Sudhanakumārāvadāna, あるいは Aṣṭamīvrata の一部と

[32] しての Newārī Version も混じっている可能性がある)

- Rūpavatyavadāna [Ch.32]: Matsunami 320-I; Takaoka KA44H; Durbar<1905> p.89[=
- Durbar p.10]
- Rūpavatījanmāvadāna [Ch.32]: Tkaoka A35
- Śārdūlakarṇāvadāna [Ch.33]: Filliozat 132; Leningrad 4; BSP ca270(3-104)=NGMPP
- -Card A125/14; SBLN 62[→B]; Goshima・Noguchi 106; Takaoka CA27; ASB p.2
- 55; NGMPP-Card E265/5
- Rudrāyaṇāvadāna [Ch.37]: Matsunami 380.V-c; Bir 204; BSP tr592(2-204)=NGMPP-
- Card A919/15
- Maitrakanyakāvadāna [Ch.38]: Bir 154; Bendall Add.1042; NGMPP-Card A919/14(=
- pa70)
- Divyāvadānādi-prakīrṇa-patra: Bir 79(h); BSP tr737(1-305)=NGMPP-Card B24/49
- Fragments of Divyāvadāna: Bendall Add.1680-III
- 中央アジア出土の梵語断片の中に、Div.とよく一致する断片が Turfan I~VI に報告されて
- いる。それは、以下のとおり。
- (I) Koṭīkarṇa……Turfan I 598
- (VIII) Supriya……Turfan III 873 (完全には一致しない)
- (XIII) Svāgata……Turfan V 1124
- (XXI) Sahasodgata……Turfan V 1330; V 1524
- (XXXV) Cūḍāpakṣa(Cūḍapanthaka)……Turfan V 1349(+1465+1516)
- 一方、次の断片は Div.と話が対応するが、異なる伝承に属し、一致はしない。
- (I) Koṭīkarṇa……Turfan I 591
- (XVII) Māndhātā……Turfan I 558=IV 558; V 1162
- (VIII) Supriya / (XXXVI) Maitrakanyaka……Turfan V 1425
- 次の表は、Div.の一部分にあたる漢訳ならびに近代語訳を、Div.の章と対照させたものである。

□ (付) Divyāvadānamālā

□ Divyāvadānamālā [Div.-m.] は、Div.の写本の伝承の過程で生じた Div.の異本が、Div.と区

□ 別されるため、故意に -mālā と付けられたものか、あるいは単なる Div.の異読と見做されるべ

□ きなのか、不明である。Div.の名称の方が Div.-m.という名称より古いという証拠はない。しか

□ し現在 Div.-m.と名付けられている写本を見ると、Div.と名付けられている写本よりも、所属を

□ 見失って浮動し遊離している単行の avadāna 写本を吸収し、再編成して作られている場合が多

初校

5章1節

林
語
仙
典
の
研
究
(I)

Div.の章	対応する漢訳資料(大正蔵)と Gilgit MSS.(Dutt.III)	近代語への翻訳
1 Kotikarna	皮革事(23, 1048c-1053c) GM pt.4, p.159	榊(1912-15);Grünwedel(1920); 岩本(1974)
2 Pūrṇa	薬事(24, 7c-17a)	Burnouf(1844);榊(1912-15); Thomas(1950);岩本(1974)
3 Maitreya	薬事(24, 23c-26a)	榊(1912-15)
4 Brāhmanadārikā	薬事(24, 36a-37a)	榊(1912-15)
5 Stutibrāhmana	薬事(24, 37c-38a)	榊(1912-15)
6 Indrabrāhmana	薬事(24, 38a-b, 23a-c)	榊(1912-15)
7 Nagarāvalambikā	薬事(24, 53c-56a) GM pt.1, p.79	榊(1912-15)
8 Supriyā		榊(1912-15)
9 Mendhakagrhapati- vibhūtipariccheda	薬事(チベット訳のみ、大谷 No.1030, Ne 26a-32b) GM pt.1, p.241	
10 Mendhaka	薬事(同上) GM pt.1, p.250	Burnouf(1844)
11 Aśokavarna		平岡(1991a)
12 Prātihāryasūtra	雑事(24, 329a-333c)	Burnouf(1844);宮治(1979)
13 Svāgata	毘奈耶(23, 857a-860a)	Ch'en(1947)
14 Sūkarikā	嗟■■■■法天子…獲免惡道經 (15, 129b-130b)	Ware(1928);高島(1952)
15 Anyatamabhikṣu (Cakravartivākrta)		
16 Sukapotakau		
17 Māndhātā	雑事(24, 387c-389a) 仏説頂生王因縁經 (3, 393a-406b)	Burnouf(1844);Schieffner(1882)
18 Dharmaruci		Zimmer(1925);村上(1984)
19 Jyotiska	雑事(24, 210c-217b)	Zimmer(1925);奈良(1966)(1988)
20 Kanakavarna	金色王經(3, 388a-390c)	Burnouf(1844);Zimmer(1925)
21 Sahasodgatasya prakaraṇa	毘奈耶(23, 810c-814b)	
22 Candraprabha- bodhisattvacaryā	月光菩薩經(3, 406c-408a)	
23 Saṃgharakṣita	出家事(23, 1035b-1038b) GM pt.4, p.28 仏教因縁 僧護經(17.565-572)	Burnouf(1844);Näther(1975)
24 Nāgakuṃāra	出家事(同上)GM pt.4, p.48 仏説因縁僧護經(同上)	Näther(1975)

ae

25 Samgharaksita- avadānasya śeṣa	出家事(同上)GM pt.4, p.47 仏説因縁僧護經(同上)	
26 Pāmsupradāna	阿育王經(50, 131-149) 阿育王伝(50, 99-111) 雜阿含經(2, 161-170, 181-182) 阿育王經(同上)阿育王伝(同上) 雜阿含經驗(同上)	Burnouf(1844);Windisch(1895); Stevens(1911);Zimmer(1925); Thomas(1950);定方(1982); Strong(1983)
27 Kunāla		Burnouf(1844);Hertel(1908); Stevens(1911);岩本(1974);
28 Vitaśokak	阿育王經(同上)阿育王伝(同上)	定方(1982);Strong(1983)
29 Aśoka	阿育王經(同上)阿育王伝(同上) 雜阿含經(同上)	Burnouf(1844);Stevens(1911); 定方(1982);Strong(1983)
30 Sudhanakumāra	藥事(24, 59b-64c) GM pt.1, p.123	定方(1982);Strong(1983) 奈良(1966)(1988);岩本(1974);
31 Toyikāmaha	藥事(24, 52a-53c) GM pt.1, p.68	Schiefner(1882)
32 Rūpavati	銀色女經(3, 450a-452a)	
33 Sārdūlakarṇa	摩登伽經(21, 399a-410b) 舍頭諫太子二十八宿經 (21, 410b-419c)	
34 Dānādhikāra- mahāyānasūtra	仏説布施經(16, 812c-813b)	Ware(1929)
35 Cūdāpaksa	毘奈耶(23, 794c-803c)	
36 Mākandika	毘奈耶(23, 886a-893c)	
37 Rudrāyana	毘奈耶(23, 873b-882a)	Burnouf(1844);Grünwedel(1925); Nobel(1955)
(38 Maitrakanyaka)		Grünwedel(1920);Klaus(1983)

□119) どのように感じられる。しかし Div.の後に Div.-m.が編集されたといいきることは出来ないであ
 □120) ろう。Div.という名が記されてある写本も、実際には Div.より Div.-m.に近い内容である場合
 □121) があり、またその逆の場合もあり、厳密な Div.と Div.-m.の区別はなされていなかった疑いす
 □122) らある。Div.-m.にせよ Div.にせよ、個々の写本ごとに章数が違い、異なった章の出入りが見ら
 □123) れ、それらの違いは類型化・系統化を許さないものがある。Div.-m.の系統と Div.の系統とを明
 □124) 確に分けることは困難であり、従って、Div.-m.という異本が、Div.とどこが異なるのかを画然
 □125) と定義することは難しいように思われる。

□126) Div.はもともと、Avadānaśataka 系列の説話集と違って、説話間の関係・繋がりがゆるやか
 □127) であつたために、自由に説話を出し入れできる融通がきき、そのために写本間に多くの異本が生
 □128) まれ、その異本間で、Div.のほか Div.-m.という異名も並行して使われるようになったのかも
 □129) しれない。Div.や Div.-m.の写本に比較的遅い時代に編入された avadāna には、本来は単独で
 □130) 流通していた avadāna であつたものがかなりあり、Div.や Div.-m.の写本は、少なくともネバ
 □131) ルにおいては、置き場所に困った説話を仮に容れておく器として使われたかのようである。

□132) Skt.MSS. (カタログに Divyāvadānamālā と記されている写本) : SBLN p.304[22 chs.]; ASB
 □133) p.246; Filliozat 56-57[MS.F, 30 chs.]; Goshima・Noguchi 49[43 chs.]; Thomas 8220;
 □134) Śāstrī 22[palm-leaf, 11th century]; Durbar p.10=NGMPP A38/14=BSP tr359(1-302)
 □135) [32 chs.?]=Bir 79(c); Durbar p.168[37 chs.]=BSP tr295(1-303)=Bir 79(f)=NGMPP
 □136) -Card A1332/19=E1257/5[21 chs.]; BSP tr601(1-299)[43 chs.]=Bir 79(e)=NGMPP-
 □137) Card A120/5-121/1=B688/2-689/1; BSP ca11(1-300)=NGMPP-Card A120/2=A874/3;
 □138) BSP tr680(1-301)=Bir 79(d)=NGMPP-Card A38/15-39/1=A1336/7; BSP ca737(1-30
 □139) 4)¹²¹⁾[palm-leaf]; NGMPP-Card B97/5(=pa36)[498 fols.], B97/4(=pa105)[290 fols.]

□140) MSS. of Parts :

□141) (a) [Vīraśāvadāna]

□142) Divyāvadāne Śrī-vīraśāśakṣam Śrīlokeśvarastotra: Takaoka KA16R

□143) Divyāvadāne Vīraśāśa-uddhāra-kathā [Newārī]: Takaoka JN7

□144) Divyāvadānoddhṛta Aṣṭamīmāhātmya Kuśāśvadāna [Newārī]¹²²⁾: Takaoka CH385, CH540,

□145) DH3, JN19; SBLN p.274; Bendall 1538; BSP tr243(1-161), tr143(1-162), ca1034(1-

□146) 163); Matsunami 42; Dogra 81; NGMPP-Card C15/5, E364/10, E1169/1, E1197/6,

□147) E1257/9, E1267/17, E2061/5

□148) Divyāvadānoddhṛta Aṣṭamīmāhātmya(-Vīraśāśvadāna ?) [Newārī]: Takaoka CH235,

□149) DH304; NGMPP-Card C15/5, D29/3, D34/28, E964/8-965/1, E1048/1, E1480/11, E

□150) 1743/7, H124/10, H160/5, H192/2, H341/19

- ☐ Aṣṭamīvrataṃmahātmya Virakuśāvadāna(-kathā) [Newārī]: Filliozat 114; ASB p.254;
- ☐ IASWR MBB-I-150; NGMPP-Card E265/2
- ☐ Virakuśāvadāna(-kathā)[Newārī]; Takaoka A53F, A89, CA29-1, CH382, CH83, CH24
- ☐ 0, CH568, D60, DH327, DH355; NGMPP-Card B100/4(=pa14), B100/6(=tr1385),
- ☐ B100/7(=ca1034), B100/10(=ca1388), D5/19, D12/11, D26/5, D31/2, D45/16, D53/
- ☐ 5, E315/3, E352/29, E371/2, E385/9, E408/4, E416/16, E419/18, E451/43-452/1, E8
- ☐ 96/7, E1035/8, E1042/3, E1127/8, E1306/5, E1371/2, E1437/3, E1712/1, H173/3, I
- ☐ 1/14
- ☐ Kuśāvadāna [Newārī]: Bir 131; Goshima・Noguchi 23; Nagao p.11; NGMPP-Card A
- ☐ 119/10=B96/16(=tr243)
- ☐ (b)[Virakuśāvadāna 以外の Div.-m.の写本]
- ☐ Pañcakārṣaśatāvadāna: Matsunami 380-IV
- ☐ Divyāvadānamālāyāṃ Jyotiṣmatyadhyāye Puṣkarasāri-triśaṃku-saṃvādalīnakrama: Tho-
- ☐ mas 7707
- ☐ (Divyāvadānoddhṛta) Viśvantarakathā [Newārī]: Dogra 95; NGMPP-Card C74/7, D50/
- ☐ 16, D51/6, D64/9, D64/11, E652/3, E177/9, E315/7, E352/38, E385/11, E652/3, E935/2
- ☐ 5, E1042/4, E1086/9, E1102/10, E1105/14, E1147/5, E1147/7, E1291/15, E1310/4, E131
- ☐ 1/3, E1367/7, E1445/20, E1481/4, E1546/19, E1554/10, E1549/11, H48/4, H121/7, H14
- ☐ 1/14, I21/12
- ☐ (Divyāvadānoddhṛta) Aghorabrāhmaṇakathā: NGMPP-Card E385/18
- ☐ Divyāvadānamālāyāṃ Sudhanakinnarījātāvadāna: NGMPP-Card H160/1
- ☐ Divyāvadānamālāyāṃ Sumāgadhāvadāna [Ch.43]: NGMPP-Card E1257/7
- ☐ Divyāvadāne.....(?): NGMPP-Card D64/7

☐ 4. 漢訳で伝わる初期の Avadāna 集成

☐ avadānamālā 類が作られる以前の、インドで編集された avadāna の集成を「初期の avadāna 集成」として定義するならば、初期の avadāna 集成にあたる作品は、梵本としては ☐Avadānaśataka と Divyāvadāna の両作品が、また、チベット大蔵経では Avadānaśataka と ☐Karmaśataka が伝わっているだけであるが、次にあげるように、漢訳大蔵経においては、2～☐4世紀に成立したと思われる古い説話集成がたくさん伝わっており、初期の avadāna 集成を考¹²察する上で欠かせない資料となっている。これらの漢訳の諸作品は、千潟龍祥(1978)によって

[3] 総合的に研究された。

[4] 漢訳大蔵経で伝えられた説話集成には以下のものがある：¹²⁴⁾

- [3] 大正 152. 六度集経 (8 卷) 吳 康僧会 訳
- [4] 大正 153. 菩薩本縁経 (3 卷) 吳 支謙 訳
- [3] 大正 154. 生経 (5 卷) 西晋 竺法護 訳
- [4] 大正 155. 仏説菩薩本行経 (3 卷) 失 訳
- [3] 大正 160. 菩薩本生鬘論 (16 卷) 宋 紹德慧詢等 訳
- [3] 大正 194. 僧伽羅刹所集経 (3 卷) 僧伽羅刹 撰; 符秦 僧伽跋澄等 訳
- [4] 大正 197. 仏説興起行経 (2 卷) 後漢 康孟詳 訳
- [10] 大正 199. 仏五百弟子自説本起経 (1 卷) 西晋 竺法護 訳
- [11] 大正 200. 撰集百縁経 (10 卷) 吳 支謙 訳
- [12] 大正 201. 大莊嚴論 (15 卷) 後秦 鳩摩羅什 訳
- [13] 大正 202. 賢愚経 (13 卷) 元魏 慧学等 訳
- [14] 大正 203. 雜宝蔵経 (10 卷) 元魏 吉迦夜共曇曜 訳
- [15] 大正 204. 雜譬喻経 (1 卷) 後漢 支婁迦讖 訳
- [16] 大正 205. 雜譬喻経 (2 卷) 失 訳
- [17] 大正 206. 旧雜譬喻経 (2 卷) 吳 康僧会 訳
- [18] 大正 207. 雜譬喻経 (1 卷) 道略 集
- [19] 大正 208. 衆経撰雜譬喻 (2 卷) 道略 集; 姚秦 鳩摩羅什 訳
- [20] 大正 209. 百縁経 (4 卷) 僧伽斯那 撰; 肅斉 求那毘地 訳

[2] このなかで、撰集百縁経は Avadānaśataka の訳であり、菩薩本生鬘論は Āryaśūra の Jātaka-mālā の偽訳、大莊嚴論は Drṣṭāntapañkti の訳である。また最近、菩薩本縁経にはそれにあたる梵本の断片が報告されている (第 4 章, §2, A の節を参照)。梵本が存在するのはそれら 4 本だけであり、他の作品については梵本はおろかチベット訳すら存在しないものがほとんどである。例外的に、賢愚経は、チベット訳 (Mdsaṅs blun, Toh 341, Ota 1008, N(K) 326, C 980) とモンゴル訳 (Üliger-ün dalai) が伝わっているが、チベット訳は漢訳から重訳されたものであり、モンゴル訳はチベット訳から再重訳されたものらしい。

※ 賢愚経について、説明を補うと、この作品はもともと漢訳者の編集によって作られた作品であり、元になった一つの梵語の原典があったと思われる。僧祐が著わした「賢愚経記」(『出三蔵記集』巻九)によれば、河西の沙門、釈曇学・威徳など八人の僧が志を合わせて、西域へと經典を求めて旅をしたが、ホータン (于闐) の地でたまたま、五年に一度開かれる、三蔵に通じた諸國学がそれぞれ仏法を教授する大法会 (pañcavārṣika) に巡り合わせたので、めいめいが思い思い

1の法会に出て、胡語で聴聞したところを漢語に訳して書き留めておき、後にカラ・ホージョ（高
 2昌）に戻った時にそれを集めて一部とした。その後、この経は中国に運ばれて、元嘉22年（西暦
 3445年）に釈慧朗などの僧によって新たに編集がなされ、賢愚経と改名された。その時編集に参
 4加していた釈弘宗から、僧祐は以上の経緯を直接聞いたのであった。漢訳は現在、大別して2系
 5統の伝本を区別でき、高麗版では62話から成り、元・明の版では69話から成る。流布の過程でい
 6くつかの異本が生まれたらしい。漢訳の或る異本に基づいたらしいチベット訳は、デルゲ・ナル
 7タン・北京・チョネ・ラサ版本では51話から成るが、ロンドン大学アジア・アフリカ研究所蔵本
 8と大英博物館蔵写本カンジュール残欠本では52話を有する。1話多いのは漢訳の巻1第7の須闍提
 9縁品にあたる第52章が付いているからである。モンゴル訳も52話である。賢愚経のチベット訳
 10 Mdsans blun は I. J. Schmidt (1843) ¹²⁵⁾ によって校訂され、独訳も付けられて出版された。この
 11 テキストに対して、A. Schiefner (1952) ¹²⁶⁾ は重要な補遺訂正を行った。高橋盛孝 (1970) ¹²⁷⁾ は、チベ
 12 ット訳と漢訳書き下し文の対訳本を作った。この出版は、チベット訳の底本に Schmidt 本を使
 13 い、ロンドン大学蔵本と北京版の異読を報告し、チベット文と漢訳が一致しない場合は、漢訳
 14 (鉄眼本) の書き下し文の代わりに、口語の和訳を付けたものである。モンゴル訳は S. Frye (19
 15 81) ¹²⁸⁾ によって、英訳された。

16 5. チベット大蔵経中の単立の Avadāna

17 古い多くの avadāna の集大成たる Avadānaśataka や Karmaśataka の作品の外に、avadāna
 18 の1話のみが単行の独立した作品として訳されているものが、チベット大蔵経にいくつか見られ
 19 る：

20 [カンギュル部]

21 ① Āryajñānakasūtra-buddhāvadāna	Toh 344, Ota 1013, N(K) 331, C 983
22 ② Sūkarikāvadāna-nāma-sūtra	Toh 345, Ota 1014, N(K) 332, C 984
23 ③ Sumāgadhāvadāna	Toh 346, Ota 1015, N(K) 333, C 985
24 ④ Puṇyabalāvadāna	Toh 347, Ota 1016, N(K) 334, C 986
25 ⑤ Candraprabhāvadāna	Toh 348, Ota 1017, N(K) 335, C 987
26 ⑥ Śrīsenāvadāna	Toh 349, Ota 1018, N(K) 336, C 988
27 ⑦ Kanakavarṇapūrvayoga-nāma	Toh 350, Ota 1019, N(K) 337, C 989
28 ⑧ Śārdūlakarṇāvadāna	Toh 358, Ota 1027, N(K) 338, C 990

29 [テンギュル部]

30 ⑨ Suvarṇavarṇāvadāna	Toh 4144, Ota 5645, N(T) 3636
-------------------------	-------------------------------

- ㉑ ⑩ Kuṇālāvadāna Toh 4145, Ota 5646, N(T) 3637
 ㉒ ⑪ Āryanandimitrāvadāna-nāma Toh 4146, Ota 5647, N(T) 3638
 ㉓ ⑫ Saptakumārikāvadāna (Gopadatta 作) Toh 4147=4506, Ota 5648=5419, N(T) 363
 ㉔ 9=3410

㉕ 以下に、順次解説する。

㉖ ① Āryajāñnakasūtra-buddhāvadāna は、アヴァダーナであるかどうか不明である。対応する漢訳・梵本はないようである。

㉗ ② Sūkarikāvadāna-nāma-sūtra は、Divyāvadāna [Div.] の第14章 Sūkarikāvadāna の梵本に一致し、単立の漢訳として『仏説嗟婆曩法天子受王婦依獲免惡道經』(大正 No.595) がある。

㉘ ③ Sumāgadhāvadāna は、あらまし一致する梵本として常盤井(1918)と岩本(1959)¹²⁹⁾が校訂した Sumāgadhāvadāna があり、漢訳として『仏説三摩竭經』(大正 No.129)、『須摩提女經』(大正 No.128)、『仏説給孤長者女得度因緣經』(大正 No.130) 等がある。チベット訳は岩本(1964)¹³⁰⁾によって発表された。

㉙ ④ Puṇyabalāvadāna は、漢訳として『仏説福力太子因緣經』(大正 No.173) がある。一致する梵本資料はないが、Mahāvastu 第3巻の Puṇyavantajātaka は恐らく並行話と見做し得る。

㉚ ⑤ Candraprabhāvadāna は、Div.の第22章 Candraprabha-bodhisattvacaryāvadāna の梵本に一致し、単立の漢訳として『仏説月光菩薩經』(大正 No.166) がある。

㉛ ⑥ Śrīsenāvadāna は梵本、漢訳ともに対応するものが見出し得ない。

㉜ ⑦ Kanakavarṇapūrvayoga-nāma は、Div.の第20章 Kanakavarṇāvadāna の梵本に一致し、単立の漢訳として『金色王經』(大正 No.162) がある。

㉝ ⑧ Śārdūlakarṇāvadāna は、Div.の第33章 Śārdūlakarṇāvadāna の梵本に一致し、単立の漢訳として『摩登伽經』(大正 No.1300)、『舍頭諫太子二十八宿經』(大正 No.1301) がある。

㉞ ⑨ Suvarṇavarṇāvadāna は、漢訳として『金色童子因緣經』(大正 No.550) があり、梵本としては、Vratāvadānamālā の冒頭の章として新たに改稿されたヴァージョンの Suvarṇavarṇāvadāna の写本がたくさん存在するほか、それ以上にチベット訳・漢訳とよく一致する、古いヴァージョンの1写本も、Sāṅkṛtyāyaṇa がチベットで撮影した写本の中から見つかり、S. R. Roy¹³¹⁾(1971) や Rajapatirana (1974) によって校訂出版された。

㉟ ⑩ Kuṇālāvadāna は、ほぼ一致する梵本として Div.の第27章 Kuṇālāvadāna があり、漢訳としては Aśokāvadāna (=Div. 第26章~29章) の漢訳である『阿育王伝』(大正 No.2042)『阿育王經』(大正 No.2043) 等がある。

㊱ ⑪ Āryanandimitrāvadāna-nāma は、漢訳として『大阿羅漢難提蜜多羅所說法住記』(大正

- No.2030) があるが、十六大阿羅漢の正法護持と釈迦法住世の時限について、仏滅後八百年に大
 ²阿羅漢ナンディミトラが予言を遺す文献で、アヴァダーナの作品とは見做し得ない。漢訳につい
 □ては T. Watters (1898) の紹介、¹³²⁾ Lévi・Chavannes (1916) の仏訳があり、チベット訳は清水亮
 □昇 (1940) によって和訳された。¹³³⁾
 □⑫ Gopadatta 作の Saptakumārikāvadāna は、一致する梵文写本が Filliozat 142として存在
 □する。この作品は、Asokāvadānamālā の第11章 Saptakumārikāvadāna とは別のものであり、
 □Gopadatta 作の Jātakamālā の一部ではないかと M. Hahn (1980a)(1985b) によって推定され
 □た。チベット訳は、L. Dargyay (1978) によって校訂され、独訳された。¹³⁴⁾ この Gopadatta 作の
 □Saptakumārikāvadāna に対する注釈書である、Saptakumārikāvadāna-ṭīkā という梵文古写本
 □が、1本だけ BSP tr365(3-134)[=Bir 221=Durbar p.52=NGMPP A936/3]に存在している。

- [1] 1) Eugène Burnouf (1844) : *Introduction à l'histoire du Bouddhisme indien*, Paris. ; 2nd ed., 1876.
- [2] 2) Léon Feer (1866) : Le Sūtra des quatre préceptes, *JA*, Oct.-Nov. 1866, pp.269-357.
- [3] 3) L. Feer (1869) : 1) *Le Prodige (Prātihārya) de l'Avadāna Çataka, en tibétain et en sanskrit.*
2) *Conversion de Nandopananda en tibétain et en pâli, précédés de l'Alphabet Pâli-Siamois*,
Paris.
- [4] 4) L. Feer (1873) : L'ami de la vertu, l'amitié de la vertu (Kalyānamitra-Kalyānamitratā), *JA*,
1873, pp.5-66.
- [5] 5) L. Feer (1878) : Maitrakanyaka-Mittavindaka, La piété filiale, *JA*, Avril-Juin 1878, pp.360-44
3.
- [6] 6) L. Feer (1879) : Le Livre des cent Légendes (Avadāna-çataka), *JA*, Juillet 1879, pp.141-189, et
Oct.-Nov. pp.273-307.
- [7] 7) Rajendralala Mitra (1882) : *The Sanskrit Buddhist Literature of Nepal*, Calcutta.
- [8] 8) L. Feer (1891) : *Avadānaçataka, Cent légendes (bouddhiques), traduites du sanskrit*, (AMG,
XVIII), Paris. [再版 : Amsterdam, 1979]
- [9] 9) J. S. Speyer (1909) : *Avadāna-çataka, a century of edifying tales belonging to the Hīnayāna*,
Vol.II. p.xc.
- [10] 10) L. Feer (1880) : Comment on devient Buddha, *JA*, Oct.-Déc. 1880, pp.486-514.
- [11] 11) L. Feer (1881a) : Comment on devient Pratyekabuddha, *JA*, Avril-Juin 1881, pp.515-550.
- [12] 12) L. Feer (1881b) : Comment on devient Arhat, *JA*, Oct.-Déc. 1881, pp.460-498.
- [13] 13) L. Feer (1882) : Mésaventures des Arhats, *JA*, Avril-Juin, 1882, pp.328-360.
- [14] 14) L. Feer (1883) : Comment on devient Arhatī, *JA*, Avril-Juin, 1883, pp.407-440.
- [15] 15) L. Feer (1884a) : Comment on devient Deva, *JA*, Jan. 1884, pp.5-41.
- [16] 16) L. Feer (1884b) : Comment on devient Preta, *JA*, Fév.-Mars, 1884, pp.109-140.
- [17] 17) L. Feer (1884c) : Les Avadānas-jātakas, *JA*, Août-Oct. 1884, pp.332-369.
- [18] 18) 漢訳「撰集百緣經」では次のように十品の名がある。菩薩授記品第一。報応受供養品第二。授記辟
支仏品第三。出生菩薩品第四。餓鬼品第五。諸天天下供養品第六。現化品第七。比丘尼品第八。声聞
品第九。諸緣品第十。
- [19] 19) L. Feer (1891)=註8。
- [20] 20) J. S. Speyer (1899) : Buddhas Todesjahr nach dem Avadānaçataka, *ZDMG*, LIII, S.120-124.
- [21] 21) J. S. Speyer (1906,1909) : *Avadāna-çataka, a century of edifying tales belonging to the Hīna-*
yāna, (Bibliotheca Buddhica, III), 2 vols., St.-Pét. [再版 : 's-Gravenhage, 1958. (Indo-Iranian
Reprints, III); 名著普及会, Tokyo, 1978]
- [22] 22) Hermann Oldenberg (1912) : Studien zur Geschichte des buddhistischen Kanon, *NGGW*, 1912,
S.155-218. [再録 : *Kleine Schriften*, II, 1967, S.973-1036]
- [23] 23) Julius von Otto (1913) : Aus dem Avadānaçatakam, *Buddhistische Welt*, Jg. VI, Leipzig/Bres-
lau, S.289-304.
- [24] 24) R. L. Turner (1913) : Notes on the Language of the Dvāvimśatyavadānakathā, *JRAS*, 1913,
pp.289-304.
- [25] 25) J. Przyluski (1918-20) : Le Parinirvāṇa et les funérailles du Bouddha. Première partie, *JA*,
XI^e série, t. XI (1918), pp.485-526 ; t. XII (1918), pp.401-456 ; t. XIII (1919), pp.365-430 ; t. XV
(1920), pp.5-54.
- [26] 26) J. Przyluski (1936) : Récits populaires et contes bouddhiques (en collaboration avec M. Lalou),

- [1] JA, Avril-Juin 1936, pp.177-191.
- [27] E. Waldschmidt (1944,48) : *Die Überlieferung vom Lebensende des Buddha. Eine vergleichende Analyse des Mahāparinirvāṇasūtra und seiner Textentsprechungen*, Erster Teil, 1944 ; Zweiter Teil, 1948, Göttingen.
- [28] Fa Chow (1945) : Chuan Tsi Yuan King and the Avadānaśataka, VBA, Vol.1, pp.35-55.
- [29] P. C. Bagchi (1945) : A Note on the Avadānaśataka and its Chinese Translations, VBA, Vol. 1, pp.56-61. [再録 : P. C. Bagchi : *Indological Studies, a Collection of Essays*, Visva-Bharati, 1982, pp.155-160]
- [30] E. J. Thomas (1950) : *The Quest of the Enlightenment. A Selection of the Buddhist Scriptures Translated from the Sanskrit*, London, 1950.
- [31] 千瀉龍祥 (1954) : 『本生経類の思想史的研究』, 附篇共, 山喜房仏書林. 改訂増補版, 1978年.
- [32] P. L. Vaidya (1958) : *Avadāna-Śataka*, (Buddhist Sanskrit Texts, XIX), Darbhanga.
- [33] 岩本裕 (1962) : 「アヴァダーナ・シャタカ」について, 『東洋学報』44-4, 94-107頁. [再録(改稿) : 岩本裕 (1967) : 『仏教説話研究序説』, 法蔵館, 第2章. 増補再版 : 開明書院, 1978年]
- [34] Charlotte Vaudeville (1964) : La Légende de Sundara et les funérailles du Buddha dans l' Avadānaśataka, BEFEO, LII, pp.73-91.
- [35] 奈良康明 (1966) : アヴァダーナ, 『仏典 I』(中村元編), 筑摩書房, 314-324頁.
- [36] 奈良 (1988) : 『仏弟子と信徒の物語 - アヴァダーナ -』, 筑摩書房.
- [37] R. Handurukande (1982) : Pāṇīyāvadāna, *The Sri Lanka Journal of the Humanities*, Vol. VIII, 1/2, pp.158-161.
- [38] J.-U. Hartmann (1985) : Zur Frage der Schulzugehörigkeit des Avadānaśataka, in : H. Bechert hg., *Zur Schulzugehörigkeit von Werken der Hīnayāna-Literatur*, Erster Teil, Göttingen, S.219-224.
- [39] 奈良康明監修 : 『仏教説話大系 第26巻 アバダーナ物語 (二)』, すずき出版, 1985年.
- [40] 以上のほかに次の研究がある : [欧文] W. Pachow : Further Studies on the Avadānaśataka, *Summaries All-India Oriental Conference*, Ahmedabad, 1953, p.190.; R. T. Meyer : The Kuṇāla Story in its Avadānaśataka and Divyāvadāna Versions, in : D. Sinor ed., *Proceedings of the Twenty-Third International Congress of Orientalists* (Cambridge, 21-28 August 1954), London, 1957, p. 237.; L. Alsdorf : Śāśa-Jātaka und Śāśa-Avadāna, WZKSO, V(1961), S.1-17. [再録 : *Kleine Schriften*, 1974, S.347-363]; M. Hahn : On the Avadānaśataka and its Affiliation, in : *XXXII International Congress for Asian and North African Studies*, 1986, Hamburg, abstracts, p.114.
- [41] [邦文] 奈良康明 : 古代インド仏教の宗教的表層と基層 - アヴァダーナ・シャタカを例として -, (1)~(3), 『三蔵集 1』, 大東出版社, 1975年.; 石上善応 : (Bibliotheca Buddhica III) Avadānaśataka, 『仏教文庫文献解題』, 名著普及会, 1978年, 11-15頁.; 田辺和子 : Pāṇīyāśa-jātaka 中の Surūparāja-jātaka について, 『印仏研』32-2, 1984年, 1065-1062頁.; 細田典明 : 梵文『雜阿含經』仏所説品外道相應 (II), 『印度哲学仏教学』4号, 1989年, 140-153頁.
- [40] Léon Feer (1901) : Le Karma-śataka, JA, 1901, Janv.-Fév. pp.53-100, Mars-Av. pp.257-315 et Mai-Juin pp.410-486.
- [41] J. S. Speyer (1909) : *Avadāna-śataka, a century of edifying tales belonging to the Hīnayāna*, Vol.II. pp.XIX-XXI.
- [42] L. Feer (1883) : *Fragments extraits du Kandjour*, (AMG, 5), Paris. pp.292-295.
- [43] J. Przyluski (1936) : Récits populaires et contes bouddhiques (en collaboration avec M. Lalou),

- 1 JA, Avril-Juin 1936, pp.177-191.
 2 このほか研究としては次の論文がある : L. Feer : Kokālika, JA, Mars-Av. 1898, pp.185-209. ; 阿
 3 部文雄 (1935) : 西藏伝「カルマシャタカ」に就いて, 『駒沢学報』 6 卷 1 号, 1935 年。
 444 Eugène Burnouf (1844) : *Introduction à l'histoire du Bouddhisme indien*, Paris. ; 2nd ed., 1876.
 445 Rajendralala Mitra (1882) : *The Sanskrit Buddhist Literature of Nepal*, Calcutta.
 446 F. Anton von Schiefner (1882) : *Tibetan Tales, Derived from Indian Sources*. Tr. from the
 7 Tibetan of the Kah Gyur by F. A. von Schiefner and from the German into English by W. R. S.
 8 Ralston, London. [再版 : London, 1906, 1926; Delhi, 1988] ; Léon Feer (1883) : *Fragments extraits*
 9 *du Kandjour*, (AMG, 5), Paris. pp.292-295.
 10 47 E. B. Cowell & R. A. Neil (1886) : *Divyāvadāna, a Collection of Early Buddhist Legends*, Cam-
 11 bridge.
 12 48 H. Wenzel (1886) : Index to the Verses in the Divyāvadāna, JPTS, 1886, pp.81-93.
 13 49 Ernst Windish (1895) : Māra und Buddha, *Abhandlungen der Königlich Sächsischen Gesellscha-*
 14 *ft der Wissenschaften, Philol.-hist. Klasse*, XV, 4, Leipzig.
 15 50 J. S. Speyer (1902) : Critical Remarks on the Text of Divyāvadāna, WZKM, XVI, S.103-130,
 16 340-361.
 17 51 J. S. Speyer (1906) : De koopman, die tegen zijne moeder misdreef. Een op den Boro Boedoer
 18 afgebeeld Jātaka, *Bijdragen tot de Taal-, Land-, en Volkenkunde*, LIX, pp.181-206.
 19 52 Ed. Huber (1904) : Études de Littérature bouddhique. IV. Trois contes de Sūtrālamkāra d'
 20 Āśvaghōṣa conservés dans le Divyāvadāna, BEFEO, 4, pp.709-726.
 21 53 Ed. Huber (1906) : Études de Littérature bouddhique. V. Les sources de Divyāvadāna (Suite),
 22 BEFEO, 6, pp.1-37.
 23 54 Sylvain Lévi (1907) : Les éléments de formation du Divyāvadāna, *T'oung Pao*, Series II,
 24 VIII, pp.105-122.
 25 55 Kanga Takahata (1954) : *Ratnamālāvadāna, a garland of precious gems or a collection of edi-*
 26 *fyng tales, told in a metrical form, belonging to the Mahāyāna*, (Oriental Library Series D, Vol.
 27 3), Tokyo.
 28 56 J. L. Panglung (1981) : *Die Erzählstoffe des Mūlasarvāstivāda-Vinaya, analysiert auf Grund*
 29 *der tibetischen Übersetzung*, (Studia Philologica Buddhica, Monograph Series, III), Tokyo.
 30 57 Johannes Hertel (1908) : *Ausgewählte Erzählungen aus Hemacandras Pariṣiṣṭaparvan*, Leipzig.
 31 58 Winifred Stevens (1911) : *Legends of Indian Buddhism*, London.
 32 59 H. Oldenberg (1912) : Studien zur Geschichte des buddhistischen Kanons. NAWG, Phil.-hist.
 33 Kl., 1912, S.155-218. [再録 : *Kleine Schriften*, 1967, S.973-1036]
 34 60 榊亮三郎 (1912-15) : 「ディ■アーヴダーナ」の研究並に翻訳, 『六条学報』 134~138, 140~162, 16
 35 9号。
 36 61 M. Winternitz (1913) : *Geschichte der Indischen Literatur*. Zweiter Band, Erste Hälfte. Die bu-
 37 ddhistische Literatur, Leipzig. S.221ff.
 38 62 J. Przyluski (1914) : Le Nord-ouest de l'Inde dans le Vinaya des Mūlasarvāstivādin et les te-
 39 xtes apparentés, JA, XI^e série, t. IV, Nov.-Déc. 1914, pp.493-568.
 40 63 A. Gawroński (1919) : *Studies about the Sanskrit Buddhist Literature*, Krakowie. [pp.49-56,
 41 The epical poems of Āśvaghōṣa and Divyāvadāna]
 42 64 Albert Grünwedel (1920) : *Alt-Kutscha. Archäologische und religionsgeschichtliche Forschungen*

- [1] *an Tempera-Gemälden aus Buddhistischen Höhlen der ersten acht Jahrhunderte nach Christi Geburt*, II. Teil, Berlin. S.31-50.
- [365] M. Bloomfield (1920) : Notes on the Divyāvadāna, *JAOS*, 40, pp.336-352.
- [466] G. Tucci (1922) : Notes et Appunti sul Divyāvadāna, *Atti del Reale Istituto Veneto di Scienze, Lettere et Arti*, 1921/22, Tomo LXXXI, Parte 2, Venezia, 1922, p.499ff. [再録: G. Tucci : *Opera Minora*, Part 1, Roma, 1971, pp.27-48]
- [767] J. Przyluski (1923) : *La Légende de l'empereur Aśoka (Aśokāvadāna) dans les textes indiens et chinois*, AMG, Tome 31, Paris.
- [368] Dilip Kumar Biswas (1967) : *The Legend of Emperor Aśoka in Indian and Chinese Texts*, by Jean Przyluski. Translated from the French with Additional Notes and Comments, Calcutta.
- [169] H. Lüders (1926) : *Bruchstücke der Kalpanāmaṇḍitīkā des Kumāralāta*, (Kleinere Sanskrittexte, Heft II), Leipzig. [再版: H. Härtel hg., *Monographien zur indischen Archäologie, Kunst und Philologie*, Bd.1, Wiesbaden, 1979, S.117-375]
- [70] 花山勝道 (1954) : 雑阿含經の阿育王譬喩 Aśokāvadāna について, 『大倉山学院紀要』 1, 42-54 頁。
- [71] G. K. Nariman (1923) : *Literary History of Sanskrit Buddhism*, Bombay. [Appendix VII : The Sources of the Divyāvadāna ; Appendix XII : Notes on the Divyāvadāna] [再版: Delhi, 1972]
- [72] H. Zimmer (1925) : *Karman, ein buddhistischer Legendenkranz. 4 Erzählungen aus dem in Skt. abgefassten Quellenwerke Divyāvadāna*, München. [文庫版: H. Zimmer : *Buddhistische Legenden*, (Insel Taschenbuch 820), 1985]
- [73] A. Grünwedel (1925) : *Die Teufel des Avesta und ihre Beziehungen zur Ikonographie des Buddhismus zentral-asiens*, Berlin. v. S.5-27.
- [74] James R. Ware (1928) : Studies in the Divyāvadāna. I. Sūkarikāvadāna, *JAOS*, 48, pp.159-165.
- [75] J. R. Ware (1929) : Studies in the Divyāvadāna. II. Dānādhikāramahāyānasūtra, *JAOS*, 49, pp.40-51.
- [76] J. Przyluski (1929) : Fables in the Vinaya-Piṭaka of the Sarvāstivādin School, *IHQ*, Vol. V, No.1, pp.1-5.
- [77] Sylvain Lévi (1932) : Notes sur des manuscrits sanskrits provenant de Bamiyan (Afghanistan) et de Gilgit (Cachemire), *JA*, 1932, pp.1-45.
- [78] J. R. Ware (1938) : The Preamble to the Saṃgharakṣitāvadāna, *HJAS*, Vol. 3, pp.47-67.
- [79] W. Zinkgräf (1940) : *Vom Divyāvadāna zur Avadānakalpalatā, ein Beitrag zur Geschichte eines Avadāna*, Heidelberg.
- [80] Zinkgräf の推定のとおりであれば, Aśokāvadānamālā の成立は, 11世紀の Kṣemendra 以前であったことになる。これは Aśokāvadānamālā を初めとするアヴァダーナ・マラー類の成立を考える上で, 見過ごすことのできない結論である。
- [81] E. J. Thomas (1940) : Note on the Divyāvadāna, *BSOAS*, X, Part 3, pp.654-656.
- [82] E. J. Thomas (1941) : Epithets of an Arhat, in the Divyāvadāna, *IHQ*, XVII, pp.104-107.
- [83] Kenneth K. S. Ch'en (1947) : A Study of the Svāgata Story in the Divyāvadāna in its Sanskrit, Pāli, Tibetan and Chinese Versions, *HJAS*, Vol. 9, pp.207-314.
- [84] E. J. Thomas (1950) : *The Quest of Enlightenment. A Selection of the Buddhist Scriptures translated from the Sanskrit*, London.
- [85] D. R. Shackleton Bailey (1950-51) : Notes on the Divyāvadāna, Part 1, *JRAS*, 1950, pp.166-

- 184.; Part 2, *JRAS*, 1951, pp.82-102.
- [386] 高島寛我 (1952): 仏説嗟轍曇法天子受三婦依獲免惡道経について, 『小西・高島・前田三教授頌寿記念, 東洋学論叢』, 京都, 9-22頁。
- [487] 善波周 (1952): 摩登伽経の天文曆数について, 同上書, 171-213頁。
- [488] E. Waldschmidt (1952): Zur Śroṇakoṭīkarṇa-Legende, *NAWG*, I, 1952, Nr.6, S.129-151.
- [489] F. Weller (1953): Divyāvadāna 244.7ff., *MIO*, I, 1953, S.268-276. [再録: *Kleine Schriften*, II, 1987, S.1467-1475]
- [490] L. Alsdorf (1955): Der Stūpa des Kṣemaṃkara, *Studia Indologica. Festschrift für Willibald Kirfel zur Vollendung seines 70. Lebensjahres*, Bonn, S.9-16. [再録: *Kleine Schriften*, 1974, S.592-599]
- [491] Kenneth K. S. Ch'en (1953): Apropos the Menḍhaka Story, *HJAS*, 16, pp.374-403.
- [492] Sujitkumar Mukhopadhyaya (1954): *The Śārdūlakarṇāvadāna*, Santiniketan.
- [493] J. Nobel (1955): *Udrāyana, König von Roruka*, 2 Bde., Wiesbaden.
- [494] J. Brough (1957): Some Notes on Maitrakanyaka: Divyāvadāna xxxviii, *BSOAS*, 20, pp.111-132.
- [495] P. L. Vaidya (1959): *Divyāvadāna*, (Buddhist Sanskrit Texts, 20), Darbhanga.
- [496] V. S. Agrawala (1959): Notes on Sanskrit Words, *JAOS*, Vol.75, p.30.
- [497] Sujitkumar Mukhopadhyaya (1963): *The Aśokāvadāna*, New Delhi. [再版: New Delhi, 1982]
- [498] J. W. de Jong (1970): Review of S. Mukhopadhyaya: *The Aśokāvadāna*, *IJJ*, XII, pp.269-274.
- [499] V. S. Agrawala (1963): A Note on the Word Cārika in the Divyāvadāna, *Journal of the Oriental Institute*, Vol.12, Baroda, pp.337-339. [再録: V. S. Agrawala: A Note on the Word Cārika in the Divyāvadāna, *JAOS*, Vol.84, 1964, pp.55-56.]
- [500] G. M. Bongard-Levin & O. F. Volkova (1963): *Legenda o Kunale (Kuṇālāvadāna iz neopublikovannykh rukopisi Aśokāvadānamālā)*, Moskva.
- [501] 奈良康明 (1966): アヴァダーナ, 『仏典 I』 (中村元編), 筑摩書房, 1966年, 279-324頁。[pp.279-296, ジュヨーティシュカ・アヴァダーナ; pp.297-314, スダナクマーラ・アヴァダーナ]
- [502] 奈良 (1988): 『仏弟子と信徒の物語 - アヴァダーナ -』, 筑摩書房。
- [503] V. S. Agrawala (1966): Some Obscure Words on the Divyāvadāna, *JAOS*, Vol.86, No.2, pp.67-75.
- [504] 岩本裕 (1967): 『仏教説話研究序説』, 法蔵館 [増補再版: 開明書院, 1978年]。なお, これに先立つ Divyāvadāna に関する論文, 岩本 (1960): Sumāgadhāvadāna と Divyāvadāna, 『中野古稀記念』, 123-133頁, また岩本 (1964): Sarvāstivādin と Mūlasarvāstivādin — Śroṇakoṭīkarṇa の伝説をテーマにして, 『干潟記念論集』, 53-63頁, および岩本 (1965): Divyāvadāna 雑録, 『インド学試論集』, Nos.6-7, 36-45頁, の3論文は, この『序説』にすべて包摂された。
- [505] Sujitkumar Mukhopadhyaya (1967): A Critical Study of the Śārdūlakarṇāvadāna, *VBA*, Vol. XII, Part 1, pp.1-108.
- [506] E. Waldschmidt (1968): Ein Textbeitrag zur Udayana-Legende, *NAWG*, 1969, S.101-125. [英訳: E. Waldschmidt: The Burning to the Death of King Udayana's 500 Wives. A Contribution to the Udayana Legend, in: *German Scholars on India*, ed. by the Cultural Department of the Embassy of the Federal Republic of Germany, Vol. I, Varanasi, 1973]
- [507] 岩本裕 (1974): 『佛伝文学・佛教説話』, 仏教聖典選第2巻, 読売新聞社。
- [508] V. Näther (1975): *Das Gilgit-Fragment or. 11878A im britischen Museum zu London. Heraus-*

- gegeben, mit dem Tibetischen verglichen und übersetzt, Inaugural-dissertation, Marburg.
- 109) M. Hahn (1977): *Haribhātta and Gopadatta: Two Authors in the Succession of Āryasūra. On the Rediscovery of Parts of Their Jātakamālā*, *Studia Philologica Buddhica*, Occasional Paper Series I), Tokyo.
- 110) 宮治昭 (1979): Divyāvadāna 第12章 “Prātihāryasūtra” 和訳『文化紀要』(弘前大学教養部), 13号, 117-141頁。
- 111) 定方晟 (1982): 『アショーカ王伝』, 法蔵選書9, 法蔵館。
- 112) Georg von Simson (1982): Die Buddhistische Erzählung von Udrāyaṇa von Roruka und ihr mythologischer Hintergrund, *Indologica Taurinensia*, X, S.199-214.
- 113) John S. Strong (1983): *The Legend of King Aśoka. A Study and Translation of the Aśokāvadāna*, Princeton. [再版: Delhi, 1989]
- 114) Konrad Klaus (1983): *Das Maitrakanyakāvadāna (Divyāvadāna 38). Sanskrittext und deutsche Übersetzung*, *Indica et Tibetica* 2), Bonn.
- 115) 村上真完 (1984): 『西域の仏教 ―ベゼクリク誓願画考―』, 第三文明社。
- 116) Sharmistha Sharma (1985): *Buddhist Avadānas (Socio-political and Economic and Cultural Study)*, Delhi.
- 117) 『仏教説話大系 第25巻 アバダーナ物語 (一)』, すずき出版, 1985年。『仏教説話大系第23巻 世界のジャータカ (一)』, 1985年。
- 118) Matsunami 170, 171の Div.写本は, Cowell が校訂に用いた系統の写本とは異なる。
- 次に, 本文では触れなかった Divyāvadāna に関する研究書・論文を紹介する:
- [欧文の研究] Joseph Hackin: Sur des illustrations tibétaines d'une légende du Divyāvadāna, *AMG*, XL, 1914, pp.145-157.; J. Przyluski: La Place de Māra dans la mythologie bouddhique, *JA*, 210, 1927, pp.115-123.; Padmanabh S. Jaini: The Story of Sudhana and Manoharā: an Analysis of the Texts and the Borobudur Reliefs, *BSOAS*, XXIX, 1966, pp.533-558.; Kao Kuan-ju: Aśokāvadāna, *Encyclopaedia of Buddhism*, Vol.II, Fascicle 2(1967), Colombo, pp.198-200.; Dieter Schlingloff: Prince Sudhana and the Kinnarī, An Indian Love-story in Ajanta, *Indologica Taurinensia*, I(1973), pp.155-167, 8 plates.; H. Härtel: Die Geburt des Jyotiṣka. Anmerkungen zu einem neu erworbenen Gandhāra-Relief, in: K. Bruhn u. A. Wezler hg., *Studien zum Jainismus und Buddhismus. Gedenkschrift für Ludwig Alsdorf*, Wiesbaden, 1981, S.93-102.; J. W. de Jong: Notes on the Text of Aśoka Legend, *India and the ancient world, History, trade and culture before A.D. 650*, *Orientalia Lovaniensia Analecta* 25, 1987, pp.103-113.; D. Schlingloff: Die Pūrṇa-Erzählung in einer Kizil-Malerei, *Zentralasiatische Studien*, 21, 1988[1989], S.180-195.; Satoshi Hiraoka: The Relation between the Divyāvadāna and the Mūlasarvāstivādinaya —The Case of Divyāvadāna Chapter 31—, *Indogaku Bukkyō gaku Kenkyū* ■■ Vol. XXXIX, No. 2(1991), pp.1038-1036.
- [邦文の研究] 神林隆浄: 摩訶薩埵の内容に就て, 『現代仏教』126, 1935年, 25-32頁.; 石上善応: Pūrṇāvadāna について, 『印仏研』2-2, 1954年, 490-491頁.; 井ノ口泰淳: トカラ語 Kotikarnāvadāna 断片, 『龍谷大学論集』358号, 1958年, 1-24頁.; 渡辺照宏: Udāyaṇa 王と Rudrāyaṇa 王, 『干潟記念論集』, 1964年, 81-95頁。[再録: 『渡辺照宏仏教学論集』, 筑摩書房, 1982年, 377-393頁]; 羽溪了諦: 西域に於いて創作された譬喩譚, 『羽溪米寿記念選集』, 1971年, 667-679頁.; 山崎元一: 于闐建国伝説の一考察 ―特にアショーカ王伝説との関係について―, 『山本博士還暦記念, 東洋史論叢』, 1972年, 469-480頁.; 山崎元一: ウバグプタ伝説考―ブシルスキイ説の紹介を中心に―,

- [1] 『榎博士還暦記念、東洋史論叢』、1975年、465-480頁。：山崎元一：『アショーカ王伝説の研究』、春秋社、1979年。；青山亨：Śārdūlakarṇāvadāna の研究、『印仏研』30-2、1982年、659-660頁。；中川正法：舎衛城神変説話、『印仏研』30-2、1982年、657-658頁。；中川正法：Divyāvadāna における四句をめぐって、『印仏研』31-2、1983年、613-614頁。；宮坂有勝：Saptōtsada の語義について、『名古屋大学文学部研究論集』XCIII、哲学31、1985年、11-20頁。；平岡聡：ディヴィヤ・アヴァダーナの伝える仏塔崇拝の種々相、『仏教史学研究』33-1、1990年、18-37頁。；平岡聡：ディヴィヤ・アヴァダーナに見られる社会的地位と出家の問題、『南都仏教』66号、1991年、19-37頁。
- [119] Śāstri 22の写本は、Div.の最古の写本で、11世紀の貝葉であるが、Śāstri はこの写本の作品名をDiv.ではなく、Div.-m.と記している。
- [120] 岩本(1967)の『序説』p.144-147の、Div.とDiv.-m.の6写本の内容の対照表を参照。
- [121] BSP のカタログには、Div.という名で分類されている写本はなく、すべてDiv.-m.となっている。これはカタログの編者が両者を区別しなかったものか。
- [122] 写本のDivyāvadānoddhṛta Aṣṭamīmahātmya Kuśāvadāna というタイトルは、「Divyāvadāna から抜き出され、翻訳されてネワール語の説話集 Aṣṭamīvrata-māhātmya に所属する、Virakuśāvadāna」という意味であると解される。Aṣṭamīvrata-māhātmya はカトゥマンドゥ盆地で近世に成立したネワール語の(時には梵文を伴った)説話集である。この説話集は、Aṣṭamīvrata の精進日に仏教僧侶が信者達に説話を語り聞かせる必要から、編集されたものらしい。Aṣṭamīvrata-māhātmya は、ふつう10話ほどの説話から構成されているが、いかなる説話から構成されるかは、流動的であり、写本によって異なる。構成話の違いについては、Aśa Archives Catalogue pp.22-24 を参照されたい。
- Aṣṭamīvrata-māhātmya に所属するネワール語の説話には、Virakuśākathā や Viśvantarakathā のように「Divyāvadāna に由来する」と称するものの他に、Kavikumārakathā や Ajātaśatrudamanakathā のように「Vratāvadānamālā に由来する」と称するものや、Ratnadhvajakathā や Nidhanagrhapatikathā のように「Vicitrakarṇikāvadāna に由来する」と称するものなどがある。
- Aṣṭamīvratamāhātmya(Aṣṭamīvratākathā) の、(しばしば梵文を伴う)ネワール語の写本は次の通り：Cowell・Eggelling 76; Dogra 80; IASWR MBB-II-53; BSP ca341(1-39)=NGMPP-Card B9 6/2; NGMPP-Card A922/5(=ca1103), A118/2(=ca1493), B95/4(=ca1545), B95/6(=ca1084), B9 5/7(=ca1615), B95/16(=ca2284), D6/8, D6/9, D10/11, D23/11, D26/11, D29/3, D31/24, D32/3 1, D34/28, D38/8, D58/5, D64/13, D64/17, D75/35, E127/35, E177/6, E274/10, E295/9, E378/2, E417/23-418/1, E455/39, E492/45, E531/12, E538/18, E596/13, E811/5, E1042/7, E1088/12, E10 96/7, E1102/6, E1194/5, E1200/1, E1203/10, E1260/2, E1258/3, E1305/10-1306/1, E1337/10, E13 70/10, E1427/11, E1427/14, E1437/2, E1468/15, E1739/15-1740/1, E1741/2, E1768/2, E1768/22, E1838/5, E2050/3, E2051/1, E2061/8, E2062/1, E2329/30, E2485/25, E2332/5, E2533/9, G56/12, G58/7, G198/15, G204/13, H65/5, H71/18, H98/6, H127/11, H144/4, H145/3, H160/5, H192/2, H201/8, H216/12, H270/25, H281/20, H341/19, H397/17
- また Aṣṭamīvratamāhātmya に属する1説話の写本は次の通り：
- (a) Aṣṭamīvrata-Uposadhadevaputrikathā: NGMPP-Card D38/5, G56/11, G140/9, H142/4, H191/18
- (b) Aṣṭamīvratamāhātmye Dhanakaradharmākārāvadāna: NGMPP-Card E364/8, G56/12, G140/5
- (c) Aṣṭamīvratākathāyāṃ Dharmapālākathā: NGMPP-Card D30/4, E298/34, E404/20, H395/2
- (d) Aṣṭamīvratamāhātmye Sarvārthasiddhirājakumārāvadāna: NGMPP-Card D24/28
- (e) Aṣṭamīvratamāhātmye Sucandragrhapatikathā: NGMPP-Card E385/19
- (f) Aṣṭamīvratamāhātmye Sudhanarājakumārājanmakathā: NGMPP-Card D12/3, D25/26, D39/8,

- [1] E258/10, E300/2, E324/23, E356/6, E378/3, E385/7, E408/8, E531/14-532/1, E642/2, G56/9,
[2] G56/14, H52/3, H167/3
- [3] (g) Aṣṭamīvrata-māhātmye Kāśyapataṭhāgatasvargārohaṇakāṭhā: NGMPP-Card I22/4
[4] (h) Aṣṭamīvrata-māhātmye Mahāsatvarājakumārakathā: NGMPP-Card E1487/2
- [5] 123) 干潟龍祥 (1978): 『改訂増補 本生経類の思想史的研究』, 山喜房仏書林。
[6] 124) このうち六度集経, 旧雜譬喻経, 道略の雜譬喻経, 衆経撰雜譬喻, 百喻経, 雜宝蔵経の全部, な
[7] らびに生経の一部は, É. Chavannes によって仏訳がなされた: É. Chavannes: *Cinq cents contes et*
[8] *apologues, extraits du Tripiṭaka chinois*, Tom I-IV, Paris, 1910-35. [再版: Paris, 1962] また入
[9] 矢義高編の『仏教文学集』(中国古典文学大系60, 平凡社, 1975年)には, 古田和弘による雜宝蔵経,
[10] 百喻経, 賢愚経の部分訳が収められている。
- [11] 125) Isak Jakob Schmidt (1845): *Hdsais blun, oder der Weise und der Thor*, 2 Bde., St.Peters-
[12] burg-Leipzig. [独訳の巻だけの再出版: I. J. Schmidt: *Der Weise und der Thor. Buddhistische Le-*
[13] *genden*, Müller & Kiepenheuer, Hanau, 1978]
- [14] 126) Anton Schiefner (1852): *Ergänzungen und Berichtigungen zu Schmidt's Ausgabe des Dsangling*,
[15] St.Petersburg.
- [16] 127) 高橋盛孝 (1970): 『蔵漢対訳 賢愚経』, 関西大学東西学術研究所研究叢刊3, 関西大学東西学術
[17] 研究所。
- [18] 128) Stanley Frye (1981): *The Sutra of the Wise and the Foolish (mdo bdzans blun) or, The*
[19] *Ocean of the Narratives (üliger-ün dalai)*, translated from the Mongolian, Delhi.
- [20] なお賢愚経の研究には次のものがある: Ph.-Éd. Foucaux: *Le Sage et le fou. Extrait du Kan-*
[21] *jur, revu sur l'éd. originale et accompagné d'un glossaire*, Paris, 1842.; L. Feer: *Le Bodhisattva*
[22] *et la famille de tigres*, JA, Sept.-Oct. 1899, pp.272-303.; Junjirō Takakusu: *Tales of the Wise*
[23] *Man and the Fool*, in *Tibetan and Chinese*, JRAS, XXXIII(1901), pp.447-460.; S. Lévi: *Le*
[24] *Sūtra du Sage et du Fou dans la littérature de l'Asie Centrale*, JA, T. CCVII(1925), pp.305-
[25] 322.; H. W. Bailey: *Kāñcanasāra, B. C. Law Volume*, Part II, Poona, 1946, pp.11-13.; W. Baruch
[26] : *Le Cinquante-deuxième chapitre du mJaiis-blun (Sūtra du sage et du fou)*, JA, 1955, pp.339-
[27] 366.; M. Hahn: *Das Datum des Haribhātta*, in: K. Bruhn U. A. Wezler hg., *Studium zum Jainis-*
[28] *mus und Buddhismus*, (Alt- und Neuindische Studien 23), Wiesbaden, 1981, S.107-120.; M. Hahn
[29] : *Lehrbuch der klassischen tibetischen Schriftsprache*, 5. verbesserte Auflage, (Indica et Tibetica,
[30] Bd.10), Bonn, 1985. S.131. ff.; 松本文三郎: 敦煌本大雲経と賢愚経, 『藝文』3巻4・5号, 1912年.;
[31] 福井利吉郎: 東大寺本賢愚経の研究, 『藝文』3巻11・12号, 1912年.; 佐田肇苗: 蔵訳賢愚経に対す
[32] るナルタン版目録の記載, 『想苑』4巻4号, 1932年.; 高橋盛孝: 賢愚経探查記, 『日本西藏学会会
[33] 報』第9号, 1962年, 1-2頁.; 高橋盛孝: 賢愚経とザン・ルン, 『東方学』第26輯, 1963年, 1-9頁.;
[34] 玉木弁立: 漢訳『賢愚経』と『Mdsais-blun』の成立について, 『大正大学学院論集』4, 1980年.;
[35] 金岡秀友: 賢愚経の密教, 『仏教の歴史と文化』, 仏教史学会編, 1980年, 51-67頁.; 村上真完: 『西
[36] 域の仏教 一ベゼクリク誓願画考一』, 第三文明社, 1984年。
- [37] 129) Gyōyū Tokiwai (1918): *The Sumāgadhāvadāna, a Buddhist legend, now first edited from the*
[38] *Nepalese MS. in Paris*, Isshinden, 1918.; Yutaka Iwamoto (1959): *The Sumāgadhāvadāna, a*
[39] *Buddhist Legend. Part 1: Revised Sanskrit Text*, Tokyo (『東海大学文学部紀要』第1号)
- [40] 130) Y. Iwamoto (1964): *Die tibetische Version des Sumāgadhāvadāna*, *Acta Asiatica*, 7, S.1-19.
- [41] 131) Sita Ram Roy (1971): *Suvarṇavarṇāvadāna*, (Historical Research Series, Vol.VII), K. P.
[42] Jayaswal Research Institute, Patna.; Tissa Rajapatirana (1974): *Suvarṇavarṇāvadāna, translated*

- [1] and edited together with its Tibetan translation, and the *Lakṣaityasamutpatti*, A thesis submitted
 [2] for the Degree of Doctor of Philosophy in the Australian National University, Canberra.
 [3] 132) T. Watters (1898) : The Eighteen Lohan of Chinese Buddhist Temples, *JRAS*, 1898, pp.329-
 [4] 347.
 [5] 133) S. Lévi • Éd. Chavannes (1916) : Les Seize Arhats protecteurs de la Loi, *JA*, 1916, pp.5-50,
 [6] 189-305.
 [7] 134) 清水亮昇 (1940) : 大阿羅漢難提蜜多羅所說法住記 一附 西藏文法住記和訳、『密教論叢』5号, 5
 [8] 7頁以下。
 [9] 135) M. Hahn (1980a) : Gopadatta's Kapiśvarajātaka, *Journal of the Nepal Research Centre*, Vol.
 [10] 4(Humanities), S.133-159. ; M. Hahn (1985b) : Vorläufige Überlegungen zur Schulzugehörigkeit
 [11] einiger buddhistischer Dichter, in: H. Bechert hg., *Zur Schulzugehörigkeit von Werken der Hī-*
 [12] *nayāna-Literatur*, Erster Teil, Göttingen, S.242.
 [13] 136) Lobsang Dargyay (1978) : *Die Legende von den Sieben Prinzessinnen (Saptakumārikā-avadā-*
 [14] *na)*, (Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde, Heft 2), Wien.

三校

016印 1〜7
末章 末節

□§2. 中央アジアとギルギット出土の Avadāna

□

A. 中央アジア出土の Avadāna

□ ネパール系の写本においては, Divyāvadāna にせよ, Avadānaśataka にせよ, インドから伝えられた avadāna 集は, 根本有部に由来するものが多いが, 中央アジアから出土した写本は, 根本有部よりもむしろ有部に属するものが優勢であり, またたとえほとんどが断片にせよ, ネパール系写本には伝わらなかった作品が多くある点で, 貴重である。

□ 中央アジア出土の写本は, 各国に別々に大規模・小規模なコレクションとして, 保存されている。それらは湯山明によれば, 次のようなものである: (a) Bower 写本, (b) Leningrad コレクション, (c) Pelliot コレクション, (d) ドイツ Turfan 探検隊コレクション, (e) Stein コレクション, (f) Macartney-Hoernle 写本, (g) 大谷コレクション, (h) Hackin コレクション, (i) Trinkler コレクション, (j) Mannerheim コレクション, (k) Huntington コレクション。

□ これらのうち, 最も大規模なコレクションである(d)ドイツ Turfan 探検隊コレクションの断片写本は, *Sanskrithandschriften aus den Turfanfunden*, Vol.I~VI [略号 I~VI] として, 写本の原文の転写と作品の同定の結果が報告されている。この成果から知られた, ドイツ Turfan 探検隊コレクションに属する Avadāna の断片写本を以下に紹介する。

□ ①	Cūḍapanthakāvadāna	V 1349(+1465+1516)
□ ②	Dhūma(Dhūpa)-avadāna	V 1318
□ ③	Kṣemāvadāna	V 1318
□ ④	Valgusvarāvadāna	V 1318
□ ⑤	Supriyāvadāna	III 873
□ ⑥	Supriyāvadāna / Maitrakanyakāvadāna	V 1425(?)
□ ⑦	Mandhātāvadāna	I 558; IV 558; V 1162
□ ⑧	Śroṇakoṭīkarnāvadāna	I 591
□ ⑨	Śroṇakoṭīkarnāvadāna	I 598
□ ⑩	Virūpāvadāna	V 1186
□ ⑪	Sahasodgatāvadāna	V 1330, 1524

梵
語
仏
典
の
研
究

- ⑫ Svāgatāvadāna V 1124
- ⑬ 帝釈が織工に化して大迦葉に施食する話 V 1035
- ⑭ Pretāvadāna [韻文] I 49; IV 49
- ⑮ Vimānāvadāna [韻文] I 49; IV 49
- ⑯ Mrgajātaka V 1376
- ⑰ Haṃsajātaka V 1376
- ⑱ 未同定の Avadāna III 927(?), 982(?); V 1111(?), 1144(?), 1165(?), 1169(?), 1177(?), 1317(?)
- これらを順に説明する。
- ①の V 1349(+1465+1516)の2断片は, Divyāvadāna [Div.] の第35章 Cūḍapanthakāvadāna, [Cowell & Neil 本] pp.485-487, 491-492に一致する。
- ②~④の三つの avadāna は, 同じ写本 (V 1318) の4断片のうち3断片 (a, b, c) にそれぞれ書かれている。a断片は Avadānaśataka [Avs.] 第9章 Dhūpāvadāna, [Speyer 本] I, pp. 47-53に逐字的に一致する。b断片は Avs.に一致箇所を見出せない。だが内容は Avs. 第79章 Kṣemāvadāna にあたる。c断片のおもて面は, Avs. 第30章 Valgusvarāvadāna に部分的に逐字的に一致する。
- ⑤ III 873の1断片は, Div.の第8章の Supriyāvadāna, p.112, l.29seq.に文面が似るが, しかし完全には一致しない。
- ⑥ V 1425の危険な旅をする隊商の話の1断片は, Div. 第7章 Supriyāvadāna あるいは Avs. 第36章 Maitrakanyakāvadāna の話かと思われるが, しかしどちらにもよく一致しない。
- ⑦ IV 558(=I 558)と V 1162の3断片は, Div. 第17章 Mandhātāvadāna, pp.215-222に文面が似るが, しかし別のものである。
- ⑧ I 591の1断片は, Waldschmidt (1952) によって, 有部の十誦律にある Śroṇakoṭīkarṇāvadāna に合うことが確かめられた。
- ⑨ I 598の1断片は, 根本有部律皮革事 (Gilgit MSS. Vol. III, Part. IV, p.175, l.6seq.) および Div. 第1章 Śroṇakoṭīkarṇāvadāna, p.12, l.3seq.に逐字的に一致する。
- ⑩ V 1186の7断片 (5葉) は, Waldschmidt (1981) によって紹介された。これに類した説話を Avs. 第80章 Virūpāvadāna に見ることができるが, しかし別のものである。
- ⑪ V 1330の1断片と V 1524の1断片は, 共に同一の写本の一部と思われるが, それらは Div. 第21章 Sahasodgatāvadāna, pp.309-310に一致する。
- ⑫ V 1124の1断片は, Div. 第13章 Svāgatāvadāna, pp.177-179と文面がほぼ一致する。
- ⑬ V 1035の1断片は, パーリの Udāna の III, 7 (ed. PTS, 1885, pp.29-30)に対応する,

□帝釈天が機織人に化作して Mahākāśyapa に食を施す話であるが, avadāna の一部かどうかは
□疑わしい。

□⑭と⑮の IV 49の Pretāvadāna と Vimānavadāna の断片は, Udāna[varga], Anavataptagā-
□thā, Sthaviragāthā と同じ写本に入っていたもので, avadāna の名をもっているが, パーリ小
□部の Petavatthu (餓鬼事) と Vimānavatthu (天宮事) にあたるものである。この有部の Kṣu-
□drāgama に属するらしい IV 49 (=I 49) の写本については, Bechert (1974) の論考がある。⁴⁾

□⑯と⑰の V 1376の1断片は, 有部の十誦律において, Devadatta が醉象に仏を襲わせて殺そ
□うとした時, 他の比丘は仏を見捨てて逃れたのに対し, Ānanda だけが仏の傍から離れなかった
□ことに対する前世の因縁物語として出された, Mrgajātaaka (鹿本生) の末尾と Hamsajātaaka
□(雁王本生) の初めの部分にあたる, 断片である。十誦律の『大正蔵』23, 263a-264b の箇所,
□鼻奈耶の『大正蔵』24, 872c-873の箇所に対応する。この断片は, Schlingloff (1977) の論文の⁵⁾
□付録において, V. Stache-Rosen によって報告がなされた。

□

B. ギルギット写本の中の Avadāna

□ギルギット写本の中身は, Hinüber (1979) の報告によつて,⁶⁾ ようやく全体の輪郭がつかめる
□ようになった。

□ギルギット写本には1931年6月に出土したものと, 1938年8月に出土したものがある。後
□の, 1938年8月に出土した写本は, 長い間行方不明であったが, 現在 Srinagar の Sir Pratap
□Singh Museum に在る。それらは「Srinagar 蒐集品」と呼ばれる。その内容は Hinüber (1979)
□の論文の付録 II から, 大まかに知りうるだけである。一方, 前の, 1931年6月に出土した写本
□は, その大きな一部が Delhi の National Archives of India に現在収められている。それらは
□「Delhi 蒐集品」と呼ばれる。この「Delhi 蒐集品」は, Nalinaksha Dutt が出版の任にあたり,
□1939年から1959年にかけて4巻9部から成る校訂テキストとして発表された。⁷⁾ また, それらの
□Delhi 写本は写真版として, 1959年から1974年にかけて10冊にわたって, Lokesh Chandra によ
□つて Śata-Piṭaka Series の第10巻として公刊された。⁸⁾

□「Delhi 蒐集品」以外の, 1931年6月に出土した写本の他の大きな一部は, Lahore の Cap-
□tain Agah Mohammad Ali Shah の手に渡った。この「Shah 蒐集品」の大部分は G. Tucci
□により, パキスタン政府に買い取られた。1931年6月に出土した写本は, 以上の「Delhi 蒐集
□品」と「Shah 蒐集品」が大きな部分であるが, その他にも, British Museum の「Stein 蒐集
□品」や, Ujjain の Scindia Oriental Institute の「Ujjain 蒐集品」など, インド国内・国外に

□写本が散らばって存在している。

2 ギルギット写本の主な蒐集の中で、アヴァダーナの作品が入っていることが現在確認されてい

□るのは、「Delhi 蒐集品」だけである。Hinüber (1979) の論文ならびにその追記 (1980) (1981)

□によって報告された「Delhi 蒐集品」の写本の内訳を見ると、すでに数多くの根本有部系アヴァ

□ダーナが同定されている。「Delhi 蒐集品」に含まれている作品は、62の写本番号 (No.) の許に

□整理されているが、その中から、アヴァダーナの作品であるものを、以下に抜き出してみよう

□ (作品名の隣の数字は Lokesh Chandra の写真版の右端の頁番号を示す) :

□ No. 8: Viśvantarāvadāna 154-174(=1332-1349) ; 3314/15

□ No. 9: Avadāna 集 1350-1379

□ 内容: Nagarāvalambikāvadāna(1370, 1371), Menḍakāvadāna(1368, 1369), Svāgatāvadāna

□ (1366, 1367, 1378, 1379), Māndhātāvadāna(1374), Dharmarucyavadāna(1374. 11f., 137

□ 5, 1350-1353, 1377, 1376, 1354-1358.8), Sahasodgatāvadāna(1358. 8-1361, 1372, 1373),

□ Candraprabhāvadāna(1362, 1363), Padmāvatyavadāna(1364, 1365)。

□ No.10: c) Sumāgadhāvadāna 1414-1425, 1285, 1284

□ No.10: d) Sucandrāvadāna 1426-1431

□ No.13: a) Avadāna 集 1432-1517

□ 内容: Māndhātāvadāna (1432-1451), Dharmarucyavadāna (1452-1483), Jyotiṣkāvadāna

□ (1484/85), Sahasodgatāvadāna(1486-1487. 4), Candraprabhāvadāna(1487. 4-1507), Pām-

□ śupradānāvadāna(1508-1517)。

□ No.13: d) Avadāna 集 1543-1587

□ 内容: Devatāsūtra(1542. 5-1545. 3), Svalpadevatāsūtra(1545. 3-1545. 8)。1546-1549 は不

□ 明。Mahāsudarśanāvadāna(1550-1567. 8)。1568: Puṇyamaheśāvadāna の始まり。Adbhu-

□ tadharmaparyāya(1576. 1-1581. 4), Prasajidgāthā(1581. 4-1585. 1)。

□ No.51: 雑多の断片集 3261-3301

□ 中にアヴァダーナの写本が混じっている: Sumāgadhāvadāna(3268, 3270-3275, 3277, 3278)。

□ No.52: 雑多の断片集 3302-3325

□ 中にアヴァダーナの写本が混じっている: Sumāgadhāvadāna(3303-3305, 3310), Viśvanta-

□ rāvadāna(3314/15)。

□ No.60: 雑多の断片集 3352-3359

□ 中にアヴァダーナの写本が混じっている: Sumāgadhāvadāna(3358, 3359)。

31 現在までになされた、ギルギット写本の大きな蒐集の中に含まれるアヴァダーナ作品について

□研究は、以上の「Delhi 蒐集品」に属するものだけに限られている。他の蒐集に属するギルギッ

□ト写本は、写真版が出ていないため、アヴァダーナ作品が含まれているかどうかかわからない。

□「Delhi 蒐集品」ですら、いまだ未解明の写本がかなり残されているのである。現在までの諸学

□者による「Delhi 蒐集品」のアヴァダーナ作品の研究は次のようなものである。

□ まず、No.8: Viśvantarāvadāna についての研究は、Kabita Das Gupta (1978) がベルリン自

□由大学に提出した博士論文がある。K. Das Gupta はこの論文で、Śata-Piṭaka 写真版 157-174

□ (Part 2) と 1332-1349 (Part 7) および 3314-3315 (Part 10) に基づいた梵文テキストとその英

□訳、ならびに並行ヴァージョンである Saṅghabhedavastu 中の一致部分のチベット訳テキスト

□を挙げている。この論文の後に Gnoli (1977-78) によって出版された梵本の Saṅghabhedavastu

□の第2巻 pp.119-133からも、Viśvantarāvadāna のほとんど同じ梵文テキストが得られる。

□ また、この Viśvantarāvadāna のギルギット写本は、松村恒 (1980) の、オーストラリア国立

□大学に提出した博士論文『ギルギット写本からの四つのアヴァダーナ』においても、他の三つの

□アヴァダーナ、すなわち Māndhātāvadāna, Mahāsudarśanāvadāna, Candraprabhāvadāna と

□ともに、詳細に研究された。

□ 次に、No.9: Avadāna 集は八つのアヴァダーナが入っているが、Padmāvatyavadāna 以外の

□七つの作品は、Divyāvadāna [Div.] と関係している。ただ A. Mette (1985) によれば、Candra-

□prabhāvadāna は Div. と文面が相違する箇所があるという。それを除いた、残りの六つの作品

□は、大体 Div. に対応している。

□ NagarāvalambikāvadānaDiv. 7 章

□ MeṇḍakāvadānaDiv. 10 章

□ SvāgatāvadānaDiv. 13 章

□ MāndhātāvadānaDiv. 17 章

□ DharmarucyavadānaDiv. 18 章

□ SahasodgatāvadānaDiv. 21 章

□ CandraprabhāvadānaDiv. 22 章

□ Padmāvatyavadāna の断片は、A. Mette (1985) によって写本のトランスクリプションが発表

□され、内容が検討された。

□ 次に、No.10: c) Sumāgadhāvadāna と d) Sucandrāvadāna は、Hinüber の追記 (1981) に

□よれば、U. Groth が修士論文として研究を提出したらしい。

□ 次に、No.13: a) Avadāna 集の中には、六つのアヴァダーナが入っているが、Lokesh Chan-

□dra の指摘によれば、どれも Divyāvadāna と関係する作品である。六つの作品は次の様に

□Div. の章と対応している。

□1	Māndhātāvadāna	……Div.17章
□2	Dharmarucyavadāna	……Div.18章
□3	Jyotiṣkāvadāna	……Div.19章
□4	Sahasodgatāvadāna	……Div.21章
□5	Candraprabhāvadāna	……Div.22章
□6	Pāṃśupradānāvadāna	……Div.26章

□7 これらの六つの作品のうちで、欠損のない完本は Candraprabhāvadāna だけである。J.-U. Hartmann (1980)¹³⁾ はこの Candraprabhāvadāna のギルギット写本を研究して、この作品が Div. 22章とチベット訳 Candraprabhāvadāna (Toh 348, Ota 1017) および漢訳『佛說月光菩薩經』(大正 166) と、系統的に同一であることを指摘した。そして Hartmann はこのギルギット本□11によって、Cowell・Neil 本 Div.テキストの、多くの困難な読みが修正できることを示した。A. Mette (1985) は Candraprabhāvadāna の1362, 1363の写本のトランスクリプションを、論文の□13付録に載せた。また Candraprabhāvadāna は、松村恒 (1980) によって博士論文で扱われた作品□14品の一つである。松村は近くその研究を Māndhātāvadāna や Viśvantarāvadāna の研究とともに□15に改訂して公刊する予定であるという。

□16 上の六つの作品が入っていた写本は、アヴァダーナのある一つの作品集を形成していたことは□17確からしいものの、個々の作品の相互の順序は、写本の葉数番号が見えないために、明らかでは□18ない。Lokesh Chandra は写真版を出すにあたって、一応 Div.テキストの順序に従って写本を□19並べたのである。しかし写本の Māndhātāvadāna (1432-1451) の最後の頁番号1451は、Mahāsudarśanāvadāna (1550-1567) の最初の頁番号1550に直接連続していることが、松村恒 (1988)¹⁴⁾ によって確かめられている。従って、写本の本来の姿は1451から1550に続いているのであり、作品□20の順序は Māndhātāvadāna から Mahāsudarśanāvadāna に続いているわけである。

□21 No.13: d) Avadāna 集に収められた Mahāsudarśanāvadāna のギルギット写本のテキスト□22は、松村恒 (1980) の博士論文の中の1章に扱われたが、その後松村恒 (1988) はインドから、□23Mahāsudarśanāvadāna の研究だけを独立させて、出版した。松村は、左ページにギルギット本□24Mahāsudarśanāvadāna, 右ページに中央アジア本 Mahāsudarśanasūtra のテキストを配置し□25て、二つのヴァージョンの綿密な照合を可能にした。この中央アジア本 Mahāsudarśanasūtra □26は、Waldschmidt (1950-51) が校訂した¹⁵⁾ Mahāparinirvāṇasūtra のテキスト中に、1挿話として□27含まれているものである。また、Mahāsudarśanāvadāna は、Divyāvadāna の中には含まれて□28いないが、根本有部律の Kṣudrakavastu と Baiṣajyavastu において、同じテキストを見出すと□29とができる。

□30 以上が「Delhi 蒐集品」のアヴァダーナ作品であるが、実質的に Divyāvadāna と一致する説

1話を含んでいる膨大な根本有部律の写本については、ここでは取り上げなかった。しかしひとつ
□3だけ例外として、Divyāvadāna と一致する根本有部律の断片の研究を紹介するならば、Sir
□3Aurel Stein が入手して British Museum に送られ、Or.11878A として記録された11葉の根本
□3有部律の写本は、S. Lévi (1932) によってその4葉半の部分のテキストと仏訳が発表されていた¹⁶⁾
□3が、近年、11葉全部のテキストが V. Nāther (1975) によって校訂され独訳された。¹⁷⁾ その写本の
□3大半は Divyāvadāna の第25章 Saṃgharakṣitāvadāna と第24章 Nāgakumārāvadāna にあたる
□3部分である。

- [1] 1) 湯山明先生が1988年の東北大学での連続講義で配布された資料に基づく。
- [2] 2) E. Waldschmidt (1952) : Zur Śrōṇakotīkārṇa-Legende, NAWG, 1952, S.129-151. [再録 : Von Ceylon bis Turfan, 1967, S.203-225.]
- [3] 3) E. Waldschmidt (1981) : Bemerkungen zu einer zentralasiatischen Sanskrit-Version des Virūpā-
[4] Avadāna, Studien zum Jainismus und Buddhismus, Gedenkschrift für Ludwig Alsdorf, (Alt- und
[5] Neuindische Studien, Nr.23), Wiesbaden, S.341-358.
- [6] 4) Heinz Bechert (1974) : On a Fragment of Vimānāvadāna, a Canonical Buddhist Sanskrit
[7] Work, in: Buddhist Studies in Honour of I. B. Horner, Dordrecht. pp.19-25. また次の論文も参照
[8] のこと : H. Bechert (1982) : A Collection of "Minor Texts" from the Buddhist Sanskrit Canon,
[9] Prof. Jagannath Agrawal Felicitation Volume: Recent Studies in Sanskrit and Indology, Patiala.
[10] pp.89-94.
- [11] 5) D. Schlingloff (1977) : Zwei Anatiden-Geschichten im alten Indien, ZDMG, 127, S.381-385.
- [12] 6) Oskar von Hinüber (1979) : Die Erforschung der Gilgit-Handschriften, NAWG, Philologisch-
[13] historische Klasse, Jahrgang 1979, Nr.12, S.327-359. [Nachtrag: ZDMG, Bd.130, Heft 2(1980),
[14] S.*25*-*26* ; Neue Ergebnisse: ZDMG, Bd.131, Heft 2(1981), S.*9*-*11*.]
- [15] 7) N. Dutt ed. : Gilgit Manuscripts, Vol.1-4, Calcutta, Srinagar, 1939-1959.
- [16] 8) Raghu Vira & Lokesh Chandra ed.: Gilgit Buddhist Manuscripts (Facsimile Edition), 10
[17] parts, (Śatapiṭaka Series, X, 1-10), New Delhi, 1959-1974.
- [18] 9) Kabita Das Gupta (1978) : Viśvāntarāvadāna, eine buddhistische Legende. Edition eines Textes
[19] auf Sanskrit und Tibetisch eingeleitet und übersetzt, Inauguraldissertation, Berlin.
- [20] 10) R. Gnoli (1977-78) : The Gilgit Manuscript of the Saṅghabhedavastu. Being the 17th and Last
[21] Section of the Vinaya of the Mūlasarvāstivādin, (Serie Orientale Roma, XLIX, 1-2), 2 vols.,
[22] Roma.
- [23] 11) Hisashi Matsumura (1980) : Four Avadānas from the Gilgit Manuscripts, dissertation (Aus-
[24] tralian National Univ.), Canberra.
- [25] 12) Adelheid Mette (1985) : Ein Gilgit-Fragment des Padmāvati-avadāna, Zur Schulzugehörigkeit
[26] von Werken der Hīnayāna-Literatur, Erster Teil. S.225-238.
- [27] 13) Jens-Uwe Hartmann (1980) : Notes on the Gilgit Manuscript of the Candraprabhāvadāna,
[28] Journal of Nepal Research Centre, Vol. 4, pp.251-266.
- [29] 14) Hisashi Matsumura (1988) : The Mahāsudārśanāvadāna and the Mahāsudārśanasūtra, (Biblio-
[30] theca Indo-Buddhica, No.47), New Delhi.
- [31] 15) E. Waldschmidt (1950-51) : Das Mahāparinirvāṇasūtra, T. I-III, Berlin.
- [32] 16) Sylvain Lévi (1932) : Notes sur des manuscrits sanskrits provenant de Bamiyan (Afghani-
[33] stan) et de Gilgit (Cachemire), JA, 1932, pp.1-45.
- [34] 17) V. Näther (1975) : Das Gilgit-Fragment or.11878A im britischen Museum zu London. Heraus-
[35] gegeben, mit dem Tibetischen verglichen und übersetzt, Inaugural-dissertation, Marburg.

四校

017印 1~41
第5章 第3節

□§3. 中世の Avadāna 集成

□ A. Kṣemendra の Bodhisattvāvadānakalpalatā

□ Bodhisattvāvadānakalpalatā 諸菩薩のアヴァダーナの祈願成就の蔓草

□ 中世の Avadāna 集成は11世紀の Avadānakalpalatā [A.-Kalp.] から始まる。文学史の観点
□ から見ると、A.-Kalp. は文学作品としてはあまり価値はないが、後代に与えた影響は過少評価
□ されるべきではない、と M. Hahn (1985) は指摘している。A.-Kalp. は Anuṣṭubh や Upajāti
□ の単純な韻律を用いて、全編を韻文で綴る、叙事詩的な形式を初めて採用することによって、中
□ 世の大規模な avadānamālā 文献の先駆けとなった。A.-Kalp. はインドの仏教説話文学の最後の
□ 地点に立つ作品であるとともに、ネパールを中心とする中世の説話文学への出発点に立つ作品で
□ ある。A.-Kalp. はまたチベットで過大の評価を得、チベットの文化に与えた影響は多大なものが
□ ある。

□ Hodgson がネパールで蒐集し、バリとカルカッタに送った梵語仏教写本には、それぞれ1本
□ の A.-Kalp. の写本が含まれていた。バリに送られた写本に基づいて、Burnouf (1944) は初めて
□ A.-Kalp. について言及し(p.555 1st ed.; p.495 2nd ed.); またカルカッタに送った写本に基づ
□ いて R. Mitra (1882) は、『ネパールの梵語仏教文献』の中で、初めて A.-Kalp. の写本の梗概を
□ 紹介した。だが、これら2本の Hodgson 写本は共通して、前半部1~50章(Somendra の章名目
□ 録に従い、49章に訂正)が欠けており、Mitra による各章の内容梗概は第51(50章に訂正)~108章の
□ 部分だけに限られた。

□ Hodgson に由来する A.-Kalp. の写本にはこのように前半部が欠けていたが、また D.
□ Wright が蒐集した2本の A.-Kalp. のネパール写本も、第41章(de Jong に従い、42章に訂正)よ
□ り前の部分が欠けていた。Wright が蒐集した写本の1本は A.D. 1302年の筆写である。どうや
□ らネパールにおいては早い時期から A.-Kalp. は前半が失われてしまっていたらしく思われる。
□ だが幸いにも、A.-Kalp. はチベット人に大変好まれた作品であったためか、完全な梵本がチベッ
□ トのラサにおいて伝えられていた。

□ Sarat Chandra Das は1882年にラサのポタラ宮の印刷場において、A.-Kalp. の木版刷りを入

□手した。この木版刷りは620葉から成り、チベット文字による梵文テキストと、チベット訳とが
 □並記されたものであった。この版本が彫られた日付は、Das によれば西暦1662-1663年となる。

□ (この西暦への換算は、de Jong (1979) によって1664-1665年と修正された。) この木版刷り本に
 □おいては、(1)シャル寺の古い木版刷り本、(2)ツォンカバ自身による写し、(3)Taḥi situ Byaṅ-
 □chub rgyal-mtshan 王所有の Gdan-sa-mthil 諸写本、(4)Rin-chen buñ-ba の諸写本の、以上4
 □資料が主に校合されたという。特にこの版のベースになった(1)の、Chos-skyon mzan-po (シャ
 □ル寺の翻訳官) が作った古い木版刷り本は、やはり梵文テキストと、チベット訳とが並記された
 □ものであったらしい。

□ さて、Das はこのチベットで入手した木版刷り本に基づき、H. M. Vidyābhūṣaṇa と協力し
 □て、1888年から1913年にかけて分冊で、A.-Kalp.の梵文とチベット訳を左右のページに配した校
 □訂テキストを、ベンガル・アジア協会の Bibliotheca Indica 叢書より出版した。⁴⁾

□ この Das・Vidyābhūṣaṇa 刊本の第10章~48章は、チベット訳(木版刷り本)の A.-Kalp.の
 □第11章~49章にあたる。Das によれば、チベット訳の第10章は Mñal-las ḥbyuñ-ba (Garbhot-
 □patti) という名になっているが、対応する梵本は存在しない。どうやらこの第10章はチベット
 □で付加されたものらしい。なぜなら Somendra が付けた A.-Kalp.の章名目録には、このような
 □名の章は入っていないからである。チベット訳にはこのような余計な1章がある代わりに、
 □Cambridge 写本には存在している第49章 Śaḍdantāvadāna を欠いている。Somendra が付けた
 □A.-Kalp.の章名目録には、この章が入っているから、本来はあった章であると思われる。Das
 □の木版刷り本には、Śaḍdantāvadāna の梵本は欠けている。つまりチベットの伝承においては、
 □第49章 Śaḍdantāvadāna を失った代わりに、第10章の場所に余計な Mñal-las ḥbyuñ-ba という
 □章を割り込ませているらしい。そこで Das は、本来の形に戻すため、第10章 Mñal-las ḥbyuñ-
 □ba を捨てて、順に章の番号を一つずつ繰り上げて、チベット訳の第11章~49章を、刊本では第
 □10章~48章に位置せしめた。

□ Vaidya (1959)⁵⁾ はこの Das・Vidyābhūṣaṇa 刊本の、チベット訳を除いた梵本の部分だけを、
 □「仏教梵語テキスト」シリーズの22・23巻として、インドから発行した。

□ 岩本裕 (1968)⁶⁾ は Sumāgadhāvadāna の研究において、A.-Kalp.の第93章 Sumāgadhāvadāna
 □を和訳し、同章のテキストを Bendall Add. 913, 1306の2写本によって校訂し、付録としてあげ
 □た。この第93章は、最近 M. Hahn の弟子 Markus Görtz (1993)⁷⁾ によってあらためて蔵・梵テ
 □キストが校訂され、独訳された。

□ Kabita Das Gupta (1978)⁸⁾ は、ギルギット写本の Viśvantarāvadāna を研究した博士論文の
 □付録 I において、A.-Kalp.の第23章 Viśvantarāvadāna のテキストならびに英訳をあげた。

□ さて、チベット訳がなされる時にすでに失われていた第49章 Śaḍdantāvadāna が、不思議に

- も Cambridge 写本 2 本 (Bendall Add. 913, 1306) には存在する。この Cambridge 写本は de Jong⁹⁾によって、初めて研究がなされた。
- 第49章 Śaḍdantāvadāna の梵本は、チベット訳と Das の木版刷り本ならびに Hodgson 写本⁹⁾には無いのに、Cambridge の 2 写本にはある。これは奇妙なことである。de Jong (1977) は Cambridge Add. 1306 の写本を吟味して、第49章 Śaḍdantāvadāna の部分の葉は、後から付加されたものであり、それは写経生が A.-Kalp. の欠けた第49章を補おうとして、別のアヴァダーナ集から Śaḍdantāvadāna を借りてきて挿入したと結論づけた。その別のアヴァダーナ集とは、Kalpadrumāvadānamālā である。de Jong は A.-Kalp. の Cambridge Add. 1306 写本の第49章 Śaḍdantāvadāna は、Kalpadrumāvadānamālā の同名の章から 5, 59-123, 144-161, 166-184, 190, 193-198 偈を取って作られたことを確認している。
- ¹⁰⁾ de Jong (1979a) はこの Kalpadrumāvadānamālā の第25章 Śaḍdantāvadāna の校訂テキストを発表した。用いた写本は A.-Kalp. の 2 本の Cambridge 写本 (Bendall Add. 913, 1306) および、Kalpadrumāvadānamālā の Paris 写本 (Filliozat 26-27) と Cambridge 写本 (Bendall Add. 1590) である。
- ¹¹⁾ つづいて de Jong (1979b) は 2 本の Cambridge 写本を用いて、原典批判を Das 本に対して行った。特に Cambridge 写本 Add. 1306 は西暦1302年の筆写の貝葉であり、作品の完成年 (A.D. 1051-1052) から250年しか経っていない古さである。もう 1 本の新しい写本 Add. 913 は、Add. 1306 を訂正するのに用いられた古写本の、幾世代か後のコピーらしく、別系統のやや異なる読みを受け継いでいる。どちらの Cambridge 写本にも第42章 Paṇḍitāvadāna より前の部分¹²⁾は無く、このため、de Jong の原典批判は、第42章第 7 偈～108章に限定されて行われた。
- ¹³⁾ de Jong は原典批判において、Das・Vidyābhūṣaṇa 刊本のように第11章～49章を、第10章～48章に改めた章の繰り上げに従わず、チベット訳ならびに Cambridge 写本の章番号の記述に従った。また de Jong は、第42章の名称が Das・Vidyābhūṣaṇa 刊本では Kapilāvadāna になっているのを、Paṇḍitāvadāna に訂正した。
- ¹⁴⁾ M. Williams (1981) はこの de Jong の研究に対する JRAS の書評において、特に A.-Kalp. の52章を例にとり、de Jong の用いなかったチョーネ版の梵文＝チベット訳対照テキストを利用して、de Jong による原典訂正を確かめた。
- ¹⁵⁾ 最近 Marek Mejer (1992) は第75章 Pratītyasamutpādāvadāna の蔵・梵テキストを校訂し、英訳した。
- 以上が A.-Kalp. の校訂・原典批判研究である。この他、Vidhushekhara Bhattacharya (1939) が古典チベット語学習書 Bhoṭaparakāśa の中に載せた、A.-Kalp. 第60章 Nāgakumārāvadāna の梵文・チベット訳対照テキストもあるが、Das・Vidyābhūṣaṇa 刊本をそのまま用いたと思わ

られる。

次に A.-Kalp.の翻訳を見る。S. Ch. Das が主宰した The Journal of Buddhist Text Society of India¹⁵⁾ では、大勢が訳を分担して、短時間に集中的に A.-Kalp.の多くの章を英訳した。しばしば雑誌には梵文テキストも付けられたが、ここではテキストは割愛して、英訳のみを対象として、A.-Kalp.の訳された章と、訳者・掲載巻を示すならば、次のとおりである：

- 3章 MañicūḍāvadānaB. N. De (Vol. I, Pt. 3, 1893)
- 4章 MāndhātṛāvadānaH. P. Śāstrī (Vol. II, Pt. 3, 1894)
- 6章 BadaradvīpayātrāvadānaS. Ch. Banerji (Vol. III, Pt. 1, 1895)
- 7章 MukṭālatāvadānaR. Ch. Dutt (Vol. I, Pt. 1, 1893)
- 8章 ŚrīguptāvadānaN. Ch. Das (Vol. III, Pt. 2, 1895)
- 9章 JyotiṣkāvadānaN. Ch. Das (Vol. II, Pt. 2, 3, 1894)
- 10章 SundarīnandāvadānaS. Ch. Vidyabhusan (Vol. IV, Pt. 3, 1896)
- 11章 VirūḍakāvadānaL. N. Sinha (Vol. IV, Pt. 1, 1896)
- 12章 HārītikāḍamanāvadānaS. Ch. Vidyabhusan (Vol. V, Pt. 1, 1897)
- 13章 PrātihāryāvadānaBhūṣaṇa Candra Dās (Vol. V, Pt. 3, 1897)
- 26章 ŚākyotpattiV. Ch. Rai (Vol. I, Pt. 4, 1894)
- 50章 DaśakarmaplutyāvadānaA. P. Saraswatī (Vol. I, Pt. 4, 1893)
- 51章 RukmavatyāvadānaN. Ch. Das (Vol. I, Pt. 4, 1893)
- 52章 AdīnapuṇyāvadānaN. Ch. Das (Vol. VII, Pt. 4, 1906)
- 56章 GopālanāgadamanāvadānaM. L. Das (Vol. II, Pt. 1, 1894)
- 57章 StūpāvadānaA. P. Saraswatī (Vol. II, Pt. 1, 1894)
- (別訳) S. Ch. Das (Vol. VII, Pt. 3, 1904)
- 63章 MahākāśyapāvadānaS. Ch. Vidyabhusan (Vol. VI, Pt. 1, 2, 1898)
- 64章 SudhanakinnaryāvadānaJ. Bhattacharya (Vol. VI, Pt. 4, 1898)
- 65章 EkaśṛṅgāvadānaN. Ch. Das (Vol. I, Pt. 2, 1893)
- (以上は東北大学図書館が有する JBTSI, vol. 1 (1893) - 7 (1906) までの巻に含まれている翻訳であり、それ以降の巻については不明である。)

Nobin Chandra Das (1895)¹⁶⁾ は『仏陀、シャカ族の獅子の伝説と奇跡』という A.-Kalp.の翻訳書を出したが、第65・51・9・8章の英訳であり、上の雑誌に載せたものの再録である。

A. H. Francke (1901)¹⁷⁾ は A.-Kalp.第65章を独訳した『エーカシュリンガ、一角王子』という小冊子をライブツィヒから出版した。

- ¹⁸⁾ A.-Kalp.の全部の章の梗概を知るためには、Tucci (1949) の『チベットの絵巻物』でなされた
 □解説が、便利である。Tucci は A.-Kalp.を描いた31枚のタンカ (nn. 64-94) を説明するために、
 □A.-Kalp.の108の話の梗概を紹介しており、註記には類似の並行話を指摘している。
 □このほかチベットで A.-Kalp.のチベット訳を散文で要約した Mthoñ ba don ldan という書
 □が作られており、入手した S. Ch. Das (1965) により¹⁹⁾ニュー・デリーから出版された。
 □A.-Kalp.の特定の章の研究としては、Zinkgräf (1940) が²⁰⁾A.-Kalp.第87章 Padmakāvadāna を
 □Aśokāvadānamālā 第26章 Padmakāvadāna と比較して、両者の逐字的な一致を指摘した。Zink-
 □gräf は Kṣemendra が A.-Kalp.の同章を作るにあたって Aśokāvadānamālā から借用したと推
 □定した。

- Skt.MSS.: Filliozat 8; Bendall Add.913, 1306[palm-leaf]; SBLN p.57; ASB pp.251, 252;
 □Nagao p.10; Takaoka CA15[359 fols.]; NGMPP-Card B95/5(=ca1365)[170 fols.], B
 □99/9(=pa7653)[16 fols.], H192/13[Chs.7, 8]
 □MS. of Part :
 □Śrīsenāvadāna [Ch.2]: NGMPP-Card E1363/5[10 fols.]
 □Tib.: Toh 4155, 7034, Ota 5655, N(T) 3646
 □Dge-baḥi dbaḥ-po (Kṣemendra) 造; Lakṣmīkara, Śoñ-ston 訳; Chos-skyoñ bzañ-po 校訂
 □[台北版のデルゲ版を見る限りでは、Toh 4155 も、Toh 7034 同様に Bilingual Sanskrit-
 □Tibetan text である]
 □題名 Rtogs-brjod rin-po-che dpag-bsam ḥkhri-ṣiñ skad-gñis śan-sbyar-ba.

B. Avadānamālā 類

□ 1. Aśokāvadānamālā

- Aśokāvadānamālā [Aś.-m.] は全27章から成る韻文の Avadānamālā で、その初めの六つの
 □章が、Aśokāvadāna (Divyāvadāna の第26~29章を成す) からの詩形改稿本となっている。
 □Aś.-m.の全部の章名は²¹⁾Bendall Add.1482, Śāstrī 25, Matsunami p.213, BSP 1-35, 岩本 (19
 □2567) でそれぞれ報告され、各章の梗概は Bendall Add.1482と R. Mitra の SBLN に報告されて
 □いる。
 □Bongard-Levin・Volkova (1963) は²²⁾第5章 Kuṇḍālāvadāna のテキストを Divyāvadāna のも

□のと対照させつつロシア語訳を添えて出版した。用いられた写本は Leningrad のアジア民族研究
 □研究所にある Aś.-m. の 1 完本 (332 葉) である。この出版については, de Jong (1965) の重要な書
 □評がある。²³⁾ Bongard-Levin・Volkova (1963-1965) は Kuṇālāvadāna のテキストをインドの雑誌
 □にあらためて掲載し, 英語で序論を付した。

□ また第26章 Padmakāvadāna のテキストは Zinkgräf (1940) S.91-104によって²⁶⁾発表された。
 □校訂に用いられた Aś.-m. 写本は Bendall Add.1482 だけである。

□ また第24章 Bhavaśarmāvadāna のテキストは岩本 (1967) によって²⁶⁾発表された。校訂に用い
 □られた写本は, SBLN p.6 の Aś.-m. の写本と, Goshima・Noguchi 101 の Vratāvadānamālā
 □の写本である。

□ さらに第12章 Bhavalubdhakāvadāna のテキストは, Handurukande (1984) によって²⁷⁾校訂
 □された。校訂には計5本の Aś.-m. の写本 (Matsunami 35, 37, Bendall Add.1482, Śāstrī 25,
 □SBLN p.6), ならびに Avadānasārasamuccaya の 1 写本 (Bendall Add.1598) を用いた。こ
 □の Aś.-m. 第12章は Gopadatta の Jātakamālā 中の Bhavalubdhakāvadāna を詩形改稿したも
 □ので, 元本の Jātakamālā の詩節をかなり借用している。この元本を校訂するため Aś.-m. の写
 □本を用いたため, 付録(Appendix IV)として, Aś.-m. の第12章も校訂されたのである。

□ Aś.-m. の翻訳としては, 奈良康明 (1988) が²⁸⁾岩本 (1967) のテキストを底本にして, 第24章
 □Bhavaśarmāvadāna を和訳している。

□ 研究としては, 岩本 (1967) 『序説』, 第4章第3節が Aś.-m. にあてられている。

□ Aś.-m. と他の文献との関係についての知識を, ひとつおりとめてみる。

□ (1) Aś.-m. の第14章から第21章までは, Feer (1891) によれば, Avś. の10ごとの章を韻文に改稿
 □したものであり, 両者の章は次のように対応する:

□ Aś.-m. : 14 15 16 17 18 19 20 21

□ Avś. : 10 20 30 50 60 70 80 90

□ (2) Aś.-m. の第9章 Bodhicaryāvatārānuśāṃsāvadāna は, 岩本 (1967) 『序説』 p.185 によれ
 □ば, Śāntideva の Bodhicaryāvatāra (入菩提行論) をそのまま借用している。

□ (3) Aś.-m. の中の六つの章は, 岩本 (1967) 『序説』 p.186 によれば, A.-Kalp. ならびに Vratā-
 □vadānamālā [Vr.-m.] に含まれている章と共通する。すなわち, Aś.-m. 12章 = Vr.-m. 12章。Aś.-
 □m. 13章 = Vr.-m. 9章。Aś.-m. 22章 = A.-Kalp. 78章。Aś.-m. 24章 = Vr.-m. 11章。Aś.-m. 25章 =
 □A.-Kalp. 84章。Aś.-m. 26章 = A.-Kalp. 87章。

□ (4) Aś.-m. の第5章 Kuṇālāvadāna は, Bongard-Levin・Volkova (1963), (1963-1965) によ
 □れば, A.-Kalp. 第59章と Div. 第27章からおびただしく詩節を借用して作られた。

□ (5) Aś.-m. の第12章 Bhavalubdhakāvadāna は, Handurukande (1984) によれば, Gopadatta

- の Jātakamālā 中の, Bhavalubdhakāvadāna を改稿したものである。
- (6) Aś.-m. の第26章 Padmakāvadāna は, Zinkgräf (1940) によれば, A.-Kalp. 第87章 Padmakāvadāna と多くの詩節で一致している。Zinkgräf は Kṣemendra が A.-Kalp. の同章を作るにあたって, Aśokāvadānamālā から借用したと推定した。
- 最近, Michael Hahn (1992)³⁰⁾ は, Gopadatta の Saptakumārikāvadāna の校訂テキストを発表したが, その作品の90%は, Aś.-m. の第11章 Saptakumārikāvadāna の中に含まれている。
- Aś.-m. の第11章は300余の偈から成るが, そのうちの123偈が, Gopadatta の Saptakumārikāvadāna (全部で130偈から成る) からの逐字的な借用である。

- Skt.MSS.: Bendall Add.1482[27 chs.]; SBLN p.6; Matsunami 35[27 chs.], 36[the 22nd~the 25th Chs.], 37[27 chs.]; Bir 24; BSP tr300(1-35)=Durbar p.174=NGMPP B94/7
- [27 chs.]: BSP tr599(1-36)=NGMPP-Card A859/3=A844/10=A117/12; ASB p.244;
- Śāstrī 25(No.10755) [26 chs.]; Takaoka KA46[429 fols.], A70[339 fols.], DH382[228 fols.]; NGMPP-Card A117/11(=tr654), D45/15, E665/3, E595/3-596/1, H143/9-144/1
- SA 6 [S. d'Oldenburg に貸出されたまま行方不明]³¹⁾

□ MSS. of Parts:

- Upaguptāśokāvadāna [Ch.1]: IASWR MBB-II-90 (未同定)
- Upaguptāvadāna [Ch.2]: IASWR MBB-II-91 (未同定)
- Aśokadamanāvadāna [Ch.3]: Matsunami 34; IASWR MBB-II-92; BSP tr654(1-34)
- Kuṇālāvadāna [Ch.5]: Durbar p.242=NGMPP A119/5=BSP tr653(1-157); Bir 24(b); NGMPP-Card A119/6(=pa242)
- Vītāśokāvadāna [Ch.6]: Durbar p.242=NGMPP A875/3=B100/18=BSP tr658(3-89); IASWR MBB-II-93; Bir 24(c)
- Triratnabhajanānuśamsāvadāna [Ch.7]: IASWR MBB-II-94
- Caityavratānuśamsāvadāna [Ch.8]: Matsunami 130-132; Takaoka DH 274; IASWR MBB-II-95; Durbar p.243=NGMPP A121/5=BSP tr665(1-250); Bir 24(d); NGMPP-Card D20/18, E1139/4, E1476/7-1477/1
- Bodhicaryāvatārānuśamsāvadāna [Ch.9]: Durbar p.241=NGMPP B98/9=BSP tr663(2-112)=Bir 24(e); NGMPP-Card E1838/4
- Ahorātravratācaityasevānuśamsāvadāna [Ch.10]: Matsunami 55; Takaoka KA15-1; Dogra 79; ASB p.255; NGMPP-Card E699/19, E1486/8
- Saptakumārikāvadāna [Ch.11]:³²⁾ SBLN p.221; ASB p.255; Bir 24(f); NGMPP-Card A

- 919/17(=tr653)
- Śakracyavanāvadāna [Ch.22]: Takaoka KA44F; NGMPP-Card E651/7, E1367/3
- Pariśodhanadhāraṇīmaṇḍalaparivartādhyānta [Ch.27]: Bir 24(g)
- Aśokāvadāna [Newārī]: NGMPP-Card H43/8, E462/12

□ 2. Bhadrakalpāvadāna

□ Bhadrakalpāvadāna [Bh.-k.] は, Bendall Add.1411の解説によれば, 仏伝の初転法輪までを描いた Lalitavistara の続編たらんとして, 仏伝のその後を描くことを意図して作られた韻文作品品であるらしい。また仏伝としての Mahāvagga とある程度類似性をもつ点に Bendall は注意している。

□ Bh.-k.は全39章から成る。しかし写本では38章の番号づけになっていることが多い。個々の章名は Matsunami p.219, Bendall Add.1411 および BSP のカタログに記されている。

□ テキストの出版としては, Handurukande (1988) の, Bh.-k. 第32章 Supriyasārthavāhajātaka³³⁾ の校訂本の出版がある。その校訂は7本の写本に基づいてなされた。すなわち, Goshima・No-guchi 75と127, Matsunami 266と267と479との, 計5本の Bh.-k.写本と, ほかに Matsunami 171の Divyāvadāna 写本の第8章にあたる場所に挿入されている(本来 Bh.-k. 第32章であった)写本と, Matsunami 429の Saṃbhadravādānamālā 第40章 Bhagavat-supriyāsārthavāhajānmāvadāna-parivarta の写本である。これら7本の写本は共通の archetype に遡るといえる。また内容³⁴⁾は Divyāvadāna 第8章 Supriyāvadāna の詩形改稿 (metrical adaptation) となっている。

□ その他の部分のテキストは公刊されていないが, しかし第33[34]章 Matṛpoṣahastin の部分³⁴⁾を M. Hahn が, また全章のテキストを T. R. Chopra が, 準備しているという。

□ 翻訳は未だないが, 多くの章の内容梗概は SBLN p.42-47に報告されている。また上記 Handurukande (1988) のテキストには, 第32章の詳しい梗概が記されている。また『仏教説話大系』³⁵⁾の第23巻には, Bh.-k. 第31章 Kuśasudarśanā と第35章 Sutasomajātaka の抄訳がある。また, Oldenburg=Wenzel (1894)³⁶⁾ はバリのアジア協会写本 (SA 7) の第34[35]章 Sutasomajātaka の梗概を, 英文で示した。

□ S. d'Oldenburg (1894)³⁷⁾ はさらに, Bh.-k.ならびに Jātakamālā の各章の内容を要約紹介したロシア語の研究書を出版している。

□ Bh.-k.の研究はまだほとんどないが, 若干触れているものをあげてみると, 渡辺海旭 (1909)³⁸⁾ は, 先に Oldenburg=Wenzel (1894) が報告した Bh.-k. 第34章 Sutasomajātaka の梗概を, K-almāṣapāda 王の説話の系統比較の一資料として用いた。

- T. R. Chopra (1966)³⁹⁾ は Kuśa ジャータカの研究において, Bh.-k. 第31章 Kuśasudarśanāpari-
 □varta に多少触れている。
- 岩本 (1967) の『序説』は, Bh.-k. 京大本に依り, 第34章 Ekaśṅgamuṇi-Nalinī-Kāśikanyā-
 □jātaka を Avadānakalpalatā 第65章 Ekaśṅgāvadāna と比較した結果, Bh.-k. が11世紀の Kṣe-
 □mendra より後の成立であることを認める。⁴⁰⁾
- なお, 岩本 (1967) は avadānamālā 文献が少なくとも二つの系列または段階に区分されると
 □主張した。すなわち (1) Aśoka 王に Upagupta 長老が語った物語という枠組みを用いる (Kalpa-
 □drumāvadānamālā などの) グループと, (2) Aśoka 王に Upagupta 長老が語った物語を Jayaśrī
 □比丘が宣説するという枠組みを用いる (Aśokāvadānamālā などの) グループ, の二つの区分で
 □ある (p.20)。そして Bh.-k. は後者のグループに属している。

- Skt. MSS.: Bendall Add. 1411[38 chs.]; SBLN p.42[34 chs.]; ASB p.252; Matsunami 265
 □ [Ch.1, Ch.29, Ch.30], 266[39 chs.], 267[34 chs.]; Dogra 84[end of Ch.38]; Goshima-
 □ Noguchi 75 [39 chs.]; SA 7; Bir 38; BSP ca10(2-130)=NGMPP-Card A122/3 [38
 □ chs.], tr233(2-131)=NGMPP-Card B99/2[complete]; IASWR MBB-II-139, III-8; Ta-
 □ kaoka A62[476 fols.], CA37-2 [5 fols.], CA37-3 [450 fols.]; NGMPP-Card A121/6(=
 □ ca49), A122/4(=tr243), A1326/39-1327/1(=pa49), D59/6, D72/8, E8/2-9/1, E264/19,
 □ E264/20, E1481/1, E1481/3, E1922/2, G51/18, H168/5

□ MSS. of Parts:

- Maitrīkanyakakumārājātaka [Ch.29?]: NGMPP-Card D51/16
- Supriyasārthavāhajātaka [Ch.32]: Goshima-Noguchi 127; Bir 252; BSP tr243(3-181);
 □ Matsunami 171 (Div.に挿入された第8章の部分); NGMPP-Card D44/1, E1322/1
- Supriyasārthavāhajanma [Ch.32]: Matsunami 479
- Supriyasārthavāhakathā [Ch.32?]: Takaoka A73 (未同定)
- Mātṛpoṣaḥasti-jātakāvadāna [Ch.33]: Bir 163; BSP ca18(2-171)=NGMPP-Card A919/
 □ 13=A1332/26
- Sutasomajātaka [Ch.35]: Iwamoto⁴²⁾ 26
- Śuddhodanarājatapovanapraveśa nāma [Ch.39]: NGMPP-Card E385/14
- Bhadrakalpāvadānoddhṛta-navagrahakṛta Śākyaśimḥastotra: Filliozat 159(5)
- (Bhadrakalpāvadānoddhṛta-)Śrīśākyaśimḥastotra: Thomas 7819(24)-(28)
- Śākyaśimḥastotra: Matsunami 386; NGMPP-Card E238/26, E367/6, H93/4, H247/11-
 □ 248/1, H248/11, H303/6

- ❑ Bhadrakalpāvadāna-Stotrasaṃgraha [=Śākyaśiṃhastotra]: Cowell・Eggeling 31
- ❑ Bhadrakalpāvadānoddhṛta-Daṇḍapāṇikṛta Nāgarājastava: Takaoka CA9-6
- ❑ Bhadrakalpāvadānoddhṛta-Pratisarāstuti: BSP tr782(2-92); NGMPP-Card E346/5, E346/10, E416/8, E612/9, E694/5, H31/1, H126/7, H173/6
- ❑ Bhadrakalpāvadānoddhṛta-Pratisarāhṛdayadhāraṇī: NGMPP-Card D26/15, D26/17
- ❑ Bhadrakalpāvadāna-Sudāsanarasimharājājanmavyākhyāna: NGMPP-Card E385/16
- ❑ Bhadrakalpāvadāna-Supremasāthavāhajātaka [Newārī]: NGMPP-Card D17/2, E1486/9, E1725/4, H397/18

❑ 3. Kalpadrumāvadānamālā

- ❑ Kalpadrumāvadānamālā [K.-dr.] は Feer (1891) および Matsunami によれば、全30章から成る。全部の章名は Feer (1879) p.304⁴³⁾, Feer (1891) p.XXV⁴⁴⁾ および, Filliozat 26-27, Matsunami p.231⁴⁵⁾, BSP 1-32に報告され、各章の梗概は R. Mitra の SBLN に記されている。また K.-dr. の、Avadānaśataka と対応する話に限って、その話の梗概が、Feer (1891) の Avadānaśataka の仏訳の、各章の後ろに付けられた解説に記されている。⁴⁶⁾
- ❑ Speyer (1909)⁴⁷⁾ は第10章 Subhūtyavadāna 全部と、第11章 Yaśomatyavadāna の一部 (Yaśomatī の讃仏頌) の校訂テキストを、avadānamālā 文献の見本として、序文の中にあげた。基づいた写本は Filliozat 26-27と Bendall Add.1590の2本である。
- ❑ Speyer が発表した第10章 Subhūtyavadāna のテキストは、P. L. Vaidya (1958)⁴⁸⁾ による Avś. のテキストの出版本において、付録として再録された。
- ❑ de Jong (1979a)⁴⁹⁾ は、Avadānakalpalatā の Bendall Add.1306 写本の第49章 Śaddantāvadāna の部分が、K.-dr.の同名の章から 5, 59-123, 144-161, 166-184, 190, 193-198偈を取って作られたことを明らかにし、この K.-dr.の第25章 Śaddantāvadāna の校訂テキストを発表した。用いた写本は Avadānakalpalatā の2本の Cambridge 写本 (Bendall Add. 913, 1306) および、K.-dr.の Paris 写本 (Filliozat 26-27) と Cambridge 写本 (Bendall Add. 1590) である。
- ❑ K.-dr.の翻訳はまだない。個別の研究としては、K.-dr. 第25章 Śaddantāvadāna を Feer (1895)⁵⁰⁾ が、また第10章 Subhūtyavadāna を Walleser (1917)⁵¹⁾ が、比較のための一資料として取り上げて論じた。
- ❑ K.-dr.と他の文献との関係についての知識を、ひととおりまとめてみる。
- ❑ (1) L. Feer (1879) は K.-dr.と Avadānaśataka [Avś.] との対照表を発表し、その対照表は Feer (1891) の Avś.の序文にも記された。その対照は次のようになる：

☐	K.-dr. :	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	→
☐	Avs. :	100	1	11	21	41	51	61	71	81	91	2	12	22	42	52	

☐	→	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
☐		62	72	82	92	54	15		33	16						

- ☐ この対照によって、Avs.の詩形改稿 (metrical paraphrase) こそが、K.-dr.の成立の目的であったことがわかる。しかも K.-dr.の Avs.からの話の取り方には規則性があり、10のサイクルで ☐ 1番と2番の話を Avs.から取っていったことがわかる。この規則性は R.-m.にもみられ、R.-☐m.では10のサイクルで3番と4番の話が Avs.から取られている。このことから、K.-dr.と R.-☐m.とは、一定の順序で Avs.の詩形改稿を行った集成として、姉妹篇の関係にあると見られる。
- ☐ (2) Speyer (1909) は K.-dr.第10章 Subhūti に、Vajrasūcī からの多くの詩節の借用を指摘した (p.XLIX ff.⁵²⁾)。Speyer はまた、K.-dr.に Āryasūra の Jātakamālā の詩節の借用があることも指摘している (p.XXXVI)。

- ☐ Skt.MSS. : Bendall Add.1590[257 fols.]; Matsunami 79[Ch.1, Ch.10, Ch.5, Ch.6, Ch.8]; SBLN p.292[26 chs.?]; Filliozat 26-27[29 chs.?]; ASB p.245; BSP tr296(1-32) [書名 Avadā-⁵³⁾nasaṅgraha, 28 chs.?]=Bir 28=NGMPP-Card A861/5=A117/13-118/1
- ☐ MSS. of Parts:

- ☐ Yaśovatī-avadāna [Ch.11]: Durbar p.242=NGMPP-Card B99/7=A1332/29=BSP tr666 (2-185) [=Yaśovatīmāsopavāsakṛtakathā] (未同定)
- ☐ Supriyāvadāna [Ch.17]: IASWR MBB-II-160 [40 fols.] (未同定)
- ☐ Dharmapālāvadāna [Ch.23]: NGMPP-Card B97/11(=ca2160) (未同定)⁵⁴⁾
- ☐ Vāśiṣṭhaparipr̥ṣṭoposadhāvadāna [Ch.29]: Matsunami 366, 367; Goshima・Noguchi 97, 98; Takaoka CA35-2A; NGMPP-Card A1326/38(=tr290), D54/10, E652/5
- ☐ Vāśiṣṭhapariṛcchāvadāna [Ch.29]: BSP tr290(3-77)=NGMPP B97/10=Durbar p.159; BSP tr594(3-78), tr594(3-79) (未同定)
- ☐ Vāśiṣṭhāvadāna [Ch.29]: Dogra 213; Takaoka A36, KA15-4, DH381; NGMPP-Card D 51/18, E360/9 (未同定)
- ☐ Sānumattajadoṣanirṇayā nāmāvadāna [Ch.30]: NGMPP-Card H141/16 (未同定)
- ☐ Sānumattajadoṣanirṇayā nāma Bhuktāṣṭamīvratapoṣadhāvadāna [Ch.30]: Matsunami 368
- ☐ Sānumattajadoṣanirṇayo nāma Śuklāṣṭamīvratapoṣadhāvadāna [Ch.30]: NGMPP-Card C18/1

- 1 Sānumattajapaudoṣanirṇayā nāma Śuklāṣṭamī-Upoṣadham Vratāvadāna [Ch.30]: Takao-
 □2 ka CA34-2 (未同定)
 □3 Śuklāṣṭamī-pratopoṣadhāvadāna [Ch.30]: Bir 249; NGMPP-Card B101/18(=tr594) (未
 □4 同定)
 □5 Sānumattajadoṣanirṇayānāntare Upoṣadhāvadāna [Ch.30]: Takaoka DH317E; NGMPP-
 □6 Card E699/17, E1848/6 (未同定)
 □7 (Sānumattajadoṣanirṇayānāntare) Poṣadhāvadāna: Matsunami 242-245; Bir 189; Dogra 206
 □8 (すべて未同定)
 □9 Upoṣadhāvadāna & Sānumattajadoṣanirṇayāvadāna [Ch.29, Ch.30]: Filliozat 155; Co-
 □10 well・Eggeling 15; SBLN p.265; Bendall 1610 (未同定)
 □11 Upoṣadhāvadāna & Doṣanirṇayāvadāna [Ch.29, Ch.30]: Bendall 1603 (未同定)
 □12 Upoṣadhāvadāna (K.-dr.の一部か未確定): ASB p.244; Matsunami p.241; Bendall 1615
 □13 (IV); NGMPP-Card A122/8(=tr594), B97/10(=tr290) (すべて未同定)⁵⁵⁾
 □14 Aṣṭamīvratavidhānakathā [Ch.29, Ch.30]: Bendall Add. 900⁵⁶⁾

□15 4. Mahajjātakamālā

- 16 Mahajjātakamālā [M.-jm.] の写本は, M. Hahn が調べた 5 本のうち, その中の 1 写本 B
 □17 (Kathmandu, National Archives 所蔵) が archetype 写本であり, 残りの写本は, その 1 写本
 □18 からのコピーである。M. Hahn (1985a)⁵⁷⁾ は, この archetype 写本 B をベースに, さらに写本 P
 □19 (Paris, Institut de la civilisation indienne 所蔵) と, 写本 T (東京大学所蔵) の異読をも確か
 □20 めて, Gudrun Bühnemann の助力を得て, M.-jm. 全部のテキストを校訂し, 出版した。校訂に
 □21 使われなかった 2 写本は写本 B' (Kathmandu, National Archives 所蔵) と写本 E (Kathman-
 □22 du, 個人蔵) である。
 □23 M.-jm. の写本情報ならびに内容は, Hahn の校訂本の序文から, 詳しく知られる。
 □24 archetype 写本である B には, 途中 4 箇所て写本のかんりの葉の欠落があり, そのため M.-
 □25 jm. は本来 335 葉, 全 52 章, 約 11000 詩節から成っていたものが, 欠落で計 56 葉, 約 1680 詩節が欠
 □26 けてしまい, 現在知り得る姿は, 計 50 章, 9277 詩節の作品になっている。これらの欠落によっ
 □27 て, 現在の第 47 章の前 (と後?) の場所に在ったであろう二つの章が完全に失われ, また五つの
 □28 章が部分的に不完全なものになっている。B 写本に欠けている部分は, 他の 4 写本でも欠けてい
 □29 る。しかし, 特に第 47 章の欠落部分については, Hahn は Bendall Add.1473 (Śāśajātakāvadā-
 □30 na) の写本を用いて, 失われた原文を再生している。⁵⁸⁾

□ M.-jm.は、他の avadānamālā 文献と同じように、詩形改稿本として、基となった種本をも
 □つ。現存する M.-jm.の全50章の種本は複数であるが、第10～42章の中核部分は、悲華經 Karu-
 □ṇāpuṇḍarikasūtra (大悲經 Mahākaruṇāpuṇḍarikasūtra とは別の經)を種本として詩形改稿を
 □行っている。また中核部分を取り囲んでいる枠の部分のうち、第1～3章は導入部、第50章は終
 □結部であるが、残りの章はほとんど著名な仏教詩人たちの芸術的作品を種本にしており、第5章
 □は Āryaśūra の Jātakamālā [Jm.], 第6章は Āryaśūra の Subhāṣitaratnakaraṇḍakakathā,
 □第7章と第8章は Gopadatta の Jm., 第43～48章は Āryaśūra と Gopadatta と Haribhaṭṭa
 □の Jm.からの詩形改稿であるらしい。第49章は詩人 Candragomin によって Lokānanda として
 □戯曲化されたことで有名な, Maṇicūḍa 王子の伝説の、未知の古いソースに基づく詩形改稿であ
 □る。

□ Hahn のテキスト出版に先立って、M.-jm.のいくつかの論文がある。

□ まず S. Lévi (1912)⁶⁰⁾ は、M.-jm.の第40章 Ambaracakraṇḍavartin が Karuṇāpuṇḍarikasūtra の
 □梵本からの詩形改稿本であることを、原文をあげて指摘した。

□ また E. Lang (1912)⁶¹⁾ の論文は、33歳で山で遭難死する前に書き残した彼の遺稿を、師の S.
 □Lévi が発表したものであるが、M.-jm.に初めて本格的に取り組もうとした研究である。論文の
 □第1部では写本Pに基づいて、M.-jm.の全体の内容報告を行う。次いで第2部で、第4章 Br-
 □haddiyuti と第5章 Dāsajanma の原文と仏訳をあげている。Lang は第5章において、Ārya-
 □śūra の Jātakamālā からの詩節の借用を多く見出した。

□ Handurukande (1976)⁶²⁾ は、Maṇicūḍāvadāna の4種の伝本の原典研究の第4部として、M.-
 □jm.の第49章 Maṇicūḍa のテキストを、写本P・写本Tと、National Archives の1写本に基づ
 □いて初めて校訂し、内容梗概を報告した。

□ Handurukande (1984)⁶³⁾ は、M.-jm.の第45章 Sarvaṃdada のテキストを、M.-jm.の3写本 (P
 □とTと National Archives の1写本) に基づいて、校訂した。M.-jm.のこの章は Gopadatta の
 □Jātakamālā 中の Sarvaṃdada-jātaka の詩形改稿本であり、元本の Jātakamālā の詩節をかな
 □り借用している。この元本の Sarvaṃdada-jātaka テキストを、Avadānasārasamuccaya の1写
 □本と Jātakamālāvadānasūtra の3写本を用いて校訂するに際して、借用された詩節の異読を得
 □るために、同時に M.-jm.の第45章 Sarvaṃdada の校訂が行われたのである。

□Skt.MSS.: Matsunami 285[→MS.T]; BSP tr700(2-150)=NGMPP B98/15=A1329/20-133

□ 0/1[→MS.A]; BSP tr640(2-151)=NGMPP B98/16[→MS.B']; NGMPP E611/2[→MS.

□ E]; Bir 142; Takaoka A71[407 fols.]⁶⁴⁾; Paris, Institut de la civilisation indienne 所蔵

□ [→MS.P]; NGMPP-Card D43/2, E611/2

- 1 NGMPP B98/16写本 Bṛhajjātakamālā は、M. Hahn の調査によれば、Mahajjātakamālā
□2 の写本Bから作られた写本である。

□3 MSS. of Parts:

- 4 Ambaracakravartisarvaṃdadāvadāna [Ch.40]: BSP tr658(1-26)=NGMPP-Card A921/11
□5 Sarvaṃdadāvadāna (Jātakamālāntargata) [Ch.45]: BSP tr625(3-163); Bir 224 (未同定)
□6 Śaśajātakāvadāna [Ch.47]: Bendall Add.1473⁶⁵⁾

□7 5. Ratnāvadānamālā

- 8 (Ratnamālāvadāna, Avadānaratnamālā, Ratnamālāvadānakathā, Ratnamālā)

- 9 Ratnāvadānamālā [R.-m.] は、その作品名と包摂する章、章の数で、写本間にも大きな揺れ
□10がある。

- 11 まず作品名の揺れとして、各写本には Ratnāvadānamālā のほかに、Avadānaratnamālā, Ra-
□12tnamālāvadāna, Ratnamālāvadānakathā, Ratnamālā などの読みが見られる。しかし、Ratnā-
□13vadānamālā に統一してしまっても何ら問題はない。岩本 (1957)⁶⁶⁾ p.429-431を参照。

- 14 つぎに、各写本間の内容の変動であるが、各写本に見られる内容の相違を知るために、34章ま
□15である Ratnāvadānamālā バリ写本[P]の章名 (Feer (1891) p.XXVI と Filliozat 104-105に⁶⁷⁾
□16記されている) と比較するかたちで、それぞれの写本の有する章を整理するのが便利であろう。

- 17Matsunami p.215も、P本をベースにする方法によって、各写本の有する章の内訳を示してい
□18る。P本と比較した各写本の内容の相違は次のとおり：

- 19 ① Matsunami 27 (Avadānaratnamālā) は、第1～27章がP本第1～27章と一致、最後の第
□2028章がP本の第34章と一致。
□21 ② IASWR MBB-II-17～II-42 (作品名なし)⁶⁸⁾ は、全27章がP本第1～27章と一致。
□22 ③ Matsunami 25 (Avadānaratnamālā) は、全5章がP本第1～5章と一致。
□23 ④ Goshima・Noguchi 88 (Ratnāvadānamālā) は、全12章がP本第1～12章と一致。
□24 ⑤ SBLN p.197 (Ratnamālāvadāna) は、全12章がP本第1～12章と一致。ただし6章と7
□25章の順序が入れ替わっている。
□26 ⑥ Bendall Add. 1620 (Ratnāvadānamālā) は、全13章がP本第1～13章と一致。
□27 ⑦ Bendall Add. 1615は、Ratnāvadānamālā から恣意的に部分を抜き出して筆写したもの。
□28 P本の1・2章、6～8章、11章、13・14章、18・19章、25章、27・28章から成る。
□29 ⑧ Bendall Add. 1592 (Ratnāvadānamālā) は、第1～14章がP本第1～14章と一致、第15
□30章はP本第16章と一致。第16章 (No title) はP本に対応する章がなく、最後の第17章はP

- 本第15章と一致。
- ⑨ Matsunami 316 (Ratnamālāvadānakathā) は、第1～18章がP本第1～18章と一致、それ以降(第19～23章)はP本にない五つの章を有し、最後の1章(第24章)でP本第25章と一致。P本にない五つの章の名は、Vaḍikāvadāna, Gāndharvikāvadāna, Pañcavārṣikāvadāna, (欠), Nirmalāvadāna である。
- ⑩ BSP tr596(1-29) (Avadānaratnamālā) は、内容が Matsunami 316と同じ。
- ⑪ 榊私蔵本 (Ratnamālāvadāna) は第1～18章がP本第1～18章と一致、それ以降(第19～22章)はP本にない四つの章を有し、最後の1章(第23章)でP本第25章と一致。P本にない四つの章の名は、Vaḍikāvadāna, Gāndharvikāvadāna, Pañcavārṣikāvadāna, Nirmmalāvadāna である。(つまり Matsunami 316と同じ。)
- ⑫ Matsunami 317 (Ratnamālāvadānakathā) は、第1～13, 15～18章がP本第1～13, 15～18章と一致、第14章と第19～24章はP本にない章を有し、最後の1章(第25章)でP本第25章と一致。P本にない第14章と第19～24章の章名は、それぞれ Pañcavārṣikāvadāna, Supriyāvadāna, (不明), Vidyānnabhojana, Padmāvadāna, Dharmapālāvadāna, Balavacchreṣṭidārakāvadāna である。
- これ以外にも R.-m.の写本は、いくつか存在するが、一部の断片にすぎないか、あるいは内容たる章名まで報告されていない写本なので、ここでは省くことにする。
- さて、各写本の内容をP本と比較してみると、①～⑦までの写本は、P本と異なる Version を想定する必要はないことがわかる。⑧も1章の挿入が認められるにすぎない。ところが⑨～⑪の写本は共通して、ひとつの別の Version をなすといえよう。また⑫はその別の Version の1分岐形といえるであろう。つまり、R.-m.写本は大きく分類して、P本ならびに①②に代表される Version Aと、⑨～⑪に代表される Version Bとの、二つに分けられるらしいと見当づけられる。さて、これらの二つの Version のうち、どちらが古い伝承でどちらが新しい伝承なのであろうか。それとも、どちらの Version も、はじめの第1～18章をほぼ共有していることから、そこまでが R.-m.の原形で、その後、新しい章の付加によって、Version の分岐が起こったと見なすべきなのだろうか。
- R.-m.の原形はどのようにして知り得るか。R.-m.は、10部×10話からなる Avadānaśataka の、各部の第3話と第4話を詩形に改稿することを目的として作られた作品である。Feer (1869), (1891)⁶⁹⁾ は、R.-m.のP写本と Avadānaśataka [Avś.] とが次のように対応していることを明らかにした。
- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----------|---|----|----|----|----|---|----|---|----|----|----|----|----|----|----|----|----|---|
| □ R.-m.: | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | → |
| □ Avś.: | 3 | 13 | 23 | 43 | 53 | | 63 | | 73 | 83 | 93 | 4 | 14 | 24 | 44 | 32 | 55 | |

→ 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34
64 74 84 94

- この対照表から、10のサイクルで3番と4番の話を Avs.から取ってゆくという編集方針が、R.-m.のP写本では、21章まで大体保たれていることがわかる。従って、R.-m.の原形は、21章までの部分と認められ、それ以降は後世の付加であると推定される。このことに気付いたのは岩本(1967)の『序説』p.178であり、それ以前の岩本(1957)の論文で、R.-m.の原形は12章までの部分である、と述べていたのを、そのために訂正した。21章までの部分が R.-m.の原形とすると、18章までしか Avs.と対応しない Version B の写本よりも、P写本を含む Version A の写本のほうが、古い伝承を保持していることがわかる。Version A は21章までの原形の上に付加がなされたものであるが、一方 Version B は原形を一部失った形の上に、付加がなされたものである。
- さて、Goshima・Noguchi 87 に Ratnāvadānatattva という写本があるが、広義の R.-m.の一部である可能性はあるものの、ここで問題にしている R.-m.とは全く別の作品とみなすべきで、上の R.-m.の写本には含めなかった。Ratnāvadānatattva は、R.-m.の⑨～⑪の Version B の写本のみに見られる二つの章 (Vāḍikāvadāna, Gāndharvikāvadāna) を冒頭に有しているにすぎず、それら以外に R.-m.と共有する章をもたない。この二つの章は、R.-m.原形から Version B が分岐する契機になったと思われる、Version B だけにある特徴的な付加された章である。Ratnāvadānatattva は、この二つの章を介して、R.-m.とつながりをもつわけであるから、Ratnāvadānatattva は、R.-m.の傍系たる Version B の延長線上に、続編として作られた作品らしい、と岩本裕は推定する(『序説』p.178)。しかし、R.-m.の傍系たる Version B が出来るまでに、Ratnāvadānatattva が存在しなかったとは、誰にも断定出来ないであろう。
- R.-m.のテキスト出版は、高島 Takahata (1954) により、R.-m.写本の12の章と Ratnāvadānatattva 写本の26の章とを、一本につなげた38章から成るテキストが、Ratnamālāvadāna という名で公刊されている。ベースに用いた写本は、第1～12章テキストは、全12章から成る R.-m.の写本 A (Goshima・Noguchi 88) を用い、第13～38章のテキストは、全26章から成る Ratnāvadānatattva の写本 A' (Goshima・Noguchi 87) を用いた。この2本をベースにして、そのほかに、全23章から成る榊亮三郎私蔵の R.-m.写本 B と、全34章から成るバリの R.-m.写本 P (Filliozat 104-105) の1～80葉が対校された。また第1章の校訂にはさらに1写本 (Goshima・Noguchi 24) と、インドで発表された第1章のテキストを用いた。
- 岩本(1957)は、このテキスト出版に対し、Ratnamālāvadāna というテキストの題名の不適正さ、ならびに R.-m.の12章までの写本と、Ratnāvadānatattva とを一つにつなげてしまうことの根拠の薄弱さなどを指摘した。R.-m.の1写本(榊蔵本)の第19と20章 (Vāḍikāvadāna, Gān-

□dharvikāvadāna) は, Ratnāvadānatattva の全26章の中の, 冒頭の二つの章(第1, 第2章)に
 □あたる。しかし, R.-m.の1系統にすぎぬ写本(櫛蔵本)において, Ratnāvadānatattva と二つ
 □の章が共有されているにすぎない。高島テキストのように, R.-m.の他の系統の伝承を無視して,
 □R.-m.の12章までの直後に Ratnāvadānatattva を接続させてしまう処置を取るのは, 到底無理
 □があるといわねばならない。たしかに Ratnāvadānatattva は R.-m.の続編であるということは
 □正しい⁷⁴⁾, しかし R.-m.の12章からの続編であるということは確実に間違いである。Ratnāvadāna-
 □tattva は, その内容が Avś.の各部類(varga)の第5~第9の話の詩形改稿本である以上, 少な
 □くとも, R.-m.の21章までが, Avś.の各部類の第3・第4の話の詩形改稿本として出来上がった
 □後の, 続編でなければならないのである。

□テキストについては, 高島本の後に, R.-m.の Nandāvadāna の章(P本では25章にあたる)
 □が, R. Handurukande (1984) ⁷⁵⁾によって再校訂された。校訂には計8本の写本が用いられた。す
 □なわち, Bendall Add.1592 ならびに Matsunami 27, 316, 317 の4本の R.-m.の写本と,
 □Matsunami 170の Divyāvadāna 第20章 Nandāvadāna と, NGMPP A117/9の写本(書名不明)
 □と, IASWR MBB-II-40の Nandāvadāna と, Bendall Add.1598の Avadānasārasamuccaya の
 □(IV) Matsaranandāvadāna である。R.-m.の Nandāvadāna は, 写本 Avadānasārasamuccaya
 □に入っている(本来 Gopadatta の Jātakamālā の一部であった) Matsaranandāvadāna を借用
 □し詩形改稿を行って成立した作品であるために, Handurukande は, Avadānasārasamuccaya
 □を校訂した付録(Appendix III)として, R.-m.の Nandāvadāna のテキストも校訂したのであ
 □った。

□翻訳としては, Mahendra Lal Das (1894) ⁷⁶⁾によって第3章 Cakrāvadāna が英訳された。和
 □訳は, 高島 (1952) ⁷⁷⁾によって第6章 Sūkaryavadāna が, Divyāvadāna 第14章 Sūkarikāvadāna
 □と併せて訳され, また奈良康明 (1988) ⁷⁸⁾によって, 高島本テキスト第13章 Vāḍikāvadāna, 第16
 □章 Pretikāvadāna, 第17章 Kacampalāvadāna が訳された。

□R.-m. (と R.-tattva) の研究としては, 高島テキストに英文で付けられた「序論」の他に,
 □高島 (1955) ⁷⁹⁾による, R.-m. (高島本) 第20話 Mahiṣāvadāna (R.-tattva 第8章) 等に指摘しう
 □る大乘的思想の研究, また奈良康明 (1981) ⁸⁰⁾の, R.-m. (高島本) 第4・16・24・31章にみられる
 □「餓鬼」観の研究, さらに榎本文雄 (1983) ⁸¹⁾の, R.-m. 第8章 Devatāparipṛcchāsūtra とそのソー
 □スとしての Devatāsūtra とを比較した研究, などがある。

□Skt.MSS.: Goshima・Noguchi 88; Matsunami 25, 26, 27, 316, 317; Filliozat 104-105; Ben-
 □dall Add.1592, 1615, 1620; SBLN p.197; ASB p.253; BSP tr596(1-29)=NGMPP-Card
 □A117/9; Bir 27[24 chs.]; IASWR MBB-II-17~II-42[=Ch.1~Ch.27]; 櫛私蔵本; NG-

- 1 MPP-Card D46/22-47/1, E2579/5, E1479/2
- 2 MSS. of Parts:
- 3 Kauśīdyavīryotsāhāvadāna [Ch.1]: Matsunami 110; Goshima・Noguchi 24
- 4 Kauśīghavīryotsāhanāvadāna [Ch.1]: Bendall Add. 1381[11 fols.] (未同定)
- 5 Snātāvadāna [Ch.2]: Bendall Add. 1380[11 fols.]
- 6 Cakrāvadāna [Ch.3]: Matsunami 124
- 7 (Ratnamālāvadāne) Pretikāvadāna [Ch.4 or Ch.15?]: Takaoka KA 44 D⁸²⁾; NGMPP-Card E651/4, E1367/2, H388/12
- 8 Sālapuṣpāvadāna [Ch.5]: Matsunami 491, fols.30-33
- 9 Śuklāvadāna [Ch.9]: IASWR MBB-III-7; NGMPP-Card E1343/1
- 10 Hiraṇyapāṇyavadāna [Ch.10]: Matsunami 507; Dogra 171; Bir 105[18 fols.]; BSP tr 652(3-222)=NGMPP-Card A125/13; NGMPP-Card E1363/7
- 11 Hastakāvadāna [Ch.11]: Takaoka KA15-6; NGMPP-Card E699/15, E2061/3 (未同定)
- 12 Vastrapradānāvadāna [Ch.17]: Matsunami 365
- 13 Triṣṭakākhyaṇāvadāna [Ch.20]: NGMPP-Card E415/11
- 14 Lekuñcikākhyāvadāna [Ch.21]: NGMPP-Card E415/10
- 15 Padmāvadāna [Ch.22]: NGMPP-Card E1343/2; IASWR MBB-III-6
- 16 Nandāvadāna [Ch.25]: Matsunami 170, fols. 259-267
- 17 Dhārāmukhavajrapāṇigopālakalubdhakadamanāvadāna [Ch.26]: Dogra 172
- 18 Sudhanākumārāvadāna [Ch.32]: Matsunami 477-I; Dogra 191; NGMPP-Card E2064/6
- 19 Sucandrāvadāna [Ch.34]: 末尾「単立の Avadāna」の節を参照。
- 20 Avadānaratnamālāyāṃ Upauṣadha-praśamsāyā Kavikumārāvadāna [Newārī?]: NGMPP-Card E360/13, E417/19
- 21 以上の外, Takaoka DH317F と NGMPP-Card E1848/7に Avadānaratnamālāyāṃ Aśokāva-dānavarṇṇo(!)vadānam ekādaśamah という写本がある。

□22 6. Ratnāvadānatattva

□23 (Subhāṣitamahāratnamālā, Subhāṣitamahāratnāvadānamālā)

□24 全26章から成る Ratnāvadānatattva [R.-tat.] のテキストは, 上で述べたように高島 (1954)

□25 により, Ratnāvadānamālā の一部として, 出版された。

□26 R.-tat. は, 上記の高島本テキストが用いた京大写本 A' (Goshima・Noguchi 87) のほかに,

- もう2本、写本が存在している。そのうちの1本は、BSP カタログにある Subhāṣitamahā-
 □ratnāvadānamālā という作品 (NGMPP B101/3) である。この新しい写本は、Avs. の詩形改
 □稿本として、極めて注目すべき重要さをもつ。巻末の「附篇 新写本 Subhāṣitamahāratnāva-
 □dānamālā の価値について」を見られたい。
- 高島による R.-tat. の26章の校訂は、1本の京大写本に基づいてなされたため、将来はこの新
 □写本と、対校がなされる必要がある。また、新写本は京大写本よりも15章分多いため、それら15
 □章の章のテキストが新たに校訂出版されるべきである。
- また NGMPP-Card を見ると、R.-tat. らしい写本が、他に1本ネパールに存在していること
 □がわかる。E1343/4写本がそれで、コロフォンに Iti śrīsubhāṣite mahāratnāvadānatatve vasu-
 □dhārāvratākathā samāptāḥ⁸³⁾(sic)とあるようである。こちらの写本についてはまだ筆者は中身を
 □確認する機会を得ていない。

□Skt.MSS.: Goshima・Noguchi 87; BSP ca 952(3-182)=NGMPP-Card B 101/3[364 fols.];

□ NGMPP-Card E1343/4[346 fols.]

□MSS. of Parts:

- Vaṇikāvadāna & Gāndharvikāvadāna [Ch.1, Ch.2]: Cowell・Eggeling 25
- Dhīmatyavadāna [Ch.25]: Takaoka CA14-4 (未同定)
- Dhīmatīparipṛcchāvadāna: Durbar p.160[=NGMPP A126/3]; Bir 76; BSP tr290(2-14)
- =NGMPP-Card A918/6(=pal1) (未同定)
- Vasundharāvatotpatyavadāna [Ch.26]: SBLN p.269; Matsunami 364; Takaoka CA28-
 □ 1; NGMPP-Card D46/3, E274/12[Newārī], E330/37[Newārī], E652/2, E1295/4, E
 □ 1337/19=E1336/40, E1354/5, E1367/8, H123/3

□ 7. Vratāvadānamālā

- 岩本(1967)の『序説』は第4章5節を Vratāvadānamālā [Vr.-m.] の研究にあてている。岩
 □本の執筆当時よりも利用しうる写本カタログは現在は増えているものの、岩本が解明したところ
 □に大きな変更を加えるような写本はいまだ見つからないようである。従って、以下の説明の
 □大部分は岩本の研究に従う。
- Vr.-m.は、完本の写本が存在しないため、有する章の数とその順序について、明確に知り得な
 □い。Vr.-m.の写本は、多くの場合、遊離した一つ二つの章が、ばらばらに流布しているのであ
 □る。

□ Vr.-m.が有する章を知るためには、まず、最もまとまった京大寫本(Goshima・Noguchi 101)

□の有する章が参考にされるべきである。次に、京大寫本の章名を示すと：

□ [Ch. 1] Suvarṇavarṇāvadāna における, Lakṣacaityasamutpatti という第1章

□ [Ch. 2] Suvarṇavarṇāvadāna という第2章

□ [Ch. 3] Suvarṇavarṇakumārāvadāna という第3章

□ [Ch. 4] Vasu(n)dhārā tṛtīyā vratapūrvamartyamaṇḍalaprakāśitakathā

□ [Ch. 5] Ahorātravratākathā

□ [Ch. 6] Kavikumārākathā

□ [Ch. 7] Puṇyārāsyavadāna (=Aśokāvadānamālā [Ch.13])

□ [Ch. 8] Śreṣṭhīmahājanāvadāna (=Aśokāvadānamālā [Ch.14])

□ [Ch. 9] Bhavaśarmāvadāna (=Aśokāvadānamālā [Ch.24])

□ [Ch.10] Bhavalubdhakāvadāna (=Aśokāvadānamālā [Ch.12])

13 以上の10章から成っている。また、この寫本の第1章の前には、次の2章が付けられている：

□ a. Lakṣacaityasamutpatti

□ b. Vasundharāvratakathāna

□ 岩本『序説』p.198によれば、この二つの章は寫本ではそれ以下の章と筆を異にしているし、

□頁の番号づけも別々になされている。状況的に考えて、Vr.-m.の第1章の前の位置に、この二つ

□の章が接木されたと見なしうる。

□ さて、京大本から知られた、以上の12の章の一つ一つを検討してゆく。

□ まず、第1～3章の Suvarṇavarṇāvadāna が Vr.-m.に帰属することは、この部分だけが独立

□して存在する寫本のほとんどにも明記されている。Vr.-m.の名を冠する寫本は多くがこの三つの

□章しかもたない。この三つの章の部分は Vr.-m.という名の伝承と切っても切り離せないほどで

□あり、⁸⁵⁾Vr.-m.の中核的な部分であると思われる。[1] Lakṣacaityasamutpatti, [2] Suvarṇa-

□varṇāvadāna, [3] Suvarṇavarṇakumārāvadāna という章名は、Goshima・Noguchi 130なら

□びに Matsunami p.243 からも確かめられる。これらの説話の意図は Lakṣacaitya-vrata を称え

□ることにある。

□ 次に、第4章 Vasu(n)dhārā tṛtīyā vratapūrvamartyamaṇḍalaprakāśitakathā については、

□岩本『序説』p.200が、Bendall Add.1356, (Pūrvaśrī 3 Vasundharādevīvrata sampūrṇa-)Aśva-

□ghoṣa-nāṇḍimukhāvadāna と、恐らく同一のテキストであると推測しているが、この推測を裏

□づけるように、Matsunami p.214では、次の四つの作品名が、同一の作品の別名として記されて

□いる。

□ Vasundharāvratapūrvamartyamaṇḍalāgatakathā

- 1 = Vasundhārāvrata-pūrvamaṇḍalāgatasūryaprabhākathā
 2 = Vasundharādevīvratasampūrṇa-Aśvaghoṣāvadāna
 3 = Pūrvaśrī-Vasundharādevīvratasampūrṇa-Aśvaghoṣanandimukhāvadāna
 4 この作品は人気があったものとみえ、多くの写本が存在している。この作品は, Bendall
 5 Add.1356の解説によると、女神 Vasundharā が聖仙 Nandimukha-Aśvaghoṣa に、死ぬべきも
 6 のの世界 (martya-maṇḍala) に生まれるように命じることから物語が始まる。作品の意図は、
 7 Vasundharā-vrata を称えることにある。内容的に、Vr.-m.の中の1章であるにふさわしい。
 8 次に、第5章 Ahorātravratākathā については、Aśokāvadānamālā の第10章 Ahorātravrata-
 9 caityasevānuśaṃsāvadāna とは別の作品らしいことしかわからない (Filliozat 14-1 参照) が、
 10 名前から、Ahorātra-vrata を称えた話と推測される。内容的に、Vr.-m.の中の1章であるにふ
 11 さわしい。
 12 第6章 Kavikumārakathā については、岩本『序説』p.232 が「Kavikumāra の説話を Upo-
 13 śadha-vrata (布薩会) の功德の宣揚のために利用したもの」であることを明らかにしている。
 14 独立した Kavikumāra の多くの写本は、この作品が実に Vr.-m.に帰属することをコロフォン
 15 に記している。⁸⁶⁾
 16 次に、第7～10章は、Aśokāvadānamālā からそのまま転載されたものらしい。元の Aśokā-
 17 vadānamālā の13という章の番号がそのまま Vr.-m.の京大写本に残されてしまっていることを、
 18 岩本『序説』p.201はその証拠として指摘した。従って、第7～10章は、Vr.-m.に後から付け加
 19 えられた章であることが明らかである。Vr.-m.に帰属することを記した独立した写本も、この部
 20 分については存在しない。ただし内容を見ると、vrata と多少関係がある説話が入っているよう
 21 である。⁸⁷⁾
 22 次に、京大写本の第1章の前に付けられた a 章 Lakṣacaityasamutpatti については、同名の
 23 第1章 Lakṣacaityasamutpatti と、同系統であるが別行のテキストであることが、岩本『序説』
 24 p.201によって報告されている。また b 章 Vasundharāvrata-kathana (or -kathā)については、
 25 その同じ作品名をもつ多くの写本が、Vr.-m.に帰属することをコロフォンに記している。⁸⁸⁾する
 26 と、これら a, b の二つの章は、京大写本の編纂の際に Vr.-m.に付加されたのだとしても、それ
 27 以前にも、Vr.-m.の一部として伝承されていたのかもしれない。
 28 以上の検討によって、少なくとも第6章までは、Vr.-m.の編纂の企図、すなわちある特定の
 29 vrata を宣揚する説話の集成をつくる企図、を明確に見ることができた。本来の Vr.-m.の一部
 30 を京大写本 Vr.-m.は伝えていると見てよいであろう。しかし第7章からは Aśokāvadānamālā
 31 のように他の avadānamālā の借用が入り込んできている。Vr.-m.が完成された avadānamālā
 32 であったのか、それとも形成の途中で放棄されてしまった未完成な作品であったのか、知ること

❶ はできない。しかし、Vr.-m.の断片は以上の章だけで尽きるものではない。そのほかに、京大写
 ❷ 本 Vr.-m.には含まれていないが、しかし Vr.-m.の名前をコロフォンに背負ったまま流布してい
 ❸ る、Vr.-m.から遊離した章らしい写本が幾つか存在している。現在知り得ているものは次の四つ
 ❹ である：

- ❶ c. Śṛṅgabherīvrataṭāvadāna
- ❷ d. Sumāgadhāvadāna
- ❸ e. Virakuśāvadāna
- ❹ f. Ajātaśatrudamanāvadāna

❶ まず、(c章) Śṛṅgabherīvrataṭāvadāna は、少なくとも2本の写本 (Dogra 217; SBLN p.231)
 ❷ が、Vr.-m.に帰属することをコロフォンに記している。しかし、Śṛṅgabherīkathā と称する他の⁸⁹⁾
 ❸ いくつかの写本では、Citṛaviṣṭatyavadāna に帰属することがコロフォンに記されている。Vr.-
 ❹ m.の Śṛṅgabherīvrataṭāvadāna と、Citṛaviṣṭatyavadāna の Śṛṅgabherīkathā とは区別される
 ❶ べきであり、SBLN p.231によれば、前者は後者を拡大増広したヴァージョンである。Śṛṅga-
 ❷ bherīvrataṭāvadāna は内容から見て、Lakṣacaitya-vrata を説いている点、Vr.-m.の一部であるに⁹⁰⁾
 ❸ ふさわしい。

❶ 次に、(d章) Sumāgadhāvadāna は少なくとも2写本 (Matsunami 257; Bir 303(e)) が、Vr.-
 ❷ m.に帰属することをコロフォンに記している。また Sumāgadhāvadāna の1写本は Divyāva-
 ❸ dānamālā (Goshima・Noguchi 49) の最終章として存在するが、この部分は、その前の章の Su-
 ❹ varṇavarṇāvadāna と一緒に、ネパールの写経生によって Vr.-m.から誤って編入されたもので⁹¹⁾
 ❶ あるらしい。Sumāgadhāvadāna の作品そのものは、Vr.-m.よりも遥かに古いことから、Vr.-m.
 ❷ の編纂に際して外から組み込まれた一部であったと思われる。

❶ 次に、(e章) Virakuśāvadāna は極めて人気のあった作品で、現存写本がおびただしくある
 ❷ のであるが、その大半が Aṣṭamīvrataṭamāhātmya に属するらしい Newārī 語の写本である。そ
 ❸ の中で Vr.-m.に帰属することをコロフォンに記しているのは2本の写本 (Goshima・Noguchi
 ❹ 100と NGMPP-Card A919/18-920/1 [Newārī ?]) のみであり、残りの写本の多くは「Divyāva-
 ❶ dāna から抜き出された(uddhṛta)」と記している。従って、Vr.-m.に帰属するとした2写本の
 ❷ コロフォンの記述は、単なる誤伝である可能性が十分ある。

❶ 次に、(f章) Ajātaśatrudamanāvadāna は、7本写本が知り得るが、その多くが Aṣṭamī-
 ❷ vrataṭamāhātmya に属するらしい Newārī 語の写本であり、それらのコロフォンには、Vr.-m.に
 ❸ 帰属することが記されている。

❶ さて、以上の、写本の伝承によって Vr.-m.に帰せられた(1~10ならびに a~e) の合計15
 ❷ の説話の中で、すでにこれまでに原文の校訂がなされているものが若干あるので、紹介する。

- 第1～3章の Suvarṇavarṇāvadāna は、その Vr.-m.のヴァージョン以前の、古いヴァージョ
 □ ンの Suvarṇavarṇāvadāna の貝葉の写真が、Sāṅkṛtyāyana がチベットで撮影した写真から見
 □ つかり、その写真に基づいて、Sita Ram Roy (1971) によって初めてテキストが出版された。⁹²⁾
 □ この古いヴァージョンでは、第1章 Lakṣacaityasamutpatti にあたる部分を持たない。Rajapa-
 □ tirana (1974)⁹³⁾ は、その古いヴァージョンの梵本を、チベット訳と漢訳、ならびに Vr.-m.のヴァ
 □ ージョンの Suvarṇavarṇāvadāna の4本の写本と照合し、新たな校訂テキストを作って、博士
 □ 論文の第1部とした。さらに第2部においてチベット文を校訂し、第3部において梵本を英訳し
 □ た。Rajapatirana によれば、チベット訳 (Toh 4144, Ota 5645) と漢訳『金色童子因縁経』
 □ (大正 No.550) は、古いヴァージョンの梵本とよく一致する。Vr.-m.のヴァージョンは、古い
 □ ヴァージョンを特定の vrata の宣揚のために改稿し、第1章 Lakṣacaityasamutpatti の大部分
 □ を付加して出来た。
- 第9章 Bhavaśarmāvadāna (=Aś.-m. [24]) と第6章 Kavikumāarakathā のテキストは、そ
 □ れぞれ岩本 (1967) の『序説』の付録 I・II として、校訂された。
- また、(d章) Sumāgadhāvadāna のテキストは、初めに常磐井堯猷 (1918) によって1写本に
 □ 基づく校訂がなされ、次いで岩本裕 (1959)⁹⁵⁾ によって6写本に基づく校訂がなされた。岩本 (19
 □ 64)⁹⁶⁾ はまたラサ版チベット訳の原文も発表した。さらに、岩本 (1968a)⁹⁷⁾ は梵文・チベット訳とと
 □ もにその総合的研究を独文で発表し、それと同時に岩本 (1968b)⁹⁸⁾ はその研究の邦語版を出版し
 □ た。この最後の研究書においては、Sumāgadhāvadāna の梵文とチベット訳、ならびに Avadā-
 □ nakalpalatā 第93章 Sumāgadhāvadāna の和訳が初めに置かれ、本論において、Sumāgadhāva-
 □ dāna の各伝承の形態と形成史が論じられた。第93章は、最近 Markus Görtz (1993)⁹⁹⁾ によって、
 □ あらためて蔵・梵テキストが校訂され、独訳された。

- Skt.MSS.: Goshima・Noguchi 101[12 chs.]; Bir 303; BSP tr 670(3-91)=NGMPP-Card A
 □ 86/10=A 125/5 [52 fols.=Suvarṇavarṇāvadāna?]; ASB p.254; NGMPP-Card A 123/6
 □ (=tr 295), A861/11=A124/6(=pa594), B100/15(=pa13), D14/18-15/1

□ MSS. of Parts:

- Suvarṇavarṇāvadāna [Ch.1]~[Ch.3]: SBLN p.275[3 chs.]; Bendall Add.1341[3 chs.];
 □ Matsunami 380-I [3 chs.], 381 [3 chs.]; Goshima・Noguchi 130 [3 chs.]; Filliozat
 □ 115[3 chs.]; Dogra 218; IASWR MBB-II-155; BSP tr 295(3-90), tr 593(3-190)=
 □ NGMPP-Card B 101/8, tr 295(3-191)=NGMPP-Card A 228/2=A 124/2, tr 668(3-
 □ 192)=NGMPP-Card B 100/21; Takaoka DH394; NGMPP-Card D51/8, D64/2, D
 □ 64/5, E651/10, E1381/6, E1740/13-1741/1, E2572/11

- [1] Suvarṇavarṇāvadāna [The earlier version]: Sāṅkṛtyāyana 154¹⁰⁰⁾[palm-leaf, 174 fols.]
- [2] Vasundhārāvrataṭpūrvamartyamaṇḍalāgatakathā-Aśvaghoṣāvadāna [Ch.4]: Matsunami 38, 39-I; Winternitz・Keith 1449-97; Iwamoto 14-1; Takaoka CH190; ASB p.254; NGMPP-Card E256/11, E538/10, E1361/3, E1482/7
- [3] Vasundhārāvrataṭpūrvamaṇḍalāgatasūryaprabhākathā(-Aśvaghoṣāvadāna) [Ch.4]: Matsunami 360
- [4] Vasundharādevīvratasampūrṇa-Aśvaghoṣāvadāna [Ch.4]: Matsunami 189-III; NGMPP-Card A921/8(=ca2160), E57/1, H379/6
- [5] Pūrvaśrī-Vasundharādevīvratasampūrṇa-Aśvaghoṣanandimukhāvadāna [Ch.4]: Matsunami 40, 41, 195-II; Bendall Add. 1356, 1486, 1533, 1635; Cowell・Eggeling 14; Takaoka CH520, CH227[Skt. & Newārī]; NGMPP-Card E1867/21
- [6] Vasundharādevīvratasampūrṇa-Aśvaghoṣanandimukhāvadāna [Newārī version]: Takaoka DH10, DH110, CH230; NGMPP-Card D7/8, D13/16, E360/6, E1035/7, E1551/8, E1703/15
- [7] Vasundharāvrata-Nandimukha-Aśvaghoṣāvadāna [Ch.4]: Takaoka CH372, DH317
- [8] Aśvaghoṣāvadāna [Ch.4]: Matsunami 420-XVI-5; IASWR WGS-3; Matsunami DH63; NGMPP-Card B95/12(=ca2490)
- [9] Aśvaghoṣanandimukhāvadāna [Newārī version]: D13/5, D13/16, D18/7
- [10] Aśvaghoṣanandimukhavyākhyāna [Ch.4]: IASWR MBB-II-203 (未同定)
- [11] Vasundhārāvrataṁhātmya(Aśvaghoṣāvadāna) [Ch.4]: IASWR MBB-I-57 (未同定)
- [12] Ahorātravratākathā [Ch.5]: Matsunami 54 [Kārttikāvadāna と関係]; IASWR MBB-II-3; NGMPP-Card B95/14(=pa17), E293/18, A920/4(=ca18)[Newārī] (未同定)
- [13] Ahorātravratapūnyakathā [Ch.5]: NGMPP-Card H126/4
- [14] Ahorātravratākathāvidhi [Ch.5]: Filliozat 14-1¹⁰¹⁾ [Kārttikāvadāna と接続]; Cowell・Eggeling 71 (未同定)
- [15] Kavikumārāvadāna [Ch.6]: Matsunami¹⁰²⁾ 83; Dogra 216; Goshima・Noguchi 16; Takaoka CA37-1; NGMPP-Card A119/11(=pa18), E1096/4, E1631/32, E2485/25, H207/7, H207/8, H307/5=H311/3; IASWR MBB-III-9
- [16] Kavikumārākathā [Skt.?]: Matsunami 82; SBLN p.102; ASB p.245; NGMPP-Card E293/12, E652/4, E1363/3
- [17] Kavikumārāvadāna(-kathā)[Newārī version, often as a part of Aṣṭamīvrata]: NGMPP-Card D50/5, D50/15, E360/8, E445/23, E493/24, E1198/4, E1292/13, E1371/8, E

- 1445/21, E1848/14, E2062/7, E2332/6, H127/12; Takaoka A28F, CH49
- Kavikumārajanmāvadānakathā [Newārī ?]: Takaoka DH302; NGMPP-Card D26/41-27/1, D50/20, E258/9, E356/3, E378/4, E385/13, E532/2, H121/6, H325/5
- Kavikumārajātaka [Newārī ?]: NGMPP-Card D50/15; Takaoka A33
- Vasundharāvratakathā [Ch.b]: Bendall Add.1401[17 fols.]; Goshima・Noguchi 96 [18 fols.]¹⁰³⁾
- Vasundharāvratakathā [perhaps Skt.] [Ch.b]: BSP pra594(3-72)[13 fols.], ca1033(3-73); Durbar p.159=NGMPP A923/5, B100/11=BSP tr290(3-71)[13 fols.]; Bir 294;¹⁰⁴⁾ Takaoka CA14-2; NGMPP-Card A134/33(=ca2581), B100/12=B100/19=A881/6(=tr302), B100/16(=pa9), B101/12(=pa10), B107/4(=ca1033), C69/2, E17/8, E17/9, E57/1, E256/20, E294/6, E360/6, E422/8, E455/36, E538/10, E1034/3, E1312/3, E1711/16, E1848/5, H43/9, H44/1, H44/7, H58/13, H72/2, H98/11, H100/7, H101/12, H144/6, H160/7, H216/12, H220/3, H301/6
- Vasundharāvratakathā [Newārī version] [Ch.b]: Takaoka CH88; NGMPP-Card A129/10(=ca2160), D9/17, D20/7, E5/2, E14/8, E420/2, E1107/9, E1249/1, E1311/9, E1312/2, E1312/7, E1439/4, E1444/4, E1730/8, H144/3, H301/16, H339/35
- Vasundharāvratakathā [Skt.+Newārī]: Takaoka A115, DH284; NGMPP-Card D27/30, D31/25, E656/21, E909/6, E1027/11, E1473/7, E1503/7, E1524/4, E1713/9, H314/5, E905/2
- Vasu(n)dhārāvrata [Ch.b]: Velankar 14 (未同定)
- Vasundharāvratasāṅkṣiptakathā [Newārī]: Takaoka CH164
- Vasu(n)dhārāvratakathāvidhi [Ch.b]: Matsunami 359 (未同定)
- Vasundhārāvratāvadāna Sūryodayanīpakathā [Ch.b]: Takaoka A17 (未同定)
- Śṛṅgabherī(-vrata-)avadāna [Ch.c]:¹⁰⁵⁾ Dogra 217; SBLN p.231; ASB p.255
- Śṛṅgabherī-avadāna [Newārī]: Takaoka A28B
- Sumāgadhāvadāna [Ch.d]:¹⁰⁷⁾ Matsunami 257; Filliozat 156; SBLN p.237; ASB p.256; Bendall Add.1598 [the remainder of MS.], Add.1585; Goshima・Noguchi 128; Bir 303(e)[te593/1]=BSP tr593(3-184)=NGMPP-Card B101/1; Kodama 10(3); Takaoka DH317H; Goshima・Noguchi 49 [Divyāvadānamālā Ch.43]; NGMPP-Card A125/11(=pa243), D15/5, E1848/10
- Virakuśāvadāna [Ch.e]: Goshima・Noguchi 100. なお, Divyāvadāna に属すると称する Virakuśāvadāna の写本については, Divyāvadānamālā の写本情報の箇所を参照せよ。

- ☐ Virakuśāvadāna [Newārī, as a part of Aṣṭamīvrata]: NGMPP-Card A919/18-920/1
- ☐ (=pa14)
- ☐ Ajātaśatrudamanāvadāna [Ch.f]: Durbar p.242=NGMPP A919/16=BSP tr647 (1-2)=
- ☐ Bir 12; Dogra 71; NGMPP-Card E385/15
- ☐ Ajātaśatrudamanāvadāna [Newārī, as a part of Aṣṭamīvrata ?] Takaoka A53B; NGM-
- ☐ PP-Card E1291/10
- ☐ Ajātasatvarājadamanāvadāna [Newārī, as a part of Aṣṭamīvrata]: NGMPP-Card E282/
- ☐ 12, E356/2

☐ 8. Sambhadrāvadānamālā

- ☐ Sambhadrāvadānamālā の写本は、東大にある 1 写本 (Matsunami 429) しか知られていない。
- ☐ 全40章から成るが、Bhadrakalpāvadāna と類似する章名がかなり有る。40章の章名は Matsu-
- ☐ nami p.236-7 に記されている。この作品が、Bhadrakalpāvadāna から派生した別のリセensi
- ☐ ョンと見做し得るかどうかは未だ確かではない。
- ☐ Handurukande (1988) は、Sambhadrāvadānamālā の第40章 Bhagavat-supriyasārthavāhajan-
- ☐ māvadāna-parivarta が、Bhadrakalpāvadāna の第32章とテキストが同一であることを確認して
- ☐ いる。
- ☐ Skt.MS.: Matsunami 429

☐ 9. その他の Avadānamālā の写本

- ☐ 正体不明の avadānamālā の写本が一つ存する。それは、Avadānamālā という名で、BSP tr
- ☐ 642(1-28)にある写本で、464 葉から成り、46章を有している。この巨大な作品の大部分の章は、
- ☐ 目録に記された章名から判断する限りでは、いくつかの既知の avadāna 集成のあちこちの章や
- ☐ 単行の avadāna の寄せ集めであるように見える。雑纂集であろうか。

☐ C. その他の avadāna 集成

- ☐ ある程度共通した性格をもつ「avadānamālā 類」のグループの外にある、その他の性格の違
- ☐ う、複数の説話の集成である作品を、ここで「その他の avadāna 集成」として扱う。写本カタ

7

□ ログ類を整理して知り得た, avadānamālā 類以外の avadāna 集成として, 次の作品が挙げられる。

- 1. Dvāviṃśatyavadānakathā
- 2. Kapīśāvadāna
- 3. Maṇīśailamāhātmya
- 4. Sarvajñamitrāvadāna
- 5. Sugatāvadāna
- 6. Svayambhūpurāṇa
- 7. Vicitrakarṇikāvadāna

□ これらの作品には, avadānamālā 類が形成を終えた後の時代に成立したものがかなり含まれている。Dvāviṃśatyavadānakathā [Dvāv.] を研究した R. L. Turner は, Dvāv. の作者が用いた Avadānaśataka の写本は, Speyer 校訂本の D 写本が所属している写本系統であると指摘した。この D 写本は B 写本からの派生本であるが, B 写本は西暦1645年の筆写である。従って, も□ し Turner のいう通りならば, Dvāv. の成立年代はそれ以前ではありえない。Turner はまた□ Dvāv. に言語的な特徴が最も近いのは Vicitrakarṇikāvadāna であるとする。すると Vicitrakar-□ ṇikāvadāna も同じ頃の成立ではないかと思われる。また Svayambhūpurāṇa も, Yakṣamalla□ 王 (1428-1480) の名前が広本 (Vṛhat-Svayambhūpurāṇa) の第8章に出てくることから, 16世□ 紀以降の成立と推測される。

□ 以上の作品の他に, avadāna の集成ではなく, jātakamālā を集成した写本として,

- a. Avadānasārasamuccaya
- b. Bodhisattvajātakāvadānamālā
- c. Jātakamālāvadānasūtra

□ の3種の写本があるが, これらについては本書第4章 §2 「Jātakamālā 文学」の, 「Haribhaṭṭa□ の Jātakamālā」の節で触れたので, ここでは扱わない。

□ なお, 奇妙な作品名の写本として, Takaoka A33に,

□ Śākyamuni-buddhasya Pūrvajanma-dvātriṃśaj-jātaka

□ という1写本があるが, この写本については, 「(付)Śākyamuni-buddhasya Pūrvajanma-dvātri-□ ṃśaj-jātaka」としてこの節の最後で報告したい。

- 1. Dvāviṃśatyavadānakathā

□ Dvāviṃśatyavadānakathā [Dvāv.] は, B. H. Hodgson がカトゥマンドゥから世界各地に送

- ったネパール写本によって研究が始められた。
- まず, Avadānaśataka の研究において Feer (1879), (1891)¹⁰⁹⁾ は, Dvāv. のバリ写本が有する 24
- 章の各章の名前を報告し, その散文部分における密接な Avadānaśataka との関係を指摘した。
- また Feer (1883)¹¹⁰⁾ は『カンジュルからの抜粋断片集』において, Dvāv. の第 17 章 Ujjvalikadāna-
- kathā を梵本から仏訳した。
- R. Mitra (1882) の SBLN は, カルカッタにある Dvāv. の異本の 1 写本の内容を報告した。¹¹¹⁾
- S. Lévi (1899)¹¹²⁾ は Dvāv. の各章をしめくくる詩節を集めた作品として, Subhāṣitaratna-
- karaṇḍakakathā [SRKK] という作品があることを初めて指摘した。
- Turner (1913)¹¹³⁾ は Dvāv. の言語的な研究を行い, 梵文の俗語的な特徴に注目した。
- J. Brough (1954)¹¹⁴⁾ は Dvāv. の言語的特徴を, 仏教梵語の段階的な言語的変遷の上に位置づけ
- た。
- SRKK の校訂を最初に行った Zimmermann (1975)¹¹⁵⁾ は, Dvāv. が SRKK から夥しい数の詩節
- を全体にわたって借用することによって作られていることを明らかにした。彼は Dvāv. のバリ
- 写本(Pa)とケンブリッジ写本(Ca)の 2 写本を詳細に調べて, 両本が借用している SRKK の詩
- 節の数の相違を報告した。
- Dvāv. は全体の構成・枠組みを SRKK に負っている。Dvāv. の各章の章名は, 他の説話集成
- と違って主人公の名前ではなく, 福德のある布施の行いをモットーのごとく挙げたものである
- が, それらの章名はほとんどが SRKK と一致する。SRKK の章立てを守り, 出来るだけ多く
- の詩節を借用するという前提条件の下に, SRKK の趣旨を敷衍するための教訓的な例話となる
- ような, Avadānaśataka 等から材料を取った多くの説話を, SRKK の枠組みの中に詰め込むこ
- とによって, Dvāv. という特異な説話集が出来たと思われる。「22アヴァダーナ」という表題は,
- SRKK が 22 の布施のテーマを挙げていることから名付けられた。
- 岡田真美子は M. Hahn の指導のもとに, 22 の写本に基づいて Dvāv. の原典批判的校訂を終
- え, 1985 年に博士論文として Bonn 大学に提出した。彼女の校訂・研究は 1993 年に Indica et
- Tibetica シリーズから出版される予定である。
- 岡田 (1990)¹¹⁶⁾ は Dvāv. の中で未比定のまま残されている説話を紹介した。

- Skt. MSS.: Filliozat 60[→Pa]; Bendall Add.1274[→Ca], 1327, 1615(II)[7 fols.]; Cowell・
- Eggeling 27; Matsunami 29(IV~XXVII)¹¹⁷⁾, 180, 181, 182, 183-I; Goshima・Noguchi 54,
- 55; Bir 83; Takaoka A54; IASWR MBB-I-98; BSP tr 241(1-322)=NGMPP-Card A
- 121/2; Durbar p.163=NGMPP B96/17[10 chs.]; NGMPP-Card A120/4, A922/6(=pra
- 1123), C17/2, D46/11, D59/5, E1480/5, E2058/9, E2085/3, E2572/12, H318/41

□ Another version of Dvāv.: SBLN p.85

□ MSS. of Parts:

- Puṇyotsāhanakathā [Ch.1 or Ch.24]: IASWR MBB-II-169 (未同定)
- Dhātvarōpanakathā [Ch.10]: Matsunami 320-II
- Dipadānakathā [Ch.18]: Matsunami 170 [Divyāvadāna, Ch.12]
- Dvāviṃśatikā(avadāna): NGMPP-Card D69/8
- Sarvādanānpajātaka('from Dvāviṃśatyavadānakathā'): NGMPP-Card D51/13
- Surūpo nāma nṛpajātaka : NGMPP-Card D51/10

□ 2. Kāpīśāvadāna, Kavitāvadāna

- Leo Both (1992) ¹¹⁸⁾によれば, 9章から成るリセンションの Kāpīśāvadāna と, 18章から成る
- リセンションの Kavitāvadāna がある。後者は前者を詩的に書き直して拡大した版である。Ka-
- pīśāvadāna は1400年以降の成立と見なされる。Kāpīśāvadāna から後代に派生した版として,
- Kavitāvadāna の他に, Piṇḍapātrāvadāna[kathā]がある。Kāpīśāvadāna と Piṇḍapātrāvadāna
- は, Leo Both (1992) の博士論文によって, テキスト校訂と独訳がなされた。
- R. Handurukande (1976) ¹¹⁷⁾は, 18章本の第17章 Somāvāśivratamanicūḍamāhātmyanirdeśava-
- rṇana を, Matsunami 75 の1写本に基づいて研究し, Manicūḍāvadāna の散文版があちこちに
- 逐字的に借用されていることを指摘し, 作者の付加した箇所テキストを特に拾い上げた。

□ Skt.MSS. :

- (a) [9章本] Matsunami 76[9 chs.], 77[9 chs.]; Goshima・Noguchi 13[9 chs.]; Iwamoto
- 6[9 chs.]; Bendall Add.1345[9 chs.], 1537[9 chs.]; Winternitz・Keith 1449-140[10 chs.];
- Filliozat 21[9 chs.]; Bir 117; Durbar p.159=NGMPP-Card A119/7=BSP tr290(1-123)
- [9 chs.]; BSP tr594(1-124)=NGMPP-Card A119/9; BSP pra1367(1-125)=NGMPP-Card
- B96/6; SBLN p.100=ASB p.245; Velankar 2 [10 chs.]; NGMPP-Card A119/2(=ca219
- 2)[Newārī], A119/8(=ca2524), D50/9[Newārī], E1483/1, E708/12[Newārī]
- (b) [18章本] Matsunami 75[18 chs.]; IASWR MBB-I-55[9 chs.(the first half)]; Takao-
- ka A77[130 fols.] ¹²⁰⁾; BSP tr671(1-132)=NGMPP-Card B96/4[18 chs.]; NGMPP-Card
- D45/2[130 fols.], E1259/3[168 fols.], E1267/18, E1293/2[130 fols.], E1848/8, H398/4
- (c) [系統不明] NGMPP-Card A918/4(=pa15)[13 chs.]

□ MSS. of Parts:

- ☐ Yugādiprasiddha(punya)varṇana [Ch.18]: Matsunami 171, fols.311-314; NGMPP-Card E2060/3
- ☐ Kapiśāvadāne Puṣyaphalavarṇana [Ch.10]: Takaoka CA12-3; NGMPP-Card E2214/8
- ☐ Kapiśāvadāne Sarvānandakathā [Newārī]: Takaoka A28A

☐ 3. Mañisailamāhātmya (Mañisailāvadāna)

- ☐ Mañisailamāhātmya は、R. Handurukande (1976) によって京大写本 (Goshima・Noguchi 80)¹²¹⁾ が調べられ、内容が簡単に報告された。アショーカ王が Prajñāpāramitā, Ādiśakti, Ugratārā, Tārā, Vajradevī についての説法を聞くことを望み、ウバグブタ長老が語るというのが、この作品の設定である。第8章以降には、あちこちに Mañicūḍāvadāna の散文版が逐字的に借用されている。Handurukande は特に Mañisailamāhātmyā の作者が付加した箇所テキストをピックアップした。
- ☐ なお Handurukande が調べた京大写本は13章 (pariccheda) の途中で切れており、完本ではない。ネパールの National Archives にある写本は、16章から成り、完本と思われる。

- ☐ Skt.MSS.: Goshima・Noguchi 80[12 chs., 58 fols.]; BSP ca129(2-148)=NGMPP-Card A919
- ☐ /12 [16 chs., 65 fols.]; Bir 156 [Nepalese samvat 777=A.D.1657]; NGMPP-Card B98
- ☐ /3(=ca1495)[85 fols.], E415/3[83 fols.]

☐ 4. Sarvajñamitrāvadāna (Sarvajñamitrāpādāvadāna)

- ☐ 8章以上から構成される作品であるが、現存する写本はすべて、第8章のはじめで切れており、完本は見つかっていない。
- ☐ Sarvajñamitrāvadāna は、1種類ではなく、異なるリセンションがあるようである。¹²²⁾
- ☐ M. Hahn (1982)¹²³⁾ は、Sarvajñamitrāvadāna の第4章の主な部分が、Subhāṣitaratnakaraṇḍa-kakathā から77の詩節を借用することによって作られていることを報告した。

☐ Skt.MSS.:

- ☐ (a) Sarvajñamitrāvadāna: Matsunami 432[Ch.1~Ch.4], 433[Ch.1~Ch.7, head of Ch.8]¹²⁴⁾,
- ☐ 434[Ch.1~Ch.7, head of Ch.8]; Nagao p.14[95 fols.]; BSP tr597(3-160)[Ch.1~Ch.7]
- ☐ =Bir 223=NGMPP-Card A125/2=A1333/11; NGMPP-Card A125/3(=ca1513), B101/

1
c

- 5(=pa50), C18/6, E1250/7, H142/5
- (b) Sarvajñamitrāpādāvadāna: Iwamoto 21[Ch.1~Ch.7]
- MSS. of Parts:
- Śrīghanasya pūrvān sūtalakṣaityasyopadeśakṛtamāhātmya [Ch.2]: Matsunami 397
- Lakṣaityabimbakathā [Ch.3]¹²⁵: Matsunami 321
- Sarvajñamitrāvadānakathāyāṃ dvitīya. Sarvajñamitrāvadāne viharādicaityasthāpano nāma
- tṛtīya [=parts of another recension]: Matsunami 431
- Sarvajñamitrāvadāne śṛṅgabherīkathā [Ch. 6]: NGMPP-Card E1354/10

□ 5. Sugatāvadāna

□ Indraprṣṭha 王が Vasubandhu という過去の菩薩より、福德の積み方についての説法を受け
 11て、寺院の設立等の行いを実践する物語であり、12章から成る韻文の作品である。写本は50葉前
 12後の規模である。内容梗概は SBLN p.233-4 にある。

- Skt.MSS.: Filliozat 154; Bendall Add. 1273, 1377; SBLN p.233; Goshima・Noguchi 124;
- Cowell・Eggeling 12; Matsunami 473, 474, 475; Iwamoto 19; BSP tr.592(3-177)=Bir 246
- =NGMPP-Card A125/1[palm-leaf]; IASWR MBB-I-56; Nagao p.14; Takaoka CA12-1,
- DH317, KA15-3; NGMPP-Card A125/5(=pa67), A125/9(=pa72), A125/10(=pa68),
- A126/6(=ca1484), B102/5(=pa235), C43/2, D11/5, D15/5, D75/37, E416/11, E699/
- 14, E1848/1, H107/5, H380/7
- Divyāvadānamālā: Filliozat 56-57 [Ch.21~Ch.30=Sugatāv. Ch.1~Ch.9, Ch.12]
- Sugatāvadānakathā-mahāyānasūtrādi-saṅgraha: NGMPP-Card A 875/8=A 126/4(=ca 13
- 81)[398 fols.]
- MS. of Part:
- Sugatāvadānoddhṛta-saptabuddhastotra: Takaoka DH227

□ 6. Svayambhūpurāṇa

□ (Gośṛṅgaparvate Svayambhūcaityabhaṭṭārakoddeśa)

□ Svayambhūpurāṇa は、カトゥマンドゥにあるスヴァヤンブーナート寺院の縁起物語を韻文で
 13綴った作品である。大小いくつかの種類があるが、内容は変わらない。内容の詳細は Hodgson

□¹²⁶⁾(1874), R. Mitra (1882), H. Śāstrī (1894)¹²⁷⁾等から知られる。

□ Matsunami p.239-240は, Svayambhūpurāṇa の多くの東大写本を以下の四つのグループに分けています。

4 グループ1とグループ2は, 共に8章から成る。章名は第1章の名称だけが両者で異なる(グループ1は Dharmadhātu-kālī-hrada-samutpanna-kathā, グループ2は tad-uddeśa)が, 他の章名はほぼ同じである。両者を区別する決め手は作品の規模である。グループ1は写本では150〜200葉前後であるが, グループ2は20〜30葉前後の規模である。

□ Matsunami p.239 が記するグループ1の章名は次の通り:

- 1. (Śrī-)Dharmadhātukālihradasamutpannakathā
- 2. Pūjāphalavarṇana
- 3. Chandotpāda
- 4. Grāmādisamudbhava
- 5. Tīrthopatīrthapīṭhaṃ ca nirūpaṇe guṇavarṇana
- 6. Dharmadhātuvāgīśvarapravartana
- 7. Dharmadhātuvāgīśvaragupta
- 8. Mahāprabhāvavarṇana

17 グループ3は全10章から成り, 章名はグループ1・2のものと本質的に同じ意味であることが多いが, 語句的には大きく違っている。作品の規模は90葉前後である。

□ Matsunami p.240 が記するグループ3の章名は次の通り:

- 1. Svayambhūdharmadhātuṣamutpattinidānakathā
- 2. Svayambhūcaityabhaṭṭārakotpattyādeśaḥ Pūjāphalavarṇana
- 3. Svayambhūtpattisamuddēse Mahāhradaśoṣaṇa-padmagirikīrtti
- 4. Svayambhūcaityasamutpatti-kathā Vītarāgatīrtharāṣṭrapravartana
- 5. Svayambhūcaityasamutpatti-Anekatīrthapuṇyamāhātmyavarṇana
- 6. Svayambhūtpattye Dharmadhātuvāgīśvarābhīdhānaprasiddhapravartana
- 7. Svayambhūdharmadhātuvāgīśvaro Guptikṛtapravartana
- 8. Svayambhūcaityāśramanāgasādhanaśuvṛṣṭikarṇa
- 9. Śrīmanmahācaryāśāntikaragūṇasamsiddhimāhātmyānubhāvaprakathanapravṛtta
- 10. Dharmadhātusvayambhūtpattimāhātmyasubhāṣita-sūtra

□ グループ4は全8章から成り, グループ2の異本かと思われる。Matsunami 459の1写本だけが報告されている。章名はグループ1・2のそれに近いが, 厳密には幾つかの章名において, 若干の語句の違いが見られる。作品の規模はグループ2と同じように小さく, Matsunami 459

□では34葉である。

□ Matsunami p.240 が記するグループ4の章名は次の通り：

- 1. Svayambhūcaityabhaṭṭāarakoddeśe Taduddeśa
- 2. Svayambhū° Pūjāphalavarṇana
- 3. Śrigośṛṅgaparvate Svayambhū° Upachandohaprakāśa
- 4. Śrigo° Grāmanaga(!)pravartana
- 5. Śrigo° Tīrthavarṇana
- 6. Śrigo° Dharmadhātuvāgīśvarasamjñāpravartana
- 7. Śrigo° Dharmadhātuvāgīśvaragupta
- 8. Śrigo° Svayambhū° Nepālaviṣayamahāprabhāva

11 もし便宜的に、大本と中本と小本の3区分に分けるならば、グループ1は大本、グループ3は
12 中本、グループ2と4は小本の系統にあたる。

13 このほか、Bendall カタログは、Add. 870での解説において、Svayambhūpurāṇa を次の4種
14 に分けている：

- 15 (1) Vṛhat-Svayambhūpurāṇa
- 16 (2) Mahat-Svayambhūpurāṇa
- 17 (3) Madhyama-Svayambhūpurāṇa
- 18 (4) the Smallest

19 (1)と(2)と(4)は、章名が共によく一致する八つの章をもつが、(3)は、章名がやや異なる10章をも
20 つ。(2)の Mahat-Svayambhūpurāṇa は、(1)の Vṛhat-Svayambhūpurāṇa から派生した異本にす
21 ぎないようであり、本来は同一の系統とみなしうる。

22 Bendall の Add.870が記する Vṛhat-Svayambhūpurāṇa の章名は、Matsunami のグループ1
23 と大同小異であり、次の通りである：

- 24 1. Śrīdharmadhātukālīhradasamutpannakathā
- 25 2. Pūjāphalavarṇana
- 26 3. Svayambhūtyaktikathā
- 27 4. Vitarāgatīrtharāṣṭrapravartana
- 28 5. Tīrthopatīrthapīthopapīthanirūpaṇa
- 29 6. Dharmadhātuvāgīśvarappravartana
- 30 7. Dharmadhātuvāgīśvaragupta
- 31 8. Mahāprabhāvavarṇana

32 Matsunami のいう四つのグループと、Bendall のいう4種類の写本とは、うまく重なり合わ

□ないが、グループ3は(3)Madhyama-Svayambhūpurāṇa にあたるのは確かと思われる。もしも
 □Bendall のあげる4種類を、大本と中本と小本の3区分の中に再分類するならば、(1)と(2)は大
 □本、(3)は中本、(4)は小本の系統にあたる。Matsunami の分類によって、小本の系統には少なく
 □とも2種の異本があり、また Bendall の分類によって、大本の系統には少なくとも2種の異本
 □(Vṛhat- と Mahat-) があることが判明した。

□このほか、S. Lévi (1905)¹²⁹⁾ の古典的名著『ネパール』の報告から、全12章から成るリセンシ
 □ョンも存在することが知られる。この12章本の写本は Filliozat 160にあたり、その他にも、BSP
 □カタログ ca784(3-215) の記載から、カトゥマンドゥにも写本が存在していることが知られる。

□この12章本は、先の大・中・小のリセンシジョンのどれとも違った別系統のリセンシジョンである。

□S. Lévi によれば、他の4種のリセンシジョン(10章本、Vṛhat- と Mahat- の8章本、小本)に

□比べて、この12章本は、正確さと作品の出来の観点からみて、最もすぐれているという。

□S. Lévi (1905) p.208-9 が記する12章本の章名は次の通り(カッコ内に Lévi が調べた Vṛhat-
 □Svayambhūpurāṇa [Vṛ.-s.] の対応する章を示す)：

- 1. Śrījyotīrūpasvayamutpannasya svayambhūmahātmyavarṇana (=Vṛ.-S., IとII)
- 2. Dhanādaharudagopucchaguhyeśvarīprakāśamañjuśrīcaityanirmita (=Vṛ.-S., III)
- 3. Krakutsandābhigamanabhikṣucaryācaraṇa Vāgmatikeśavatīprabhāva (=Vṛ.-S., IV)
- 4. Mañicūdataḍḍāgādīmakāradaśasambhava (=Vṛ.-S., IVの続き)
- 5. Vitarāgasamutpattikathana (=Vṛ.-S., IVの終わり)
- 6. Puṇyatīrthādīdvādaśatīrthavarṇana (=Vṛ.-S., V)
- 7. Upatīrthamātrkāpīṭhaśmaśānavarṇana (=Vṛ.-S., V)
- 8. Śrīdharmadhātuvāgīśvaramaṇḍalābhīdhānapravartana (=Vṛ.-S., VI)
- 9. Pracāṇḍadevabhikṣucaryājyotīrūpaguptīkaraṇa (=Vṛ.-S., VII)
- 10. Nāgāsādhanaḍḍurabhikṣādisānti Śāntikaravarṇana (=Vṛ.-S., VIII)
- 11. Pūjāphalavarṇana (=Vṛ.-S., VIIIの続き)
- 12. Aśokatīrthayātrāphalastutikathana

□Svayambhūpurāṇa のテキストの公刊は、Filliozat 160の写本に基づく12章本の、第10章のテ

□キストが Poussin (1893)¹³⁰⁾ によって出された。また Vṛhat-Svayambhūpurāṇa の全部のテキスト

□が、H. Śāstrī (1894-1900)¹³¹⁾ によって出版された。

□翻訳は、氏家 (1932)¹²⁸⁾ によって、中本(10章本)の第1～3章が和訳された。

□研究としては、Poussin (1894)¹³³⁾ が、12章本(Filliozat 160)の第4章の Mañicūda 説話につい

□て、初めてその系統上の独自性を指摘し、内容を紹介した。この Svayambhūpurāṇa 中の、韻

□文で出来た Mañicūda 説話には、第78偈と79偈の間に、別系統の散文で書かれた Mañicūda 説

□話が挿入されている。Handurukande (1967)¹³⁴⁾ は、その12章本の第4章のテキストを、Filliozat
 □160の1写本のみに基づいて校訂し、Divyāvadānamālā 中の散文の Maṇicūdāvadāna のテキス
 □トと一緒に、出版した。

□このほか、Poussin (1895)¹³⁵⁾ の、Svayambhūpurāṇa 中の Śroṇakoṭikarṇa 説話を扱った研究が
 □あるようであるが、筆者未見である。最近では氏家 (1974)¹³⁶⁾ の、Svayambhūpurāṇa に見られる
 □信仰形態を論じた研究がある。

□今後の原典研究においては、各リセンションの批判的な比較によって、Svayambhūpurāṇa の
 □「原型」が再現され、各リセンションへの分岐の段階が明らかにされることが期待される。

□Skt.MSS.:

□(a) [大本の系統]

- 1 Svayambhūcaityabhaṭṭāarakoddeśa (Group 1): Matsunami 490[16 fols. (head part)]
- 12 (Bṛhat-)Svayambhūcaityabhaṭṭāarakoddeśa (Group 1): Matsunami 491[156 fols.], 492[249
 □13 fols.], 493[210 fols.]; NGMPP-Card A922/9-923/1(=pa34), C112/3[244 fols.], E1
 □14 293/8-1294/1[248 fols.]
- 15 Svayambhūcaityabhaṭṭāarakoddeśa (=large redaction): SBLN p.249 [8 chs., 163 fols.];
 □16 Filliozat 161[8 chs., 163 fols.]; ASB p.257; Takaoka CA34-1[149 fols.]; CH482[120
 □17 fols.]
- 18 Svayambhūpurāṇa (=large redaction): Takaoka CH15[254 fols.]; Nagao p.15, No.145
 □19 [141 fols.], 146[196 fols.]; NGMPP-Card E425/26[155 fols.]
- 20 V(B)ṛhat-Svayambhūpurāṇa: Bendall Add.870[8 chs., 225 fols.], 1468[132 fols.];
 □21 Śāstrī 116[147 fols.]; Bir[te241/3]; Takaoka A44[248 fols.]; IASWR MBB-II-12
 □22 [133 fols.]; NGMPP-Card E1792/16-1793/1[Samkṣepa, 70 fols.]
- 23 Mahat-Svayambhūpurāṇa: Cowell・Eggeling 18[8 chs., 173 fols.]

□(b) [小本の系統]

- 24 Svayambhūcaityabhaṭṭāarakoddeśa (Group 2): Matsunami 189-II[26 fols.], 201-37, 266-
 □25 II[9 fols.], 420-XVI-4, 494[20 fols.]; NGMPP-Card E1259/4[19 fols.], E1311/8[19
 □26 fols.], E1489/1[18 fols.], H20/14[20 fols.], H380/5[42 fols.]
- 27 Svayambhūcaityabhaṭṭāarakoddeśa (Group 4): Matsunami 495[34 fols.]; NGMPP-Card
 □28 E1134/2[9 fols.], E1372/19[38 fols.], E1732/2[18 fols.], E1847/14[36 fols.], H71/
 □29 10[25 fols.]
- 30 Svayambhūcaityabhaṭṭāarakoddeśe Nepālaviṣaya-mahāprabha (Group4?): Takaoka DH400

- [18 fols.]
- Svayambhūcaityabhāṭṭāarakoddeśa (=smallest redaction): Bendall Add. 871 [8 chs., 26 fols.], Add.1536[32 fols.]; Cowell • Eggeling 17[20 fols.]; Śāstrī 114[40 fols.], 115 [29 fols.]; Winternitz • Keith 1449-84[12 fols.]; Bir 257[te 653/1, pra 785/2]=NGMPP-Card B101/16(=tr653); IASWR MBB-II-14[18 fols.]; Takaoka DH6[36 fols.], DH 301[26 fols.]; BSP tr 593(3-205) [15 fols.], BSP pra 1336(3-206)=NGMPP-Card B104/7 [15 fols.], BSP pra1092(3-207)=NGMPP-Card A125/16[19 fols.], BSP tr785(3-208)=NGMPP-Card A127/6[26 fols.]; Winternitz • Keith 1430 -2; Thomas 7765-1[39 fols.]; NGMPP-Card B691/16[8 fols.], D12/7[25 fols.], D2 1/14[18 fols.], E210/15[25 fols.], E776/7[25 fols.], E2075/2
- Laghu-Svayambhūpurāṇa: Śāstrī 113[39 fols.]
- (c) [中本(10章本)の系統]
- Svayambhūpurāṇa (Group 3): Matsunami 496[269 fols., Newārī commentary?], 497[97 fols.], 498[35 fols.], 499[88 fols.]; NGMPP-Card A923/4=A1330/13(=pa1840)[92 fols.], D 17/8-18/1, D 26/24[only Ch.1], E 442/9[107 fols.], E 887/7, E 904/7[35 fols.], E963/2[87 fols.], E1011/7, E1148/6[216 fols.], E1366/15-1367/1[107 fols.], E1376/1[115 fols.], E1475/3[133 fols.], E1724/6[100 fols.], E1740/2, E1940/38[111 fols.], E2072/4, H91/15, H94/8[169 fols.], H163/2, H201/7[157 fols.], H379/2[146 fols.], H395/9[271 fols.]
- Svayambhūpurāṇa (consisting of 10 chs.): SA 11[88 fols.]; Mironov 294; BSP ca951 (3-210)=NGMPP-Card A923/3[55 fols.], BSP ca341(3-211)=NGMPP-Card B 101/4[134 fols.]
- Madhyama-Svayambhūpurāṇa: Bendall Add. 1469 [153 fols., with vernacular trans.]; Cowell • Eggeling 23[10 chs., 107 fols.]
- (d) [12章本]
- Svayambhūpurāṇa (consisting of 12 chs.): BSP ca784(3-215)=NGMPP-Card B102/4 [258 fols.]¹³⁷⁾
- Svāyambhuva-mahāpurāṇa: Filliozat 160[152 fols.]; NGMPP-Card E1343/5-1344/1, E 1368/19-1369/1, E1382/6, E1792/16-1793/1, E692/2=Takaoka KA2[222 fols.], H 387/4
- (e) [系統不明のもの]
- Svayambhūpurāṇa: Bir 257[te245/1]=NGMPP-Card A229/6=A124/16(=tr245); Tho-

- 1 mas 7766; Takaoka CH84[18 fols., fragmentary], DH52[25 fols., fragmentary], KA
 2 31[107 fols.]; BSP ca1041(3-212)=NGMPP-Card A125/8[23 fols., fragmentary];
 3 BSP tr 241(3-216)=NGMPP-Card A124/15[93 fols.]; NGMPP-Card A334/8(=ca
 4 1391)[7 fols.], A858/2=A125/6(=ca1395)[159 fols.], A923/2(=pa284)[29 fols.],
 5 A1301/25(=pra1697), B101/2(=ca1375)[170 fols.], B102/2(=ca1512)[358 fols.],
 6 B102/3(=pa7659)[189 fols.], C15/2[151 fols.], C15/3[196 fols.], D25/17, D34/29
 7 [161 fols.], D36/2[141 fols.], D57/3[131 fols.], D64/19[72 fols.], E1/1[248 fols.],
 8 E13/2[198 fols.], E127/2[23 fols.], E127/14[16 fols.], E196/5, E2571/20[17 fols.],
 9 H52/4-53/1[Newārī ?], H327/31[123 fols.]
- 10 (f) [部分の写本, その他]
- 11 Svayambhūtpattiyupadeśa: NGMPP-Card A125/7(=pa7776)[100 fols.]
- 12 Svayambhūtpatti(dharma)māhātmya: NGMPP-Card A125/4(=pa7449), D13/1
- 13 Dharmadhātu-svayambhūtpattikathā: NGMPP-Card A120/3(=ca269)
- 14 Svayambhūsamutpattikathā: NGMPP-Card E236/8[179 fols.], E(?)301/6[153 fols.]
- 15 Svayambhūcaityasamutpattikathā-vaitarāgavirharā-pravarttamāro nāma caturthādhyāya:
 16 Takaoka DH291
- 17 Vītarāgāṣṭakakathā (from Svayambhūpurāṇa): BSP ca16(3-86), ca1031(3-87), tr651(3-
 18 88); NGMPP-Card E1483/10-1484/1, H47/7
- 19 Kīleśvara-vītarāgakathā: NGMPP-Card D45/6
- 20 Svayambhūpurāṇe Aṣṭavaitarāgakathā: NGMPP-Card E1076/16, H168/2
- 21 Svayambhūpurāṇe Vikrameśvara-vītarāgasya māhātmya: NGMPP-Card D35/11, D45/1
 22 2, E415/12, E415/15-416/1; Takaoka CA38-3
- 23 Svayambhūpurāṇa-maṇiṅga-svarakathā-saṃkṣipta: NGMPP-Card D45/5[8 fols.]
- 24 Svayambhūpurāṇoddhṛta-Nepālamaṇḍalakathā-saṃkṣepa: Thomas 7769
- 25 Svayambhū-dharmadhātu-vāgīśvara-lakṣacaitya-vratavidhi: Takaoka A128
- 26 Svayam(bhū)purāṇe Tīrthamahātmya [Newārī]: BSP ca948(3-213)=NGMPP-Card A
 27 128/3
- 28 Svayambhūpurāṇa-pāṭha: Takaoka CH442[141 fols.]
- 29 Laghu-Svayambhūpurāṇa-dharmadhātu-svayambhūtpatti-mahātmya: Takaoka CA3 [123
 30 fols.]
- 31 Gośṛṅgaparvata-māhātmya: IASWR MBB-II-235
- 32 (Svayambhūpurāṇe ?) Dvādaśatīrthamahātmya: NGMPP-Card D45/13, E404/22, E588/

- 8, E1256/26, E1363/2[Newārī], G59/18, G254/5, H61/10, H92/9, H99/15, H159/10, H161/2, H325/31
- Nepālātīrthamāhātmya: Takaoka A55; NGMPP-Card D7/16[Newārī], D57/7
- Puṇyatīrthagokarṇakathā: NGMPP-Card D35/13, H122/2, H192/7[Newārī]
- Puṇyatīrthamāhātmya: NGMPP-Card E415/1, E1256/19, H123/22
- Newārī version of Svayambhūpurāṇa: NGMPP-Card C27/7, C54/3, D48/3-49/1, D49/3, D49/5-50/1, E4/2, E126/12, E257/12, E298/35, E301/3, E356/5, E370/30, E377/12, E408/3, E454/4, E493/31, E627/2, E666/4, E708/14-709/1, E969/15, E1047/3, E1071/7, E1106/6, E1106/8, E1137/24, E1221/14, E1221/19, E1274/13-1275/1, E1311/6, E1312/5, E1357/12, E1408/11, E1408/12, E1449/24, E1519/2, E1704/1, E1704/2, E1742/3, E1743/3, E1744/2, E1768/7, E2215/2, G56/20, G141/10, G234/19, H132/1
- また, Svayambhūpurāṇa の stotra の写本がたくさん Takaoka や BSP や NGMPP-Card に載っているが, ここでは省略する。

7. Vicitrakarnikāvadāna

- Vicitrakarnikāvadāna [Vk.] は全32章から成る。¹³⁸⁾ 写本の多くは, 各章に章名を与えていない。
- 章名が記されている写本 (Matsunami 369) もあるが, 余白の部分に書き込まれているにすぎない。¹³⁹⁾ 元は章番号のみが記され, 章名は無かったと思われる。Speyer (1909) は, 完本たる Thomas 7798の写本に基づいて, 31の各章の梗概を報告した。
- Speyer によると, Vk. は文体は貧困で, 梵語は正確から程遠い。かなり後代の作品のようである。説話の編集の仕方も混乱している。様々なソースからの未消化なパッチワークの体を呈している。Vratāvadānamālā のような, 特定の vrata を称える説話がかなり入っているようである。
- Vk. の梵文テキストは未だ, 校訂されたものはない。¹⁴⁰⁾ 翻訳もなされていない。
- 研究としては, Jørgensen (1931) が9章から成る Vk. の Newārī 語のヴァージョンを, Bendall Add.1589の1写本に基づいて校訂し, 英訳を付して, Vicitrakarnikāvadānoddhṛta (Vk. からの抜粋篇) という作品名で出版した。¹⁴¹⁾
- 岩本 (1967) は東海大学の2本の写本 (Iwamoto 5, 13) を調べて, それらが Vk. に詩形改稿 (metrical paraphrase) を施したヴァージョンの一部であることを明らかにした。¹⁴²⁾

- Skt.MSS.: Iwamoto 12[32 chs.]; Thomas 7798[32 chs.]; Matsunami 369[Ch.16~Ch.32],
 □ 370[Ch.1~Ch.4, prose], 371[Ch.1~Ch.14, śloka], 372[Ch.18~Ch.24, prose], 373[Ch.1
 □ ~Ch.16, śloka]; Goshima・Noguchi 99[Ch.1~Ch.9]; BSP ca126(3-80)=NGMPP-Card
 □ A124/1[Ch.1~Ch.9]; BSP tṛ244(3-81)=NGMPP-Card A1327/6[Ch.1~Ch.20]; Bir 295;
 □ Nagao p.14[299 fols.]; Takaoka A43, A27, A108[Skt.+Nw.], CA20-1, CA32, CH374,
 □ DH91, KA32, JA5; NGMPP-Card A858/8=B100/9=B680/2[38 fols.], C13/11-14/1[299
 □ fols.], D19/17-20/1[380 fols.], D35/6, D53/3[192 fols.], D50/4[Skt.+Nw.], D59/4, D6
 □ 4/16, E7/6-8/1[336 fols.], E265/7, E378/7, E415/2[12 chs.], E425/25, E426/2[with
 □ Nw. ṭikā], E437/4[10 chs.], E651/1[274 fols.], E1036/4[59 fols.], E1256/12[170 fols.],
 □ E1292/15[49 fols., with Nw. ṭikā], E1354/8[41 fols.], E1354/9[37 fols.], E1354/13[107
 □ fols.], E1479/3[80 fols.], E1479/4[24 fols.], H65/11-66/1[271 fols.]
- MSS. of the metrical paraphrase of the Vk.: Iwamoto 5[52 fols., named "Vicitraratnamā-
 □ lā"], 13[158 fols., named "Vicitrakarṇikāvadāna"]
- Vicitraratnāvadāna: NGMPP-Card H379/9(Vicitraratnamālā と同じか?)
- MSS. of the Newārī version:
- Vicitrakarṇikāvadāna(-uddhṛta) [Newārī, often as a part of Aṣṭamīvrata]: Bendall
 □ Add.1589; Takaoka CH77[Ratnadhvajakathā], E1514/4[Ratnadhvajakathā], JN6G
 □ [Padyasyaṣarāvadāna]; NGMPP-Card CH16, D29/10-30/1, D50/3, E193/10, E193/
 □ 14, E258/7[Sūradarparājāmahimā], E258/8[Nidhanagrhaspati-avadāna], E315/4, E
 □ 364/13, E366/3[Nidhanagrhaspati-avadāna], E385/2[Vaśiṣṭha-kathā], E385/3, E385
 □ /4, E385/5[Vikramadattakathā], E385/12, E397/13, E708/13, E965/2, E965/3, E10
 □ 42/5, E1100/6, E1106/3, E1120/4, E1484/2, E1514/3, E1727/5-1728/1, E2332/7,
 □ H123/23-124/1, H142/2, H147/7[Ratnākaratathāgata-prasiddha-upadāna], H192/15
 □ [Vandhanāgarājā], H207/2
- MSS. of Parts:
- Vicitrakarṇikāvadāna trityā(!)dhyāya [Ch. 3]: Takaoka CH394
- Vicitrakarṇikāvadāna dvātriṃśatītamodhyāya [Ch. 32]: Takaoka CA20-2[58 fols.]
- Vicitrakarṇikāvadāneḥ mānāyām pañcamodhyāya [Newārī]: Takaoka CH92A
- Vicitrakarṇikāvadānakathāyām dvitīyo' dhyāya Vimadadattakathā [Skt.+Nw.]: NGM
 □ PP-Card H192/14

□(付) Śākyamuni-buddhasya Pūrvajanma-dvātriṃśaj-jātaka

□3 Takaoka A33の jātaaka 集の写本に、初めて注目したのは高木諄元(1982)¹⁴³⁾である。高木はこ
 □3の写本を作者不明の、32の本生話を集成した Śākyamuni-buddhasya Pūrvajanma-dvātriṃśaj-jā-
 □4takamālā という jātakamālā であると報告した。しかし高岡マイクロフィルム¹⁴⁴⁾に含まれる写本
 □3は、概ね個人蔵の新しい写本が多く、そこで突然未知の jātakamālā が発見されるというのは奇
 □4妙である。また jātakamālā は34章から成るものであり、32章の jātakamālā というのは、おか
 □7しい。作品名は高木の報告によれば、Dvātriṃśaj-jātakamālā であるが、筆者(岡野)がフィル
 □8ムを確かめたところ、Dvātriṃśaj-jātaka としか書いてなかった。各章のコロフォンには Śā-
 □9kyamuni-buddhasya pūrvajanma-dvātriṃśajjātaka-madhye……とあって、高木博士は -madhye
 □10の字を -mālā と誤読したと思われる。従って、この作品は jātakamālā の一つではない。

11 内容を見ると、この作品はネパールにおいて、いくつかの梵文アヴァダーナ集から、いくつか
 □12の章を丸ごと借用してくることで、パッチワーク的に編集された説話集¹⁴⁵⁾のようである。含まれる
 □13各章は、元は他のアヴァダーナ作品集に含まれていたものである。

14 この写本は完本ではなく、現存しているのは、第11章・14章・19～24章・27章・29～32章の、
 □15合計13章の部分である。マイクロフィルムに撮影された写本は、章の順序がばらばらになってお
 □16り、章の順番を並べ直す必要がある。各章の章の前の見出しあるいは章末コロフォンには、本来
 □17の章番号が記してある。また、それらの章が本来いかなる説話集に属していたのかの出典が各章
 □18のコロフォンには記されている。しかし、高木(1982)の報告書では、三つの章を除いて、それ
 □19らの出典の記述がなぜか見落とされてしまっている¹⁴⁵⁾ので、次に章末のコロフォンに記された各章
 □20のソースを記す：

- 21 第11章……Vratāvadānamālā の第2章, Kavikumārakathā
- 22 第14章……Bhadrakalpāvadāna の第28章, Maitrakāṃyaka nāma avadāna
- 23 第19章……Bhadrakalpāvadāna の第35章, Saudāsoddharaṇe Sutasomajātaka
- 24 第20章……Dvāviṃśatyavadānakathā の第16章, Praṇāmakathā
- 25 第21章……Dvāviṃśatyavadānakathā の第23章, Surūpo nāma nṛpajātakāvadāna-dāna-pa-
 □26 rivartta
- 27 第22章……Vratāvadānamālā の Caitryavratānuśaṃsā Suvarṇavarṇāvadāna [1]～[3]
- 28 第23章……Vratāvadānamālā の第4章, Śrīmad-Vāhananṛpajātaka
- 29 第24章……Suvarṇaprabhāsottamasūtra の第18章, Jalavāhana-matsyavaineṇya-parivartta
- 30 第27章……Suvarṇaprabhāsottamasūtra の第19章, Vyāghrī-parivartta
- 31 第29章……Bodhisattvāvadāna-vratāvadānamālā の第5章, Śenanṛpajātaka

- 3 第30章……Divyāvadāna の Viśvantara-kathā
- 3 第31章……Divyāvadāna の第18章, Maṇicūḍāvadāna
- 3 第32章……Śatakāvadāna の第32章 Dharmapāla-rājakumārajātakāvadāna
- 4 なお、マイクロフィルムでは、これら Dvātriṃśaj-jātaka の章の写本の中に、余計な三つの
- 3avadāna の写本が混じっている。上から10番目と11番目の章の間に、それら三つの写本が挟ま
- 4っている。それらは、Sugatāvadāna [69 fols.] と Sumanāvadāna [17 fols.] と Dharmarāja-
- 7dakṣinadvāra(?) -dhātutejāvadāna [22 fols.] である。

§Skt.MS.: Takaoka A33

三校

114印 1~9

第5章 第3節 註

梵語
仙典
の
研究
(了)

- [1] M. Hahn (1985) : *Der grosse Legendenkranz (Mahajātakamālā)*, Wiesbaden, S.15-16.
- [2] Eugène Burnouf (1844) : *Introduction à l'histoire du Bouddhisme indien*, Paris. ; 2nd ed., 1876.
- [3] Rajendralala Mitra (1882) : *The Sanskrit Buddhist Literature of Nepal*, Calcutta.
- [4] Sarat Chandra Dās & Hari Mohan Vidyābhūṣaṇa (1888-1917) : *Avadāna Kalpalatā, A Collection of Legendary Stories about the Bodhisattvas by Kṣhemendra, with its Tibetan Version called Rtogs brjod dpag bsam ḥkhri Śiṅ by Śōnton Lochāva and Paṇḍita Lakṣmīkara. Now first edited from a xylograph of Lhasa and Sanskrit manuscripts of Nepal*, 2 vols., (Bibliotheca Indica), Calcutta.
- [5] P. L. Vaidya (1959) : *Avadānakalpalatā*, (Buddhist Sanskrit Texts, 22, 23), Darbhanga, 2 vols.
- [6] 岩本裕 (1968) : 『スマーガダー・アヴァダーナ研究』, 法蔵館。[新版 : 開明書院, 1979年]
- [7] Markus Görtz (1993) : *Die Legende von Sumāgadhā. Bearbeitung und Übersetzung von zwei indischen und einer tibetischen Fassung*, Marburg 1993, 240pp. Typoskript. (Magisterarbeit)
- [8] Kabita Das Gupta (1978) : *Viśvantarāvadāna. Eine buddhistische Legende. Edition eines Textes auf Sanskrit und auf Tibetisch. Eingeleitet und übersetzt*, Inauguraldissertation, Berlin.
- [9] J. W. de Jong (1977) : *The Bodhisattvāvadānakalpalatā and the Śāḍdantāvadāna, Buddhist Thought and Asian Civilisation. Essays in Honor of Herbert V. Guenther on His Sixtieth Birthday*, Emeryville, Cal., pp.27-38.
- [10] J. W. de Jong (1979a) : *The Sanskrit Text of the Śāḍdantāvadāna, Indologica Taurinensia*, Vol.VII, pp.281-297.
- [11] J. W. de Jong (1979b) : *Textcritical Remarks on the Bodhisattvāvadānakalpalatā (Pallavas 42-108)*, [Studia Philologica Buddhica, Monograph Series, II], Tokyo.
- [12] Paul M. Williams (1981) : *JRAS*, 1981, pp.91-92.
- [13] Marek Mejer (1992) : *Kṣhemendra's Bodhisattvāvadānakalpalatā. Studies and Materials*. Tokyo, The International Institut for Buddhist Studies (Studia Philologica Buddhica, Monograph Series, VIII).
- [14] Vidhushekhara Bhattacharya (1939) : *Bhōṭaparakāśa. A Tibetan Chrestomathy with introduction, skeleton grammar, notes, texts and vocabularies*, Calcutta.
- [15] The Journal of the Buddhist Text Society of India, Vol. I~VII, 1893-1906. この雑誌がその後にも続いたかどうかは不明である。
- [16] Nobin Chandra Das (1895) : *Legends and Miracles of Buddha, Sakya Sinha. Part I. Translated from the Avadana Kalpalata of Bodhisattwas of the great Sanskrit poet Kshemendra*, Calcutta.
- [17] August Hermann Francke (1901) : *Ekasringa Prinz Einhorn. Aus dem Sanskrit des 65. Gesanges des Avadana Kalpalata des Kaschmir-Dichter Kshemendra*, übers., Leipzig.
- [18] Giuseppe Tucci (1949) : *Tibetan Painted Scrolls. An artistic and symbolic illustration of 172 tibetan paintings preceded by a survey of the historical, artistic, and religious development of tibetan culture with an article of P. Pelliot on a Mongol edict, the translation of historical documents and an appendix on prebuddhist ideas of Tibet*, 2 vols, Roma. v.Vol.II, pp.437-534.
- [19] S. Chandra Das (1965) : *Rtogs-brjod dpag-bsam ḥkhri-śiṅ gi snān-tshig gi rgyan lhug-par bkrol-pa mthoṅ-ba don-ldan shes-bya-ba*, New Delhi. この書は東北大学『西藏撰述仙典目録』の蔵外文献には入っていない。東北大学書架に存する : IV B/13/K16.

- [20] W. Zinkgräf (1940) : *Vom Divyāvadāna zur Avadānakalpalatā, ein Beitrag zur Geschichte eines Avadāna*, Heidelberg.
- [21] Matsunami pp.213-4 に基づいて、全27章の章名をあげておく : [1]Upaguptāsokarājāvadāna, [2]Upaguptāv., [3]Aśokadamanāv., [4]Aśokanṛpatipāṃsupradānāv., [5]Kuṇālāv., [6]Vītaśokāv., [7]Triratnabhajanānuśāṃsāv., [8]Caityavratānuśāṃsāv., [9]Bodhicaryāvatārānuśāṃsāv., [10]Ahorātravratācaityasevānuśāṃsāv., [11]Saptakumārikāv., [12]Bhavalubdhakāv., [13]Puṇyārāśyav., [14]Śreṣṭhīmahājanāv., [15]Divyānnapradānāv., [16]Valgusvarāv., [17]Jāṃvālāv., [18]Hamsāv., [19]Mallapatākāv., [20]Gargarasthāv., [21]Rāṣṭrapālāv., [22]Śakracyavanāv., [23]Puṇyāsenāv., [24]Bhavaśarmāv., [25]Madhurasvarāv., [26]Padmakāv., [27]Durgatipariśodhanadhāraṇīmaṇḍalaparivarta.
- [22] G. M. Bongard-Levin · O. F. Volkova (1963) : *Legenda o Kunale (Kuṇālāvadāna iz neopublikovannoj rukopisi Aśokāvadānamālā)*, Moskva.
- [23] J. W. de Jong (1965) : *IJJ*, Vol.VIII, pp.233-240.
- [24] Bongard-Levin · Volkova (1963-1965) : The Kunāla Legend and an Unpublished Aśokāvadānamālā Manuscript, *Indian Studies Past and Present*, Vol.V (1963), pp.113-132, 315-318, Vol.VI (1964-65), pp.67-70, 309-319. Bongard-Levin と Volkova はここで、Div.が Avadānakalpalatā から 1 詩節と半分を借用していることを発見した (Div. 417.22-27=A. Kalp. 59.160cd, 161)。現在の Div. は写本の伝承の途中で、11世紀~17世紀の間に、写本の筆写生あるいは編纂者によって改竄を受けたらしい。
- [25] W. Zinkgräf (1940) : *Vom Divyāvadāna zur Avadānakalpalatā*, (Materialien zur Kunde des Buddhismus 21), Heidelberg.
- [26] 岩本裕 (1967) : 『仏教説話研究序説』 (仏教説話研究第1), 法蔵館。[新版 開明書院 1978年]
- [27] R. Handurukande (1984) : *Five Buddhist Legends in the Campū Style, from a collection named Avadānasārasamuccaya*, (Indica et Tibetica, Bd.4), Bonn.
- [28] 奈良 (1988) : 『仏弟子と信徒の物語 —アヴァダーナー—』, 筑摩書房。
- [29] L. Feer (1891) : *Avadāna-ṣataka, Cent Légendes (bouddhique)*, (AMG 18), Paris. pp. XVIII, XXVI, 444.
- [30] Michael Hahn (1992) : *Haribatta and Gopadatta*. Tokyo, The International Institut for Buddhist Studies (Studia Philologica Buddhica, Occasional Paper Series, 1).
- [31] Bongard-Levin と Volkova が用いた Aś.-m. の Leningrad 写本が, Société Asiatique から S. d'Oldenburg に貸出されて紛失した写本である可能性がある。
- [32] Aś.-m. の Saptakumārikāvadāna (或いは Ahorātravratānuśāṃsā) については, Lobsang Dargyay: *Die Legende von den Sieben Prinzessinnen (Saptakumārikā-Avadāna)*, Wien, 1978, S.7-9を参照。
- [33] RatnaHandurukande (1988) : *The Supriyasārthavāhajātaka*, (Indica et Tibetica, Bd.15), Bonn.
- [34] M. Hahn (1985) : *Der grosse Legendenkranz (Mahājātakamālā)*, Wiesbaden. S.18による。
- [35] 『仏教説話大系 第23巻 世界のジャータカ (一)』すずき出版 1985年, 188-214, 224-241頁。
- [36] Oldenburg=Wenzel (1894) : Dr. Serge d'Oldenburg "On the Buddhist Jātakas" (tr. from Russian into English by H. Wenzel), *JRAS*, 1893, pp.331-334 ["Bhadrakalpāvadāna, Ch.34 (f.424v.-448v.)"]. S. d'Oldenburg は, Bh.-k. の第34章 Sutasomajātaka が Āryasūra の Jātakamālā の第31章からの芸の無い模倣であることを指摘した。
- [37] S. d'Oldenburg (1894) : *Buddijskija legendy. Čast'1 : Bhadrakalpāvadāna. Jātakamālā*, St.-Petersburg.

- [38] Kaikyoku Watanabe (1909) : The Story of Kalmāṣapāda and Its Evolution in Indian Literature, *JPTS*, 1909, pp.236-310.
- [39] T.R. Chopra (1966) : *The Kuśa-Jātaka. A Critical and Comparative Study*, Hamburg, 1966. p.25.
- [40] 岩本 (1967) の『序説』 p.168 は、「その [Bh.-k.] の成立は相当に後代で、[34] Sutasomajātaka を訳した S.d'Oldenburg に依れば、この文献 [Bh.-k.] は 11 世紀の Kṣemendra より後であるという。」と記し、註において「JRAS, 1893, p.331ff.」と典拠を示している。しかしこれは A.B. Keith や J.K. Nariman の文学史から引き継いだ誤解であって、典拠に直接あたっていたなら、S.d'Oldenburg はそのような事を一言も語っていないことがわかったはずである。
- [41] SA 7 の写本は、S.d'Oldenburg が 1900 年に借りたまま行方不明だが、Leningrad に現存する可能性はある。
- [42] 岩本が脚注に記すように、写本のコロフォンに 34 [章] のナンバーがあることから、この写本は明らかに Bh.-k. の一部である。
- [43] L. Feer (1879) : Le Livre des cent Légendes (Avadāna-ṣataka), *JA*, Juillet 1879, pp.141-189, et Oct.-Nov. pp.273-307.
- [44] L. Feer (1891) : *Avadāna-ṣataka, Cent légendes (bouddhiques), traduites du sanskrit*, (AMG, XVIII), Paris. [再版 : Amsterdam, 1979]
- [45] 次に Matsunami p.231 に基づいて、K.-dr. の全 30 章の章名をあげておく : [1] Sundarāvadāna, [2] Pūrṇabhadraṇ., [3] Sārthavāhāṇ., [4] Candanāṇ., [5] Bhṛtakapretikāṇ., [6] Kṛṣṇasarpāṇ., [7] Suvarṇābhakumārāṇ., [8] Suprabhāṇ., [9] Samudrāṇ., [10] Subhūtibrahmaṇāṇ., [11] Yaśomatyāṇ., [12] Kauravyajanaprabodhanāṇ., [13] Padmottarāṇ., [14] Mātsaryacaritrāṇ., [15] Candrāṇ., [16] Sugandhyāṇ., [17] Supriyāṇ., [18] Sumanāṇ., [19] Sthavirakāṇ., [20] Śrīmatyāṇ., [21] Tīrthikaprabodhanapratihāryāṇ., [22] Kūrmajanmāṇ., [23] Dharmapālāṇ., [24] Dharmabuddhinrpaṇ., [25] Śaddantāṇ., [26] Kavikumārāṇ., [27] Kṛtājñāṇ., [28] Ajātaśatruparidāpitāṇ., [29] Vasiṣṭhapariṣtopoṣadhāṇ., [30] Bhuktāṣṭamīvratapoṣadhāṇ.
- [46] なお Feer は遺稿として、K.-dr. と Ratnāvadānamālā [R.-m.] の、Avadāna-ṣataka と対応する話を翻訳したノートを遺し、それは現在 Bibl. Nationale に、Collection L. Feer, N° 12-13 として存在する。
- [47] J. S. Speyer (1909) : *Avadāna-ṣataka*, Vol.II, (Bib. Bud., III), St.-Petersbourg.
- [48] P. L. Vaidya (1958) : *Avadāna-ṣataka*, (Buddhist Sanskrit Texts, 19), Darbhanga.
- [49] J. W. de Jong (1979a) : The Sanskrit Text of the Śaddantāvadāna, *Indologica Taurinensia*, Vol. VII, pp.281-297.
- [50] L. Feer (1895) : Le Chaddanta-jātaka, *JA*, Janv.-Fév.1895, pp.31-85, Mai-Juin 1895, pp.189-223.
- [51] M. Walleser (1917) : *Die Streilosigkeit des Subhūti. Ein Beitrag zur buddhistischen Legendenentwicklung*, (Sitzungsberichte der Heidelberger Ak. der Wissenschaften, Philol.-hist. Kl. Jahrgang 1917, 13 Abteilung), Heidelberg.
- [52] 岩本 (1967) の『序説』は、K.-dr. が Vajrasūci を引用している事実、K.-dr. の成立時代の反カーストの思想動向が反映していると考え、Vajrasūci の作者馬鳴と、K.-dr. の成立との間に年代的に隔たりは考えられぬとして、K.-dr. の成立年代を西暦 3 世紀頃に置く。
- [53] 書名は Avadānaśaṅgraha であるが、各章名はすべて K.-dr. と一致している。
- [54] 他に、Takaoka DH410 と DH411 に、Dharmapālarājakathā という写本があるのにも注意される。

- [55] これらの、K.-dr.の一部であるかと思われる Upoṣadhāvadāna の写本の他に、さらに Goshima・Noguchi 10に、Upoṣadhāvadāna (Upoṣadho nāma devaputrotpatti-nāmāvadāna) という作品があるが、これは K.-dr.の29章である Vāsiṣṭaparipṛṣṭapoṣadhāvadāna (Goshima・Noguchi 97, 98) とは異なる作品であるらしいことが、目録に記されている。また Newarī 語のヴァージョンとしては Takaoka DH248の Upoṣadha kathā, Takaoka A30の Upoṣadha-devaputrakathā, Takaoka A53Lの Śākyamuni-bhaṭṭārakasya viracita Upoṣadha-devaputrakathāya vyākhyāna がある。
- [56] Bendall はこの写本が K.-dr.の第29, 30章にあたると記している。
- [57] M. Hahn (1985a) : *Der grosse Legendenkranz (Mahajjātakamālā). Eine mittelalterliche buddhistische Legendensammlung aus Nepal.* Nach Vorarbeiten von Gudrun Bühnemann und Michael Hahn, herausgegeben und eingeleitet von M. Hahn, (Asiatische Forschungen, Bd.88), Wiesbaden.
- [58] 第46章の直後の欠落には1章あるいは2章が含まれていたと推定されるため、現在の第47章は本来は第48章か第49章であったことになる。
- [59] ただし Hahn によれば、Bendall Add.1473の Śaśajātakāvadāna(16 fols.)が、M.-jm.の第47章と全く文面が同一であったかは疑わしい。
- [60] Sylvain Lévi (1912) : Une légende du Karuṇā-puṇḍarīka en langue tokharienne, *Festschrift W. Thomsen*, pp.155-165. [再録 : *Mémorial Sylvain Lévi*, 1937, pp.275-283] Lévi はここで何故か M.-jm.を Bṛhajjātakamālā と誤って呼んでいる。
- [61] Emmanuel Lang (1912) : La Mahajjātakamālā, *JA*, 10^e sér., 19, pp.511-550.
- [62] Ratna Handurukande (1976) : The Mañicūḍa Study, 『佛教研究』第5号, 309-168頁。
- [63] R. Handurukande (1984) : *Five Buddhist Legends in the Campū Style, from a collection named Avadānasārasamuccaya*, (Indica et Tibetica, Bd.4), Bonn.
- [64] また Takaoka KA36 に313葉の Vṛhajjātakamālā という写本があるが、M.-jm.と同一の作品であるかどうかは不明。
- [65] この写本は M.-jm.と文面が合致するが、M.-jm.の一部であったかどうかは不明。
- [66] 岩本裕 (1957) : Ratnāvadānamālā について —Ratnamālāvadāna. ed. K. TAKAHATA を見て一, 『東洋学報』39巻4号, 89-100頁。
- [67] Matsunami pp.215-6に基づいて、P本の34章の章名をあげておく : [Ch.1]Kauśikādyavīryotsāhanāv., [Ch.2]Snātāv., [Ch.3]Cakrāv., [Ch.4]Pretikāv., [Ch.5]Śālapuṣpāv., [Ch.6]Sūkarikāv., [Ch.7]Vapuṣmatkumārāv., [Ch.8]Devatāparipṛcchāsūtra, [9]Śuklāv., [Ch.10]Hiraṇyapāṇyav., [Ch.11]Hastakāv., [Ch.12]Sārthavāhāv., [Ch.13]Prasāntakarūṇāv., [Ch.14]Daśaśīrāv., [Ch.15]Pretikāv., [Ch.16]Kanakavarṇāv., [Ch.17]Vastrapradānāv., [Ch.18]Balavatīkumārāv., [Ch.19]Somāv., [Ch.20]Tripiṭāv., [Ch.21]Lekuñcīkāv., [Ch.22]Paṇḍitāv., [Ch.23]Hastakāv., [Ch.24]Sarvārthasiddhikūmārāv., [Ch.25]Nandāv., [Ch.26]Dhārāmukhavajrapāṇīgopālakalubdhakadamanāv., [Ch.27]Sthūpāv., [Ch.28]Nāgakumārāv., [Ch.29]Kārṣakasvastikabrāhmaṇāv., [Ch.30]Yaśorājāv., [Ch.31]Mahākāśyapāv., [32]Vidūrāv.(Sudhanāv.?), [33]Kāneyakāv., [34]Sūcandrāv.
- [68] IASWR のカタログは、MBB-II-17からII-42までに、27の Avadāna の作品名を列挙しているが、それらすべてが R.-m.という全体を形成していることに気付いていない。27の Avadāna は、そのままの順序で、R.-m.の第1~27章にあたる。
- [69] L. Feer (1879) : Le Livre des cent Légendes (Avadāna-ṣataka), *JA*, Juillet 1879, pp.141-189, et Oct.-Nov. pp.273-307.; L. Feer (1891) : *Avadānaṣataka, Cent légendes (bouddhiques), traduites du sanskrit*, (AMG, XVIII), Paris. [再版 : Amsterdam, 1979]
- [70] この理由によって、岩本 (1967) の『序説』は、岩本 (1957) の論文のそのままの再録ではなく、か

- 1 なりの部分を削り、また補っている。岩本自身はこの改稿の理由を明かしていないため、注意する必要がある。
- 2 要がある。
- 371) この点については、本書の「附篇 新写本 Subhāṣitamahārātnāvadānamālā の価値について」を参照。
- 372) Kanga Takahata (1954) : *Ratnamālāvadāna, A Garland of Precious Gems*, (Oriental Library Series D. Volume 3), The Toyo Bunko, Tokyo.
- 373) Anon., "Sanskrit Text. Ratnamālā", *JTBTSI*, Vol. I, Pt.4(1894), pp.[1]-[8].
- 374) Ratnāvadānatattva が R.-m.の続編である証拠に、Ratnāvadānatattva の写本のコロフォンに、
□ 3 iti ratnamālāyāp avadānatatve とある。
- 375) R. Handurukande (1984) : *Five Buddhist Legends in the Campū Style, from a collection named Avadānasārasamuccaya*, (Indica et Tibetica, Bd.4), Bonn.
- 376) Mahendra Lal Das (1894) : The Merchant's Wife. Translated from the Sanskrit Buddhist Work called Ratnamālā, *JBTSI*, Vol.II, Part III, pp.1-10.
- 377) 高島寛我 (1952) : 仏説嗟職毘法天子受三婦依獲免惡道經について、『小西・高島・前田三教授頌寿記念、東洋学論叢』、京都、9-22頁。
- 378) 奈良康明 (1988) : 『仏弟子と信徒の物語 アバダーナ』、筑摩書房。なお、奈良康明が監修した『仏教説話大系 第26巻 アバダーナ物語 (二)』(すずき出版、1985年)には、R.-m.から第4・7・10・12・17・18章が抄訳された。
- 379) 高島 (1955) : アバダーナに於ける大乘思想、『印仏研』3-2, 406-409頁。
- 380) 奈良 (1981) : 餓鬼(Preta)観變遷の一過程とその意味、『勝又記念論集』, 249-267頁。
- 381) 榎本文雄 (1983) : 『雑阿含』*Devatāsanyukta と Devatāsūtra の展開 —Ratnāvadānamālā 第八章の成立—、『印仏研』31-2, 399-396頁。
- 382) なお、Takaoka A57に、Pretakalpāvadāna という作品 (24 fols.)があるが、Pretikāvadāna の誤りである可能性もあろう。
- 383) さらに NGMPP-Card の H159/9の写本は、その写本カードを見ると、[Ratnamālā Avadāna]tattva と記されており、そのコロフォンは Ratnamālā sarthapati vadānam とあると記されている。
- 384) R.-tat.の写本であるか疑わしいが、この214葉の写本についても、筆者は中身を確認する機会を得ていない。
- 385) 高島によって、SBLN p.269 Vasundharāvratoṭpattyavadāna は R.-Tat.の第26章 Vasundharāvadāna と同一であることが確認されている (高島テキスト, p.vii を参照)。
- 386) Suvarṇavarṇāvadāna と Vr.-m.の関係を論じた論文として、Feer の論文があるようであるが、筆者は未見 : L. Feer : Suvarṇavarṇa-avadāna et Vratāvadānamālā, *Actes de XII^e congrès des Orientalistes*, Rome, 1899, pp.19-30.
- 387) Matsunami 82, 83, SBLN p.102, Dogra 216, Goshima・Noguchi 16, Takaoka A28F[Newārī], CA37-1, DH302[Newārī], ASB p.245など。
- 388) 例えば、第9章 Bhavaśarmāvadāna についての岩本 p.217 の説明によれば、vrata や aṣṭāṅga-upoṣadha の功德がその説話の中で説かれている。
- 389) Bendall Add.1401, BSP 1290(3-71), pra594(3-72), Bir 294, Takaoka CA14-2など。
- 390) Śṛṅgabherīkathā はまた Sarvajñamitrāvadāna の第4章でもある。
- 391) また Vr.-m.の冒頭の偈には、Śṛṅgabherīkathā に言及している箇所がある。岩本 (1967) の『序説』, 206頁, 註48を参照。
- 392) 岩本 (1967) の『序説』, 142-143頁を参照。

- [92] Sita Ram Roy (1971): *Suvarṇavarṇāvadāna*, (Historical Research Series, Vol.VII), K. P. Jayaswal Research Institute, Patna.
- [93] Tissa Rajapatirana (1974): *Suvarṇavarṇāvadāna, translated and edited together with its Tibetan translation, and the Lakṣaṇāyāsamutpatti*, A thesis submitted for the Degree of Doctor of Philosophy in the Australian National University, Canberra.
- [94] なお, Suvarṇavarṇāvadāna の邦文抄訳は『仏教説話大系 第26巻 アバダーナ物語 (二)』, すずき出版, 1985年, 258-306頁にある。
- [94] Gyōyū Tokiwai (1918): *The Sumāgadhāvadāna, a Buddhist Legend, now first edited from the Nepalese MS. in Paris*, Isshinden, 1918. この出版に先立って, Sumāgadhāvadāna 説話の比較研究を行った博士論文がある: Tsuru-matsu Tokiwai (1898): *Studien zum Sumāgadhāvadāna*, Inaugural-dissertation, Darmstadt.
- [95] Yutaka Iwamoto (1959): *The Sumāgadhāvadāna, a Buddhist Legend. Part 1: Revised Sanskrit Text*, Tokyo (『東海大学文学部紀要』第1号). 一緒に Avadānakalpalatā 第93章の校訂テキストも付けられている。
- [96] Y. Iwamoto (1964): *Die tibetische Version des Sumāgadhāvadāna*, *Acta Asiatica*, 7, S.1-19.
- [97] Y. Iwamoto (1968a): *Sumāgadhāvadāna, Eine buddhistische Legende in Sanskrit*. (Zwei Versionen des Sanskrittextes, mit der tibetischen Version und der vollständigen englischen Bearbeitung der vierten chinesischen Version, nebst der textgeschichtlichen Betrachtung.) neubearbeitet herausgegeben, Kyoto (Hozokan).
- [98] 岩本裕 (1968b): 『スマーガダー=アヴァダーナ研究』(仏教説話研究第5巻), 法蔵館。新版, 1979年, 開明書院。〈1979年の邦語版の付録である Sumāgadhāvadāna の梵文・チベット訳テキストは, 1968年のドイツ語版の同部分の改訂版である。〉
- [99] Markus Görtz (1993): *Die Legende von Sumāgadhā. Bearbeitung und Übersetzung von zwei indischen und einer tibetischen Fassung*, Marburg 1993, 240pp. Typoskript. (Magisterarbeit)
- [100] 写本は書名を欠いており, Sāṅkrtyāyana のカタログでは, "(Mahāyāna)Sūtra" という仮の書名が与えられている。
- [101] Filliozat の解説によれば, この作品は Aśokāvadānamālā の第10章 Ahorātravratācaityasevānuśamsāvadāna とは異なる作品であり, Cowell・Eggeling 71と同じ作品である。
- [102] 岩本 p.9によれば, Matsunami 83 (Kavikumārāvadāna) は, SBLN p.102 (Kavikumārakathā) と同一の本文であるが, Matsunami 82 (Kavikumārakathā) は同じ説話をテーマにしながら上記二者と本文を異にする。Matsunami 83 (Kavikumārāvadāna) は, Goshima・Noguchi 101 (Vr.-m.) の第6章 Kavikumārakathā, ならびに Goshima・Noguchi 16 (Kavikumārāvadāna) と一致する。従って, それらすべてと異なる Matsunami 82 (Kavikumārakathā) の写本は, Vr.-m. 第6章のヴァージョンではないことになる。ところが Matsunami 82の写本のコロフォンには, Matsunami 83と同じく, iti vratāvadānamālāyāṃ kavikumārakathā と記してある。伝承の誤りとみなすべきか, それとも Matsunami 82は Vr.-m. の異系の伝本であったとみなすべきか。
- [103] なお Goshima・Noguchi 95に (Aśvaghōṣabodhisattva-śrī-) Vasudhārākālpavratamāhātmyakathāna (95 fols.) という作品があるが, 岩本 (1967) p.199は Vasundharāvratakathāna とは別行の, 拡大増補された版ではないかと疑う。
- [104] Bir 291~294の4写本は, どれも Vasundharāvratakathā という作品名であるが, Vr.-m.に属することをコロフォンに記しているのは Bir 294だけである。
- [105] NGMPP-Card (Calalogue) の private collection の写本カードは, カードの見出しに詳細な(コ

- [1] ロフォンによる) 作品名を記さず簡単に Vasudhārāvratā と記してあるが、それらはここでは Vasudhārāvratākathā として扱うことにする。また、Vasudhārāvratā の一部のカードには、時々 Vasudhārāvratākathā (from Aśvaghōṣāvadāna) と記されており、Aśvaghōṣanandimukhākathā として分類すべきカードが中に混じってしまっているようである。
- [106] Citravimśatyavadāna に帰属する (Lakṣaṣaityavratā)-Śṛṅgabherīkathā の写本については、「単一の avadāna」の節の Citravimśatyavadāna の項を参照。
- [107] Sumāgadhāvadāna の写本の系統については、岩本『序説』第1章を参照。
- [108] Ratna Handurukande (1988) : *The Supriyasārthavāhajātaka*, (Indica et Tibetica, Bd.15), Bonn. p.10
- [109] L. Feer (1879) : Le Livre des cent Légendes (Avadāna-ṣataka), JA, Oct.-Nov. pp.293-297, 305-306.; L. Feer (1891) : *Avadānaṣataka*, (AMG, XVIII), Paris. pp.XIX-XX, XXVII.
- [110] L. Feer (1883) : *Fragments extraits du Kandjour*, (AMG, V), pp.544-552.
- [111] SBLN p.85 の作品名は、Dvāvimśa-avadāna となっており、別のヴァージョンかと思われる。その章名は、[1] Ratnavyūha, [2] Śāntamati, [3] Uttirṇa, [4] Kṣatriyarāja, [5] Dhātusteja, [6] Candraprabha, [7] Divyananda, [8] Pūrṇa, [9] Dvārikā, [10] Śukla, [11] Śreṣṭhikanyā, [12] Mātsaryayukta, [13] Vihāra, [14] Kuṣṭhi, [15] Surendradamana, [16] Suvarṇābha, [17] Vapuṣmataḥ, [18] Candana, [19] Surūpa と報告されている。このうち章名で他の Dvāv. と重なっているものは [13], [16], [17], [18], [19] だけである。
- [112] S. Lévi (1899) : Sur sa mission dans l'Inde et Japon, *Comptes rendus de l'Académie de Inscriptions et Belles Lettres*, Série IV, Tome XXVII, pp.71-92.
- [113] R. L. Turner (1913) : Notes on the Language of the Dvavimsatyavadanakatha, JRAS, 1913, pp.289-304. R. L. Turner は、Dvāv. の作者は Dvāv. を作るにあたって Avadānaṣataka の1系統の写本を使ったが、その写本は Speyer 校訂本でいう D 写本が所属している写本系統であると指摘した (p.289)。この D 写本は西暦1792年の筆写である。しかし、Dvāv. の Goshima・Noguchi 55の写本は西暦1795年の筆写であるから、Dvāv. は D 写本以後に成立したとは思えない。D 写本は B 写本からの派生本であるが、B 写本の筆写は西暦1645年の筆写である。従って、もし Turner のいう通りならば、Dvāv. の成立年代はそれ以前ではありえない。
- [114] J. Brough (1954) : The Language of the Buddhist Sanskrit Texts, BSOAS, XVI, pp.371-372.
- [115] H. Zimmermann (1975) : *Die Subhāṣita-ratna-karaṇḍaka-kathā (dem Āryaśūra zugeschrieben) und ihre tibetische Übersetzung*, (Freiburger Beiträge zur Indologie, Bd.8), Wiesbaden.
- [116] 岡田真美子 (1990) : Dvāvimśatyavadānakathā 中の未比定説話、『印仏研』39-1, 458-455頁。
- [117] Matsunami 29(IV~XXVII)の写本では Dvāv. の章の順序が、[13], [1], [16], [11], [14], [8], [10], [21], [5], [6], [4], [9], [12], [15], [17], [20], [22], [19], [18], [24], [7], [3], [2], [23] のように、並べ替えられている。
- [118] Leo Both (1992) : *Das Kapiśāvadāna und seine parallel version im Piṇḍapātrāvadāna*. Inauguralpissertation. Bonn.
- [119] R. Handurukande (1976) : The Maṇicūḍa Study, 『仏教研究』第5号, 285-273頁。
- [120] Takaoka A77は9章本と18章本のどちらに属するのか不明であるが、130 fols. と異常に葉数が多い。9章本であるなら、葉数はふつう30~40 fol. のはずである。註釈が付いているのであろうか。
- 40 なお、『仏教説話大系 23 世界のジャータカ (一)』(すずき出版 1985年) に、「サルバーナンド王の布施」というネパールの話があり、出典が「カビダーバダーナ 2・8」となっている。Kap. の中から採られた話らしく思われる。

8 1/2

- [121] R. Handurukande (1976) : The Mañicūḍa Study, 『仏教研究』第5号, 293-285頁。
- [122] Matsunami 431の写本は、目録の記事によれば, Sarvajñamitrāvadāna の他の写本とは一致しない第2, 第3章の写本である。また, Iwamoto 21の Sarvajñamitrāpādāvadāna という写本は, 第1章は Śricandrasenorājāvadāna とあり, 他の写本の章名と合うが, しかし第2章から第6章までは章名がなく, 第7章は Caturvi[m]śāvasthitanimantranau(sic)となっている。これも別のリセクションであろうか。
- [123] Michael Hahn (1982) : Die Subhāṣitaratnakaraṇḍakakathā. Ein spätbuddhistischer Text zur Verdienstlehre, NAWG, Philol.-hist. Kl., Nr.9, S.330. なお Hahn は Sarvajñamitrāvadāna における SRKK の詩節の借用上の誤写が, SRKK の N₂ (NGMPP A399/18) 写本と広範囲に一致することを指摘する。このことは Sarvajñamitrāvadāna の成立が近代に近いことを物語る。
- [124] Hahn (1982) S.330, Anm.33によると, Matsunami 433の写本は, NGMPP B101/5の写本に直接依存しているようであるという。
- [125] Lakṣaityabimba-kathā は, Matsunami 321の記事によれば, Citravimśatyavadāna 中の Lakṣaityavratasṛṅgabherikathā の1ヴァージョンであるという。
- [126] B. H. Hodgson (1874) : *Essays on the Languages, Literature and Religion of Nepal*, London. p.17ff.
- [127] Rajendralala Mitra (1882) : *The Sanskrit Buddhist Literature of Nepal*, Calcutta. pp.249-259.
- [128] Haraprasād Śāstrī (1894) : Notes on the Svayambhū Purāṇam, *Journal and Text of the Buddhist Text Society of India*, Vol.II, Part II, pp.33-37.
- [129] Sylvain Lévi (1905) : *Le Népal. Étude historique d'un royaume hindou*, Vol.I, (AMG, Bibliothèque d'Etudes, Tome 17), Paris. pp.208-209.
- [130] L. de la Vallée Poussin (1893) : *Svayambhūpurāṇa, dixième chapitre*, (Recueil de travaux publiés par la faculté de philosophie et lettres, Université de Gand, 9), Gand/Louvain.
- [131] Haraprasād Śāstrī (1894-1900) : *The Vṛhat Svayambhū Purāṇam, containing the traditions of the Svayambhū Kṣetra in Nepāl*, (Bibliotheca Indica, work 133, nos. 837, 842, 846, 863, 880, 968 (completed)), Calcutta.
- [132] 氏家昭夫 (1976) : スヴァヤンブー生起の物語 — 「Svayambhū-Purāṇa」の解説ならびに第一〜第三章和訳, 『高野山大学論叢』11巻, 1-39頁。
- [133] L. de la Vallée Poussin (1894) : Mañicūḍāvadāna, as related in the fourth chapter of the Svayambhūpurāṇa [Paris, dev.78], JRAS, 1894, pp.297-319.
- [134] R. Handurukande (1967) : *Mañicūḍāvadāna being a Translation and Edition and Lokānanda, a Transliteration and Synopsis*, (Sacred Books of the Buddhists, Vol.24), London.
- [135] L. de la Vallée Poussin (1895) : Le Koṭikarṇāvadāna dans le Svayambhūpurāṇa, *Compte Rendu du III^e Congrès Scientifique International des Catholiques, Sect. VI*, Bruxelles, 1895, pp. 12-15.
- [136] 氏家 (1974) : ネパールの仏塔信仰について, 『日仏年報』39号, 85-101頁。
- [137]他に12章本の Svayambhūpurāṇa の写本かも知れぬ写本として, BSP tr241(3-216)[193 fols.]と pra245(3-217)[86 fols.]がある。
- [138] 作品名を Vicitrakarṇikāvadāna-mālā と呼ぶのは間違いのようである。写本カタログで調べる限り, ほとんどの写本が Vicitrakarṇikāvadāna と記している。大体「avadānamālā 類」の一般的特徴は, 全部が韻文で書かれていることにあるが, 一方 Vk.には, かなりの散文部分が入っている。
- [139] J. S. Speyer (1909) : *Avadānaṭṭakā*, Vol.II, (Bibl. Bud., III), St.-Petersbourg, p.XCIII-C.

108

- 140) T. R. Chopra が既に, Matsunami 369の写本では第24章, Matsunami 372の写本では第23章にあ
 141) たる, *Mṛgasya kathā* を校訂したっているという。M. Hahn : *Der grosse Legendenkranz (Mahaj-
 142) jātakamālā)*, Wiesbaden, 1985, S.20を参照。
 143) Hans Jørgensen (1931) : *Vicīṭrakarmṇīkāvadānoddhṛta. A Collection of Buddhistic Legends,
 144) Nevārī Text, edited and translated into English*, (Oriental Translation Fund, New Series, Vol.
 145) XXXI), London.
 146) 岩本 (1967) : 『仏教説話研究序説』, 第4章第4節。他の写本カタログでは, Vk.の詩形改稿本は
 147) 特に報告されていない。ただし, Matsunami 371, 373の2写本が特に「Śloka」とカタログに記され
 148) ているのが気になる。
 149) 高木諄元 (1982) : 釈迦牟尼仏前生三十二本生鬘, 『原典批判的研究 (高野山大学昭和56年度研究報
 150) 告書)』, 2-7頁。
 151) 高岡マイクロフィルムは, 大正大学および高野山大学にあり, 筆者はこの稿を書くにあたり, 北
 152) 條賢三博士に特に便宜を図っていただき, 大正大学総合仏教研究所の同フィルムを使わせていただい
 153) た。
 154) 全く同じ編集方針で編まれた作品集として, NGMPP-Card の E1456/1-1457/1に, Dvātriṃ-
 155) śajjanmakathā という, 681葉から成る Newārī 語の説話集がある。

四校

018印 1~8
第5章 第4節

梵語仏典の研究
(I)

□§4. 単立の Avadāna・拾遺

1

□§4. 単立の Avadāna・拾遺

□

A. 単立の avadāna

□ 大きな avadāna 集成の中に、一つの章として吸収されることが時折 1・2 の写本で起こった
4 としても、大抵の場合は独立した作品と見做されて、写本が単独に伝承されてきた、1 話か 2 話
□ から成る単品の avadāna 作品を、「単立の avadāna」として、以下に挙げる。

□

1. Kaṭhināvadāna

□ 10 葉前後の散文の作品で、内容梗概は SBLN p.284-5 にある。Kaṭhināvadāna は Almuth D-
□ egener (1989)¹⁾ の研究があり、Indica et Tibetica の第16巻として出版された。

□ Skt.MSS.: SBLN p.284; Goshima・Noguchi 12; ASB p.245; Bendall Add.1418; Takaoka

□ KA 15-5; Iwamoto 14-3; Filliozat 20[Kaṭhināvadāna-parikarmakathā]; Filliozat 56-57

□ [Divyāvadānamālā, Ch.8]; NGMPP-Card A119/13(=pa71), A119/15(=pa70), A119/16

□ (=pa69), E699/15, E1108/5, E1238/30[Kaṭhināvadāna-parikarmakathā]

□

2. Kārtikavratāvadāna

□ Ahorātravratākathā と Kārtikavratākathā の 2 話から構成されている、20~30 葉の規模の作
□ 品である。

□ Skt.MSS.: Matsunami 54, 96, 97, 98, 102-III; Filliozat 14; IASWR MBB-II-85; BSP tr.590

□ (1-150)=Bir 121=NGMPP-Card A119/4; NGMPP-Card A119/12(=ca2381), A338/17

□ (=dvi357), E1487/5, E1499/15

□

3. Citraṁśatyavadāna

□ = Lakṣacaittyavrata-Śṛṅgabherīkathā

□1 現在知られている Citravimśatyavadāna の写本の中身は例外なく (Lakṣacaityavrata-)Śrīga-
 □2 bherīkathā である。内容梗概は SBLN p.229-230にある。Śrīgabherīkathā は, Vratāvadāna-
 □3 mālā に属する Śrīgabherī(vrata-)avadāna とは一応区別される。SBLN p.231によれば, 後者
 □4 は前者を拡大増広したヴァージョンである。

□5 Skt.MSS.:

- 6 Citravimśatyavadāna(=Śrīgabherīkathā): Takaoka A32, 34; NGMPP-Card A918/5(=
- 7 pa8), H379/10
- 8 (Lakṣacaityavrata-)Śrīgabherīkathā: Matsunami 322, 323, 324, 390, 477-II; Goshima・No-
- 9 guchi 107; Iwamoto 3; Filliozat 133; Winternitz・Keith 1449-96; Bir 237; Durbar
- 10 p.159; SBLN p.229; BSP tr290(3-107)=NGMPP-Card B101/6, BSP tr594(3-108)
- 11 =NGMPP-Card B 101/13, BSP ca 1035(3-109)=NGMPP-Card A 125/15; ASB
- 12 p.255; Takaoka A28C[Newārī], CA40-2, CA40-3, KH5-1; NGMPP-Card A126/2
- 13 (=pa168)[Śrīgabherīyavadāna], A921/10(=pa16), B104/9(=pa8), D50/8[Newārī],
- 14 D50/10, D50/18, D57/9, E265/12, E265/13, E734/6, E1292/14[Newārī], E1476/4,
- 15 E1479/5, G56/13, H142/7, H168/1, H381/6, H382/11
- 16 Lakṣacaityavrata: IASWR MBB-II-60; NGMPP-Card B106/13(=ca1032)
- 17 Lakṣacaityakathā [Newārī]: BSP ca1035(3-1)=NGMPP-Card A859/9; Takaoka DH53;
- 18 NGMPP-Card E1841/5
- 19 Lakṣacaityavratapūṇyaprasāṃsā: Takaoka CH432; NGMPP-Card I 3/13

□20 4. Caityapuṅgala (Caityapuṅgava)

□21 caitya-vrata を説く經典である。内容梗概は SBLN pp.280-1にある。

- 22 Skt.MSS.: Filliozat 42; Bendall Add.1405; Cowell・Eggeling 22; Matsunami 128, 129; BSP
- 23 ca73(1-246)=NGMPP-Card B96/12; SBLN p.280=ASB p.246; NGMPP-Card H50/3,
- 24 H103/7
- 25 Caityapuṅgava-saṃkṣipta: BSP tr596(1-247)=Bir 49=NGMPP-Card B96/15
- 26 Caityapuṅgava-bhaṭṭāarakoddeśa [Vasudhārāvratākathā]: BSP tr302(1-248)=Durbar p.
- 27 174=NGMPP B100/12
- 28 Caityapuṅgala-sūtre puṇyānuśāṃsā: NGMPP-Card E392/2
- 29 (Caityapuṅgala-)Lakṣacaitya-sthāpanāphala [Skt.+Nw.]: NGMPP-Card D20/5
- 30 Caityapuṅgala-lakṣacaityavrata-varṇana: NGMPP-Card H50/3, H103/7

- Caityapungala [Newārī]: NGMPP-Card E406/3, E2372/18

□ 5. Piṇḍapātrāvadāna, Piṇḍapātrāvadānakathā

- Leo Both (1992) により²⁾詳細に研究され、テキスト校訂と独訳がなされた。Kapiśāvadāna を短縮して作られた作品であり、さまざまな版が区別できる。Leo Both は、次の6種類の版に、写本を分類した：

- ① Piṇḍapātrāvadānakathā の、全体が一部から成る版。
- ② Piṇḍapātrāvadānakathā の、二部から成る二言語 (Skt.+Nw.) 版。
- ③ Piṇḍapātrāvadānakathā の、最も短い版。
- ④ Piṇḍapātrāvadāna の、韻文だけを集めた版。
- ⑤ Piṇḍapātrāvadāna の、全体が二部から成る版。
- ⑥ Piṇḍapātrāvadāna の、全体が三話で構成される版。

□ Skt.MSS. :

- Resension ■ : Bendall Add.1535; Matsunami 172; Filliozat 74; SBLN p.195; NGMPP A919/10(=pa 7959), A919/9(=pa 7854)[Skt.+Nw.]; Iwamoto 14-2; BSP tr592(2-85)=Bir 188=NGMPP A919/11
- Resension ■ : NGMPP C74/2; Matsunami 74
- Resension ■ : NGMPP E874/4
- Resension ■ : NGMPP E1129/3, E1515/2
- Resension ■ : Goshima・Noguchi 68; Bendall Add.1305; Matsunami 73,102,241
- Resension ■ : IASWR MBB-II-2; NGMPP E699/18
- Both によって分類されなかった写本 : Śāstī 27[38 fols.]; Takaoka 15-2[29 fols.]; BSP tr290(2-84)[21 fols.] = Durbar p.162 = NGMPP A1338/3 = Bir 188[te29 0/8]; BSP tr295(2-83)[21 fols.] = Durbar p.168 = NGMPP B98/11[Pitṛpāśāvadāna] = Bir 188[te295/4]; Cowell・Eggeling 45[9 fols.]; Dogra 150[7 fols.]; NGMPP-Card C81/14[44 fols.], C81/15[35 fols.], E699/18[29 fols.], E2574/3[56 fols.]; Takaoka DH62[9 fols.]

□ 6. Maṇicūdāvadāna

- Maṇicūdāvadāna には多くの伝本があるが、それらの系統は Handurukande の一連の研究お³⁾

4
c.

□よび M. Hahn (1974) の研究によって、かなり解明された。⁴⁾ 現存する伝本としては、まず、最も□代表的な伝本として、(1) 単行の写本として、あるいは時に Divyāvadānamālā の中の1章とし□て伝わっている散文の伝本がある。そして(2) Svayambhūpurāṇa の12章本の第4章の韻文の伝□本、(3) その中に挿入された散文の伝本、(4) Kṣemendra の Avadānakalpalatā の第3章の伝本、□(5) Mahājātakamālā の第49章の伝本、(6) Maṇisailamāhātmya の中の伝本、(7) Kapīśāvadāna □の18章本の第17章の伝本、の7資料が梵本資料としてあり、その他、(8) チベット訳で残る戯曲□Lokānanda、(9) Newārī 語版の Maṇicūḍāvadānoddhṛta の伝本、もある。

□このうち、最も普及した(1)の散文の伝本は、Handurukande (1967) によって、校訂テキスト□と英訳が出版された。Handurukande が(1)の伝本を校訂するため用いた写本は、Bendall Add. □874, 1375, 1398 と SBLN p.162 と Filliozat 82の7写本、ならびに2本の Divyāvadānamālā の□写本 (SBLN p.304 と Filliozat 56-57) である。その後、Handurukande (1976) と (1987) は、19 □1267年のテキスト出版では参照できなかった新たな他の写本を出版本テキストと引き合わせて校合□を行い、異読を報告した。Handurukande (1976) で新たに校訂された写本は、Matsunami 277, □278, 279 と Goshima・Noguchi 78の4写本、ならびに Divyāvadānamālā の京大本 (Goshima・ □Noguchi 49) であり、Handurukande (1987) で新たに校訂された写本は Mironov 291の Lenin- □grad 写本である。

□(2)~(8)の伝本の研究については、その伝本が含まれている作品の箇所ですでに解説したので、 □ここでは繰り返さない。(9)の Newārī 語版の Maṇicūḍāvadānoddhṛta は、S. Lienhard (1963) □によって、⁵⁾ 校訂され、英訳された。

□Skt.MSS.: Filliozat 82; Mironov 291; Matsunami 277[Ch.31, Div.-m.?], 278[Ch.31, Div.- □m.?], ⁶⁾ 279; Goshima・Noguchi 78, 79; IASWR MBB-II-74; Bendall Add.874, 1375, 1398, □1680-IV; Śāstrī 24; SBLN p.162=ASB p.252; BSP tṛ245(2-146)=Bir 155=NGMPP- □Card B98/13; Takaoka A330, CA12-2, CH323, CH372, DH317; Nagao p.13; NGMPP- □Card C13/10, D50/17, D75/35, E1035/6, E1102/3, E1476/6[21 chs.], E1483/4, E1552/10, □E1848/3, H141/11, H141/13 □Maṇicūḍāvadāna [Newārī, often as a part of Aṣṭamīvrata]: BSP ca348(2-147)=NGM- □PP-Card A121/10-122/1=B688/5; Takaoka CH19, DH56, JN6H; NGMPP-Card D □6/9, D7/15, D19/7, E258/11, E274/13, E352/27, E364/6, E381/3, E385/10, E811/4, □E1084/12, E1095/1, E1311/4, E1428/1, E1437/4, E1483/9, E1551/5, E1552/5, E163 □0/10, E1671/16, E1698/2, E1711/20, E1848/15, H147/11, H379/13, H398/5, I11/1, □I21/13, I25/13 □Maṇicūḍāvadānoddhṛta [Newārī, often as a part of Aṣṭamīvrata]: NGMPP-Card E47/

↙
c

- 1 2, E109/26, E177/8, E215/2, E365/2, E531/13, E1093/6, H19/13, H48/3, H52/4-
- 2 53/1, H112/9, H127/13
- 3 Ahorātravratamahātmye Mañicūḍāvadānoddhṛta [Newārī]: Takaoka CH 94, CH 480;
- 4 NGMPP-Card E1085/14
- 5 Mañicūḍākathā: NGMPP-Card E492/40[72 fols.], G93/4[80 fols.]
- 6 [Mañicūḍākathā ?]: NGMPP-Card A1336/3(=śa2721)[2 fols., palm-leaf]

□7 7. Saccakāṭāvadāna, Saccak(r)atāḍanāvadāna

- 8 Saccak(r)a-tāḍanāvadāna は Matsunami p.145の記事によれば, Caitya についての仏陀と
- 9 Sucetana 長老の対話を内容とし, Caitya-puṅgava の一種であるらしい。大小2種のヴァージョ
- 10 ンが区別できる。Goshima・Noguchi 42の記事によれば, Tārācaityapuṅgavāvadāna という1
- 11 写本(30葉)は, Savvakatāḍanāvadāna と Tārācaityāvadānakathā の2話から構成されている。
- 12 このことから, Saccakāṭāvadāna の小さい方のヴァージョンは Tārācaityapuṅgavāvadāna とい
- 13 う作品の前半部である可能性がある。

□14 Skt.MSS.:

- 15 (a) Tārācaityapuṅgavāvadāna: Goshima・Noguchi 42
- 16 (b) Saccakāṭāvadāna: Filliozat 135[14 fols.], 136A[14 fols.]
- 17 Saccakāṭāvadāna-palikarmakathā: Takaoka CH275[22 fols.]
- 18 Saccak(r)atāḍanāvadāna: Matsunami 407[18 fols.]; IASWR MBB-II-4[26 fols.]
- 19 Sarvakatāḍanāvadāna: Cowell・Eggeling 11[20 fols.]
- 20 Saccakrāvadāna: NGMPP-Card B101/10(=pa73)
- 21 (c) [larger recension]
- 22 Saccakratāvadāna: Filliozat 137[76 fols.]
- 23 Saccakratāḍanakathā(=Viśvabhadrabodhisattvayathāvidhi-vihāracaityasthāpanakathā):
- 24 BSP tr393(3-124)=NGMPP-Card A124/3[52 fols.]; BSP tr657(3-125)=NGMPP-
- 25 Card B100/8[57 fols.]; Bir 301; Takaoka CA73; NGMPP-Card A228/1=A1378/13
- 26 (=tr696)

□27 8. Sucandrāvadāna

- 28 = Vasundhārāvratasarvavidhāna, Vasudhārākalpāvadānasūtra

7
C

□3 SBLN p.232に内容解説がある。vasudhārā-vrata を宣揚するための話である。作品名が Su-
 □4candrāvadāna であるか Vasundhārāvratasarvavidhāna であるか一定しないわけは、写本の末
 □5尾のコロフォンが iti Sucandro gṛhapatīḥ pṛcchati, śrī-vasudhārāvratasarvavidhānaṃ bhaga-
 □6vatā śākyamuninā tathāgatena bhāṣitaṃ samāptaṃ となっているからである。なお、Ratnāva-
 □7dānamālā の第34章 Sucandrāvadāna は、これらの単行の Sucandrāvadāna と同じであるかど
 □8うかは不明である。

□9Skt.MSS.:

- 10 Sucandrāvadāna/Vasundhārāvratasarvavidhāna: Matsunami 361, 362, 476; SBLN p.232;
- 11 Goshima・Noguchi 125; Bir 245; BSP tr590(3-179)=NGMPP-Card B101/14; BSP
- 12 tr302(3-180)=Durbar p.175=NGMPP B100/19[=Vasundhārāvratakathā]; Bendall
- 13 Add.1400; Dogra 189; IASWR MBB-II-286; Takaoka CA14-3, DH317C; NGMPP-
- 14 Card D29/10-30/1, E226/4, E462/12[Nw.?], E1258/4, E1260/17, E1474/2[Skt.+
- 15 Nw.], E1848/4
- 16 Vasudhārākalpāvadānasūtra[=Sucandrāvadāna]: Matsunami 355
- 17 Sucandragṛhapatikathā: BSP pra1123(3-178)=Bir 244=NGMPP-Card B101/15; NGM-
- 18 PP-Card E257/9, H169/6
- 19 Sucandragṛhapatikathā [Newārī, often as a part of Aṣṭamīvrata]: D18/4, E385/19, E
- 20 1376/3, E1479/6, E1630/7, E1768/25, H379/8

□21 9. Sumāgadhāvadāna

□22 Vratāvadānamālā の項を参照。(⇒p.100)

□21 B. 拾 遺

□23 本書では、1～2話の部分のみが、写本として独立して、単行の avadāna として伝承されて
 □24いる場合には、それが何らかの avadāna 集成に帰属することが推定できる限り、その集成の部
 □25分写本 (MSS. of Parts) として扱ったが、どの avadāna 集成に帰属するか不明である写本
 □26が、執筆の最後まで残らざるを得なかった。正体不明の説話の写本は、筆写年代の新しいネパー
 □27ル写本が多いが、その中には Newārī 語の説話の写本がかなり多く含まれている。梵文と Ne-
 □28wārī 語の写本の区別が、特に BSP や高岡カタログ等では厳密ではなく、そのため正体不明の

□説話の写本は、Newārī 語の写本ではないか疑ってみる必要がある。Newārī 語の説話の写本は、
 □一般に、作品名が -kathā と称する場合が多いが、しかし常にそうであるともいいきれないの
 □で、厄介である。Newārī 語で書かれた仏教説話のネパール写本は、あまりにも多いので、本書
 □ではとても扱いきれない。そのため、Newārī 語で書かれた説話であると判明した写本は、この
 □「拾遺」ではすべて切り捨てることにし、梵文の作品らしいものを以下に挙げることにする。

- Amṛtakarṇikāvadāna: Bir 16=NGMPP-Card A117/10(=tr655)
- Āryāvalokiteśvarāvadāna: IASWR MBB-II-140
- Upaguptāvadāna: Matsunami 171(fols. 390a7~405a2)⁷⁾
- Kathigāvatga-kathā (Kadhiśāvadāna): Takaoka CH95
- Kapilapātrāvadāna: Matsunami 73, 74
- Kaladīpadharmarājakathā: Takaoka CA7-3
- Kulacaryāvadāna: Matsunami 106
- Kusumākarāvadāna: Takaoka KA44G; NGMPP-Card E651/8
- Kṛṣikobrāhmaṇāvadāna: Takaoka CA44-2; NGMPP-Card E264/15
- (Śrī-)Candraseno rājāvadāna: Goshima・Noguchi 39; NGMPP-Card D65/15[16 fols.]
- Jalavāhanakathā: Takaoka KA44C
- Jyotiṣkāvadāna: BSP tr592(1-261)=NGMPP-Card B96/13
- Tīrthānusmṛtyavadāna: BSP tr366(1-286); Bir 268; NGMPP-Card A122/11(=tr755)
- Dīpaṃkaratathāgatasya piṇḍapātrāvadāna: Matsunami 172⁸⁾
- Dīpaṃkarabodhisattvasya piṇḍapātrādi-dānakathā: Takaoka CH192
- Dīpaṃkarāvadāna: Nagao p.12
- Nirvāṇakathā (?): Matsunami 266-IV
- Paśupatisamutpattikathā: BSP ca16(2-78)
- Piṇḍapātrādāna: Takaoka A118
- Piṇḍapātrādānagāthā: BSP tr364(2-86)
- Yajñādīkṛtapuṇyakathā (?): Matsunami 183-II
- Lakṣapūṣpārohaṇakathā: BSP tr666(3-4)=Bir 133=Durbar p.241=NGMPP A921/4
- Vamsāvalijātaka: Takaoka CH97
- Vyāghrī-kathā (or -jātaka ?): Matsunami 266-III
- Śambūkāvadāna: Bendall Add.1580 [palm-leaf]
- Śyāmā-jātaka & Kinnarī-jātaka: Cowell・Eggeling 16
- Samantacakṣuravadāna: BSP tr653(3-146)=Bir 213=Durbar p.242=NGMPP B101/9

- Sahakāropadeśa (Gopadatta 作): Filliozat 150
- Siṃhabhedikathā: IASWR MBB-II-109
- Subandhujātaka: IASWR MBB-II-216

四校

115号~

第5章 第4節 註

梵
語
仙
曲
の
研
究

(I)

- [1] 1) Almuth Degener (1989) : *Das Kaṭhināvadāna*. Eingeleitet, herausgegeben und übersetzt, (Indica et Tibetica, Bd. 16). Bonn.
- [2] 2) Leo Both (1992) : *Das Kapiśāvadāna und seine parallelversion im Piṇḍapātrāvadāna*. Inauguraldissertation. Bonn.
- [3] 3) R. Handurukande (1967) : *Mañicūḍāvadāna being a Translation and Edition and Lokānanda, a Transliteration and Synopsis*, (Sacred Books of the Buddhists, Vol. XXIV), London. [Review by J.W. de Jong : *IJJ*, XIII, No.2, 1971, pp.140-143.]; R. Handurukande (1976) : *The Mañicūḍa Study*, 『仏教研究』第5号, 293-285頁。; R. Handurukande (1987) : *The Leningrad Manuscript of the Mañicūḍāvadāna*, *The Sri Lanka Journal of the Humanities*, Vol. X, No.1 & 2, 1984 (published in 1987), pp.39-45.
- [4] 4) M. Hahn (1974) : *Candragomin. Lokānandanāṭaka*. Ein Beitrag zur klassischen indischen Schauspieldichtung. (Asiatische Forschungen, Bd.39), Wiesbaden. Einleitung, S.13-24.
- [5] 5) Siegfried Lienhard (1963) : *Mañicūḍāvadānoddhṛta. A Buddhist Re-birth Story in the Nevārī Language*, Stockholm/Göteborg/Uppsala. Lienhard が基づいた写本は Stiftung Preussischer Kulturbesitz, Tübinger Depot der ehemaligen Preussischen StaatsbibliothekにあるMS.or.fol.597である。
- [6] 6) Matsunami 277, 278のコロフォンには, 第31章とあり, 何かの avadāna 集の一部であることが推定されるが, *Divyāvadānamālā* の京大本 (Goshima・Noguchi 49) では, ちょうど第31章は *Mañicūḍāvadāna* である。
- [7] 7) Matsunami p.241によれば, 同名の *Avadānakalpalatā* 第72章, *Aśokāvadāna* 第2章とは異なる, 散文の作品である。
- [8] 8) Matsunami p.222によると, この写本は *Piṇḍapātrāvadāna* の別系の伝本である。

1
c
8

林
 語
 詩
 典

□新写本 Subhāṣitamahāratnāvadānamālā の価値について

- この写本はカトマンドゥの National Archives の写本カタログである Bṛhatsūcīpatram の第 7 部「仏教書関係(Bauddha-viśayaka)」の第 3 巻に出ている。その記載は次の通り：
- Subhāṣitamahāratnāvadānamālā
- Kramāṅka ca.952 Viśayāṅka 183
- 著者 (空白) ; ネパール紙 ; ネワリー文字 ; 行数 8 ; 大きさ 14×3 インチ ;
- 詩節(grantha)数 9175 ; 葉数 368 ; 完本。
- 8 カタログは、脚註において、作品の 41 の章名をすべて列挙している。しかし脚註に記されてい
- 9 る章の順序はでたらめである。また、カタログの記載では「完本」とあるが、実際は第 40～43 葉
- 10 が欠けている。
- 11 筆者はそのマイクロフィルムを本稿の校正中に入手するを得た。そのため、この写本にたいし
- 12 大急ぎで目を通す時間しかもてなかったのであるが、極めて重要な写本であることがわかったの
- 13 で、とりあえず知り得たことを大まかに報告することにした。この写本の価値は、次の点にあ
- 14 る。
- 15 この写本は、これまで京大にある 1 本の写本 (Goshima・Noguchi 87) しか知られていなか
- 16 った Ratnāvadānatattva [R.-tat.] の、第 2 の写本であり、そればかりか京大写本が全 26 章なの
- 17 に対し、新写本は全 41 章であることから、新たに 15 の章を得ることができる。さらに、その新た
- 18 に得られた 15 の章こそが、Avadānaśataka [Avs.] の 100 の章の詩形改稿本の、欠けていた最後
- 19 の破片であったことが知られる。従って、この写本の発見によって、Feer の研究以来探し求め
- 20 られてきた、Avs. の詩形改稿本を組み合わせる完成体にするための、最後のパーツが発見され
- 21 たことになる。つまり、Feer の推定どおり、Avs. の詩形改稿本たる Kalpadrumāvadānamālā
- 22 [K.-dr.] と Aśokāvadānamālā [Aś.-m.] と Ratnāvadānamālā [R.-m.] とが、ある完全なひと
- 23 つの作品を構築する部分であったことが確認でき、Avs. の 100 の章を詩形改稿してゆく作業計画
- 24 が、実は完成されていたことを知ることができる。
- 25 この点をこれまでの Avs. の詩形改稿本の研究史を振り返ることによって説明する。
- 26 Feer は、¹⁾Avs. と、後代の Avs. 系列の avadāna-mālā 類との関係を初めて指摘した。彼は
- 27 K.-dr. と、R.-m. と、Aś.-m. (の一部) の、三つの avadānamālā 文献が、Avs. の詩形改稿本とし
- 28 て、互いに密接な関わりをもつことを明らかにし、その対応関係を Avs. の章との対照表として

□示した。K.-dr.と、Avs.の章の対応は次の通り：

□	K.-dr.:	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	→
□	Avs. :	100	1	11	21	41	51	61	71	81	91	2	12	22	42	52	

□	→	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
□		62	72	82	92	54	15		33	16						

□ R.-m.(バリ写本)と、Avs.の章の対応は次の通り：

□	R.-m.:	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	→
□	Avs. :	3	13	23	43	53		63		73	83	93	4	14	24	44	32?	55	

11	→	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34
12		64	74	84	94													

□ Aś-m.と、Avs.の章の対照は次の通り：

□	Aś-m.:	14	15	16	17	18	19	20	21
□	Avs. :	10	20	30	50	60	70	80	90

□ これらの対照によって、K.-dr.は、10部類(varga)×10話から成る Avs.の、各部類(varga)の
 □第1と第2の話を、また、R.-m.は、その続きとして、Avs.の各部類の第3と第4の話を、ま
 □た、Aś-m. (第14～21章)は、Avs.の各部類の第10の話を詩形にした集成であることがわかる。

□ Feer は対応関係がわかった Avs.の章を表Aのごとくまとめている：

□ [表A]

□	Avs. (部類)	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X
□		1	11	21	—	41	51	61	71	81	91
□		2	12	22	—	42	52	62	72	82	92
□	K.-dr.		<15>		<33>		<54>				<100>
□			<16>								
□					<32?>						
□		3	13	23	—	43	53	63	73	83	93
□	R.-m.	4	14	24	—	44		64	74	84	94
□							<55>				
□	Aś-m.	10	20	30	—	50	60	70	80	90	—

□ Avs.の1000章の半分にあたる詩形改稿本が見つかったわけであり、これらの整然とした作品
 □間の規則性から、Feer は、これらの avadānamālā は本来、Avs.に詩形改稿を行ったある一つ

□の巨大な avadānamālā の作品の一部であったと推定した。その巨大な作品の名は、K.-dr. 写本
 □の末尾のコロフォンに ity aśoka-upaguptasambhāraṇe kalpadrumāvadānamālā samāptā //と
 □あることから、Aśoka-upagupta-sambhāraṇa (アショーカとウパグプタの会談) という名ではな
 □かったかと考えられた。²⁾

□その後、全26章から成る Ratnāvadānatattva [R.-tat.] が、高島 (1954) によって、Ratnāva-
 □dānamālā の12章の後に接続された形で、校訂出版された。Feer が知り得なかったこの R.-tat.
 □という作品は京大の1写本 (Goshima・Noguchi 87) のみで存した。R.-tat.と、Avs.との対照
 □は、高島自身によりなされた。³⁾

□ R.-tat : 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 →
 □ Avs. : 6 17 25 45 78 58 27 28 49 46 57

□ → 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26

□ 9 7 8 86 48 97 79 29 87 77

□これを見ると、Avs.の章を利用してゆく順序が上の三つの avadānamālā のようにはっきり残
 □っておらず、順序がひどく乱れている。しかし、R.-tat.で対応が見つかった Avs.の章と、上の
 □三つの avadānamālā で対応が見つかった Avs.の章との間に、重複はなく、R.-tat.は、Avs.の
 □各部類の第5～第9の話を詩形にした集成(の一部)であることがわかる。

□京大写本 R.-tat.において対応関係がわかった Avs.の章を、上にならって並べ変えてみると次
 □のようになる：

□ Avs.	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X
□			25		45					
□	6	17			46				86	
□ R.-tat.	7		27			57		77	87	97
□ (京大本)	8		28		48	58		78		
□	9		29		49			79		

□表に空きがめだつ。R.-tat.は、Avs.の各部類の第5～第9の話を詩形改稿した集成であるとし
 □ても、現在の形ではかなりの脱落があり、不完全な集成であるといえる。R.-tat.が Avs.の詩形
 □改稿本としてのあるべき章を欠いている作品であること、その不完全性は、Avs.から詩形改稿
 □がアト・ランダムに行われて途中で放り出されたためであるのか、それとも本来の完全な形・順
 □序が失われたためであるのか、その点が不明であった。従って、Avs.の100章を詩形改稿してゆ
 □く壮大な作業計画が、現実に完成されていたものであったのかどうかは京大写本でも、わからな
 □かったのである。

ところが、上で紹介した通り、京大写本1本でしか存在しないと思われていた R.-tat.には、第2の写本が見つかった。それが、新写本 Subhāṣitamahāratnāvadānamālā であり、その41の章は、京大本の有する26の章名をすべて内に含んでいる。この新写本の末尾のコロフォンを見ると、もともと Subhāṣitamahāratnāvadānamālā samāptaḥ と記されていたのが、後からわざわざ māla の語が tatve と書き替えられて、さらに vasundharāvratakathā samāptaḥ と書き加えられている。つまり Subhāṣitamahāratnāvadānatattva という作品名は、写本の書き直しによって出来たもので、新写本がコピーした原本にはその作品名はなかったのであり、本来の作品名は、Subhāṣitamahāratnāvadānamālā であつたとみることが出来る。新写本の最終章の本文の偈中の1箇所 (Fol.367b) にも、Subhāṣitamahāratnamālā という名が出ている。また京大本 R.-tat.も、本文の偈中の同じ箇所 (p.479) において、Subhāṣitamahāratnamālā と呼ばれている。また、京大本の写本では、最初の章の冒頭に、本文中において、Avadānatatvaṃ vakṣyāmi natvā taṃ śrīghanam gurum という偈の1文があり、そこに Avadānatatva という作品名が見られるのであるが、興味深いことに、新写本にはその文はなく (Fol.1b)、しかし写本の欄外において、後からわざわざ、その1文が別のペンで書き加えられているのである。また、新写本の第1章の章末のコロフォン (Fol.14a) でも、後から avadānatatve と横に書き加えられている。これらの修正が、後から作品名を変更しようと意図していることは明白である。また新写本 Subhāṣitamahāratnāvadānamālā は、京大本 R.-tat.より古い写本伝承に属する写本であるらしいことがわかる。しかし新写本と、京大本写本との伝承上の関係についての判断は、今後の、より綿密な両写本の比較研究を待たなくてはならない。

なお正しい作品名は Subhāṣitamahāratnāvadānamālā であるとしても、ここでは一応、普通の Ratnāvadānamālā の写本と区別するため、R.-tat.の新写本と呼ぶことにする。

新写本 R.-tat.の有する41章を、京大本 R.-tat.の26章と対応せしめ、さらに、高畠 (1954) が作った京大本と Avś.の章の対照表をベースにして、新写本と京大本と Avś.の章との、三者の対照表を試みに作ってみる：

新写本の章	京大本の同一の章	Avś.の対応する章
[1] Vāḍika	[1]	[6] Vāḍika
[2] Gāndharvika	[2]	[17] Stuti
[3] Sūkṣmatvaco	[3]	[25] Sūkṣmatvag
[4] Pretika	[4]	[45] Maudgalyāyana
[5] Śuka	—	[56] Śuka
[6] Priya	—	[65] Priya
[7] (写本には第7章がない。章の番号づけを間違えたようである)		

[8]	Kāśisundarikanyakā	—	[76] Kāśikasundarī
[9]	Gaṅgika	—	[98] Gaṅgika
[10]	Kacāṃgalā	[5]	[78] Kacāṃgalā
[11]	Dhanika	[6]	—
[12]	Raivata	[7]	—
[13]	Mahiṣa	[8]	[58] Mahiṣa
[14]	Nāvikā	[9]	[27] Nāvikā
[15]	Gandhamādāna	[10]	[28] Gandhamādāna
[16]	Pretika	[11]	[49] Putrā
[17]	Pretibhūtamaharddhika	[12]	[46] Uttara
[18]	Dūta	[13]	[57] Dūta
[19]	Tairthika	[14]	[9] Dhūpa
[20]	Mālika	[15]	[7] Padma
[21]	Pāñcālarāja	[16]	[8] Pañcāla
[22]	Upapāduka	[17]	[86] Aupapāduka
[23]	Yaśomitra	—	[85] Yaśomitra
[24]	Kapphaṇṇa	—	[88] Kapphiṇa
[25]	Saṃsārabhikṣu	—	[95] Saṃsāra
[26]	Guptika	—	[96] Guptika
[27]	Śītaprabha	—	[26] Śītaprabha
[28]	Kṣemā	[21]	[79] Kṣemā
[29]	Ārāmika	[22]	[29] Nirmala
[30]	Jātyandhapretika	—	[47] Jātyandhā
[31]	Śreṣṭhinām avadāna	—	— (?)
[32]	Anityatāsūtra	[18]	—
[33]	Śreṣṭhipretibhūta	[19]	[48] Śreṣṭhī
[34]	Virūpa	[20]	[97] Virūpa
[35]	Padmākṣa	—	[66] Padmākṣa
[36]	Dundubhisvara	—	[67] Dundubhisvara
[37]	Ekapeśijātaśatakumāra	—	[68] Putrāḥ
[38]	Sūrya	—	[69] Sūrya
[39]	Śobhita	[23]	[87] Śobhita

[40] Mukṭā	[24]	[77] Mukṭā
[41] Dhīmatī	[25]	—
[42] Vasuṃdharā	[26]	—

京大本 R.-tat.の26章はすべて新写本にもあること、新写本からはさらに京大本にない15の章が得られること、そしてその15の章のうち14の章が Avś.からの詩形改稿本であることが上の表から判明しよう。筆者が Avś.との対応を判明出来なかった残る1章は、第31章の Śreṣṭhināṃ avadāna なのであるが、章名から判断する限りでは、Avś.に対応する章はない。しかしこの章が Avś.のどれかの章と対応しているかどうかの最終的な判断は、今後の研究に待ちたい。

さて、新写本が京大本よりも Avś.の詩形改稿本を四章ほど多く含むことが確認されたわけであるが、この新たな Avś.の詩形改稿本の発見によって、従来知られた4つの文献にはふさぐことが出来なかった、Avś.の詩形改稿を受けていない章の「空き」が、大部分ふさがることになった。

新写本で対応関係がわかった Avś.の章を、順番を並べかえた上で、先の表Aに接続してみるのと次のようになる：

[表B]

Avś. (部類)	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X
	1	11	21	—	41	51	61	71	81	91
	2	12	22		42	52	62	72	82	92
K.-dr.		<15>		<33>		<54>				<100>
		<16>								
				<32?>						
	3	13	23		43	53	63	73	83	93
R.-m.	4	14	24	—	44		64	74	84	94
						<55>				
	—		25	—	45		65		85	95
	6		26	—	46	56	66	76	86	96
新写本	7	17	27	—	47	57	67	77	87	97
	8	—	28	—	48	58	68	78	88	98
	9	—	29	—	49	—	69	79	—	—
As.-m.	10	20	30	—	50	60	70	80	90	

□ この表Bをみて、次の三点が特に気づかれよう：

□ 第一点。Avs.の第4部類（第31～40章）に対応する章の詩形改稿が、新写本においても、見事に欠けている。この、第4部類の詩形改稿の欠落という不思議な符合は、それを「すべての詩形改稿がなされた後の時代に、Avs.の第4部類の章が付けられた」と解釈するにしろ、あるいは「すべての詩形改稿に基づいた Avs.の1系統の伝本にだけ、第4部類の章が欠けていた」と解釈するにしろ、とにかく、4種類の詩形改稿本の成立時期と地域は互いに大きくは隔たっていないことが推測される。同時代に一つの巨大な作品として作られた可能性も否定しきれない。

□ 第二点。新写本の章の順序は、京大本と同じく、Avs.から詩形改稿してゆく順序を、K.-dr.やR.-m.におけるほどの整然とした規則性をもって残してはいないが、話の順番の混乱は、内容の混乱を意味していない。順序がアト・ランダムであることは、みかけだけで、内容から見れば、Avs.の各部類の第5～第9の話が実に整然と詩形改稿されたものであることが、上の表の並べかえの結果からわかる。現在の順序は、ある時代に、再編集による章の並べかえを被ったものかと思われる。新写本の現在の姿が、本来の姿を完全には伝えてはいないことは、順序の乱ればかりでなく、5, 18, 19, 59, 75, 89, 99 の、あるべき七つの章が抜け落ちていることからわかる。

□ 第三点。K.-dr.と R.-m.は、それぞれ原則的に Avs.の各部類の第1・第2と、第3・第4の話を詩形改稿した作品集であるが、その原則に従っていない余計な章を幾つかもっていた。即ち、上の表でカッコでくくられた、〈15〉、〈16〉、〈33〉、〈54〉、〈100〉、〈32?〉、〈55〉の各章である。新写本においては、それらの、K.-dr.と R.-m.で余計に存在する、〈15〉、〈16〉、〈55〉の箇所がちょうど見事に欠けている。この整合性は偶然ではありえない。新写本は、K.-dr.と R.-m.と As.-m.が空けた部分にぴったりと接続し、全体を完結している、第4の詩形改稿本であることは確実となる。

□ ここで大きな問題が出てくる。これら4種類の Avs.の詩形改稿本は、一体、段階的・継起的に、別々に作られていった作品であるか、それとも初め一つの完成体であったものが、伝承の過程で、ばらばらになったものと見なすべきであるのか。

□ 上で指摘した、K.-dr.と R.-m.で余計に存在する、〈15〉、〈16〉、〈55〉の箇所が新写本 R.-tat.ではちょうど欠けているという不思議な符合も、K.-dr.と R.-m.が R.-tat.と泣き別れたためであるか、と解釈するならば同時成立説の根拠となるが、R.-tat.が、K.-dr.と R.-m.を補う形で成立したと解釈するならば、段階成立説の根拠となろう。

□ 段階成立説を支持するのは、これほど巨大な作品群が一举に成立したとは思えないことである。そして、段階的に成立していった事情のために、この、Kathāsaritsāgara に匹敵する巨大

1な韻文説話集は、完成し終えた後でさえも、部分の作品名だけを有して、統一的な作品名を有し
 2なかったのではないか。

3 同時完成説を支持するのは、(1)先に指摘した、4種類の Avs.の詩形改稿本のどれもが、Avs.
 4の第4部類にあたる章を同じように欠いていること、(2)4種類の Avs.の詩形改稿本が、全体の
 5バランスから見た場合、R.-m.と R.-tat.に7割を占められ、偏っていることである。

6 (2)の理由について、もうすこし説明しよう。R.-m.と R.-tat.はひとつづきの作品であり、本来
 7はひとつの作品であったかもしれない。R.-tat.という奇妙な名が仮の名である可能性は、先に述
 8べたように否定できず、R.-m.と R.-tat.の両者は、R.-m.あるいは Subhāṣitamahāratnāvadāna-
 9mālā の名で統一すべきであるかもしれない。岩本裕は、高島寛我が校訂テキストにおいて R.-
 10m.の13章以降を切り捨てて、代わりに R.-tat.を接続させてしまったことを批判したが、しかし
 11R.-tat.が R.-m.の一部であったことの可能性は否定していない。岩本の批判は、R.-tat.の冒頭の
 122話が、R.-m.の派生系の伝本においてしか見られないものであることから、その2話をもって、
 13R.-m.と R.-tat.とを接続させてしまう高島の処置が誤りであることを証明しただけである。共有
 14する章を接点として、両者を接続させることが誤りであったからといって、両者が本来、同一の
 15作品ではなかった、と決めつけてしまうことは出来ない。確かに、R.-tat.は内容的に R.-m.の続
 16篇なのである。R.-m.と R.-tat.とが本来はひとつの作品であったとすると、Avs.の詩形改稿本の
 177割が R.-m.であったことになる：

18	K.-dr.		Avs. 各部類の第1～2話を詩形改稿
19	R.-m.		各部類の第3～4話を詩形改稿
20	R.-tat.<R.-m.?		各部類の第5～9話を詩形改稿
21	Aś.-m.		各部類の第10話を詩形改稿

22 この全体のバランスから考えると、R.-m.は Avs.の各部類の第3～第9の話の詩形改稿を集
 23めた説話集なのではなく、全体に付けられた名前であった可能性もでてくる。残りの部分として
 24K.-dr.と Aś.-m.があるわけであるが、そのうち Aś.-m.は、Avs.を詩形改稿した作品集として、
 25初めから、Aś.-m.の名を冠してあったのではない。Avs.の各部類の第10の話の詩形改稿を集めた
 26説話は、Aś.-m.の中の一部(第14～21章)にすぎず、しかもその部分は、本来 Aś.-m.成立の
 27中核部であったとは見なし得ない。Avs.を詩形改稿した部分は、付加としてどこから持って
 28こられたものであらうと思われる。つまり、Aś.-m.のその部分は、R.-m.とばらばらに成立した
 29のではないのではないか、完成体としての巨大な作品としての一部が Aś.-m.に伝わっただけで
 30はないかという疑いが出てくる。

31 さらに、K.-dr.は Avs.の各部類の第1～第2の話の詩形改稿を集めて一番目に成立した説話
 32集であったということも疑問の余地がある。なぜなら、〈15〉、〈16〉、〈33〉、〈54〉という半端な

□章が K.-dr. に付加されているわけであるが、それらの半端な章の存在は、Avs. の全体の詩形改稿がすでに背後に存在していたことをうかがわせるものとして捉えることもできるからである。

□〈15〉、〈16〉、〈33〉、〈54〉の半端な章が、背後にある Avs. の全体的な詩形改稿本から K.-dr. が□分離する際に残ったと見なすなら、K.-dr. は R.-m. と泣き別れた部分の仮の作品名であり、全体□の作品名は R.-m. であったことも考えられないでもない。

6 なお、パーツが段階的に成立していつて、ある時代に統一体として完成したものが、完本として伝承するには大きすぎるため、次第に流布の過程で、元のパーツの形に戻ってばらばらになる⁸という、段階成立説と同時成立説の両方を兼ねた、三番目の可能性も、十分ありうるであろう。

三校

116号 1
附篇註

林
凡
語
凡
典

- 1) L. Feer : Le Livre des cent Légendes (Avadāna-ṣataka), JA, Juillet 1879, pp.141-189, et Oct.
□ -Nov. pp.273-307. ; L. Feer : *Avadānaṣataka, Cent légendes (bouddhiques), traduites du sanskrit,*
□ (AMG, XVIII), Paris, 1891, pp.xvi-xxvii.
□ 2) しかし、無関係な作品である Bhadrakalpāvadāna においても, Aśoka-upagupta-saṃvāde あるい
□ は Aśoka-upagupta-saṃbhāṣaṇe というコロフォンの書き方がされているのを考え合わせると (v.
□ Matsunami pp.99, 169), Feer のいう Aśoka-upagupta-sambhāraṇe という言葉が固有名詞であるこ
□ とを、私は疑問視せざるを得ない。
□ 3) Kanga Takahata : *Ratnamālāvadāna. A Garland of Precious Gems*, Tokyo, 1954, p.viii.